

## 第9章 江の浦式土器・テバフ式土器の新資料とその検討 ―アムール河口部・サハリンの編年―

### 1. 研究の経過と本章の目的

北海道やサハリン南部のオホーツク土器のうち、刻文系の土器については、アムール流域の靺鞨系土器との類似が古くから指摘されてきた（大塚 1968、大塚ほか 1975）。しかし、大陸とサハリン・北海道間の土器型式交渉については、特にアムール河口部やサハリン北部の資料が限られていたことから、具体的な実態は長らく不明であった。大陸とサハリンの接点となるアムール河口部が、いわば「ミッシング・リンク」の状態となっていたわけである。

アムール河口部における研究史はデリュージン氏のまとめに詳しいが（デリュージン 1999）、1980 年代以前はロシア側でいくつかの断片的な報告等がなされてきたのみであった。近年になってコピチコ氏はそれまでの調査成果に基づき、初期鉄器時代文化として「テバフ文化」を提唱した（К о п ы т ь к о 1989）。この「テバフ文化」の標式遺跡である、アムール河口部テバフ遺跡の資料を日本に紹介したのが臼杵勲氏である（臼杵 1990）。臼杵氏はテバフ遺跡出土土器群を「テバフⅠ群」「テバフⅡ群」の二型式に分類し、前者はサハリンの江の浦 A 式土器（伊東 1942）とほぼ同じであること、後者はサハリンの南貝塚式併行と考えられるが在地色が強いことを指摘した。その上で氏はアムール流域とサハリン・北海道の編年とを対比させ、両地域を繋ぐ広域編年を提示した。資料が限られていた当時、「ミッシング・リンク」に相当する資料が紹介された意義はきわめて大きく、また、広域編年を具体的かつ詳細に論じたという点でも氏の論文は画期的なものであった。しかしその後も資料の追加が少なかったためか、臼杵氏の提起した広域編年は最近まで議論の対象となることはほとんどなかった。

最近になってようやくアムール河口部の調査研究は進展し始めている。なかでもデリュージン氏はこの地域の土器群を集成し、複数の系統が絡み合うこの地域の編年を整理した上で型式交渉の内容を具体的に考察している（デリュージン 1999、デリュージン 2003）。氏の研究によってこの地域の編年研究は大きく前進したが、氏の編年の一部に対しては異論も出されている（臼杵 1999）。このように、アムール河口部におけるオホーツク文化併行期土器の編年に関しては、未確定部分が多いのが現状である。

以上の現状を踏まえ、最近ではアムール河口部のオホーツク文化の実態を把握すべくニコラエフスク空港 1 遺跡で日ロ共同の発掘調査が行われている（熊木ほか 2002、臼杵・熊木 2003）。筆者も調査に参加し、多数のオホーツク土器・テバフ式土器の出土をみた。正式報告は現在作成中であるが、公刊されればアムール河口部では希有なまとまった資料となるのみならず、サハリンを含めた宗谷海峡以北地域全体のなかでも出土土器の全容が把握できる数少ない資料となる。始めに本章ではこの資料の概要を報告し、その内容をもとにアムール河口部編年を再検討する。

次にこのアムール河口部編年と、前章までの北海道編年の成果に基づいて、サハリンの江の浦式土器についても編年を検討する。サハリン編年を再考しようとする試みは資料的な制約もあってこれまで低調であったが、アムール河口部や北海道での研究の進捗によって、南北両側面からサハリンを射程におくことが可能となってきたのである。

アムール河口部とサハリンにまたがって広がる江の浦式土器の編年を整理し、江の浦式土器の展開と地域化の過程を緻密にトレースすることが、本章の目的である。江の浦式土器の展開過程における周辺地域との型式交渉やその変化、さらに地域型式圏の形成過程を追うことによって、オホーツク文化期における地域間交流史の一側面に光を当ててゆくことにしたい。

## 2. アムール河口部における編年研究の現状

現在、アムール河口部地域におけるオホーツク文化併行期の土器型式編年に関しては、デリュージェン氏の編年（デリュージェン 1999、デリュージェン 2003）と、デリュージェン編年を基礎に一部を修正した臼杵氏及び筆者の編年（臼杵 1999、臼杵・熊木 2003(注 1)）の二つの説が提示されている。まずデリュージェン氏の説についてまとめておこう。氏はアムール河口部の関連資料を集成して、当該期の土器にはオホーツク文化類似の土器と在地の「テバフ式土器」との 2 系統があることを指摘し、両系統の併行関係に着目しつつ編年を組み立てた（第 99 図表 1）。オホーツク文化系統では江の浦 B 式→江の浦 A 式→南貝塚式という、サハリンと同一の型式と編年が認められることを指摘している。一方テバフ式については a 類→b 類→c 類という分類・編年を提起し、丸底から平底へ／スタンプ文が単純から複雑へ、という変遷観を示した。そしてラザレフ 2 遺跡で同層位から出土したことなどを根拠に、江の浦 A 式とテバフ式 c 類を併行させている。さらにテバフ式土器の系統についてヤクーチャやオホーツク海北西岸の資料との関連を指摘している。

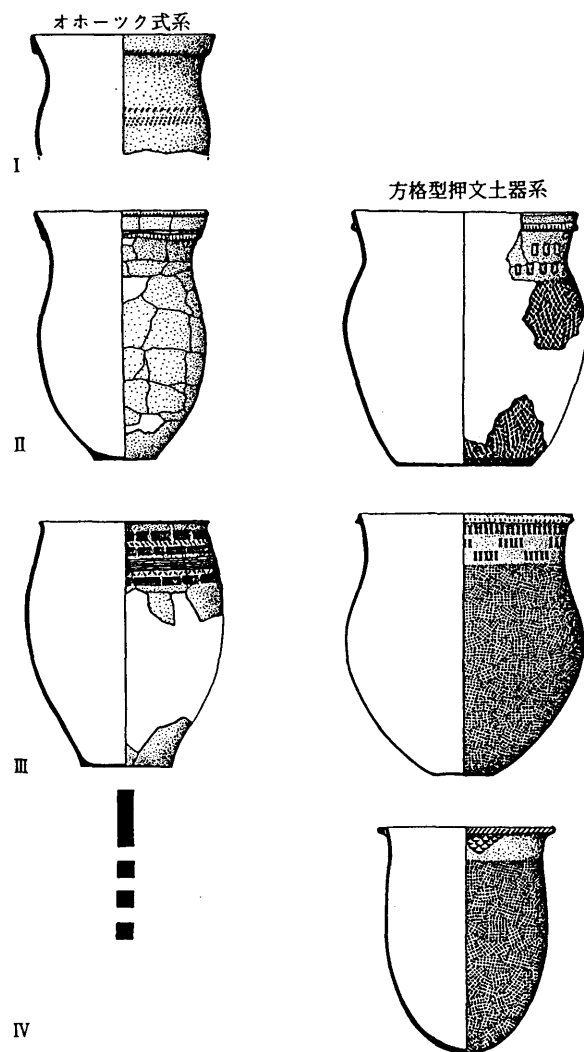
一方臼杵氏は、デリュージェン氏の 2 系統説と氏の設定した江の浦 A 式・テバフ式 c 類の併行関係に同意した上で、テバフ式土器に対してはオホーツク土器との型式学的対比をもとに c 類から a 類という逆の変遷を想定した（臼杵 1999、臼杵・熊木 2003）（第 99 図表 2 及び第 99 図下）。

表1 デリューギン氏によるアムール河口部編年

時期	オホーツク式系 (サハリンとほぼ共通)	テバフ式系 (方格型押文を持つ在地のもの)
江の浦期	江の浦B式 江の浦A式	テバフ式a類 テバフ式b類 テバフ式c類
南貝塚期	南貝塚式	—

表2 臼杵氏による修正案

時期	オホーツク式系 (サハリンとほぼ共通)	テバフ式系 (方格型押文を持つ在地のもの)
I 期	江の浦B式	—
II 期	江の浦A式	テバフ式c類
III 期	南貝塚式	テバフ式b類
IV 期	—	テバフ式a類



第 99 図 アムール河口部編年をめぐる論争

(土器図版は表 2「臼杵氏による修正案」を示したもの)

これに対してはデリューギン氏から再反論がなされたが（デリューギン 2003）、どちらが正しいか決着が付かないまま現在に至っている。

今日のアムール河口部編年の基礎を築いたのはデリューギン氏の功績であり、オホーツク式とテバフ式の 2 系統を設定した点や、テバフ式土器の型式組列（a 類－b 類－c 類）に着目した点はまさに卓見であった。臼杵氏・筆者の修正案は細かな点を問題にしたに過ぎないともいえるが、異系統の型式が複雑に絡み合っている地域であるからこそ、各系統間の縦横の関係（例えば、どちらが古い、どちらがどちらに影響を与えたか、等の問題）に対する見解の相違が重大な意義を持つてくる。具体的な検討は後述することとし、ここでは二つの異なる説がある現状を確認しておこう。

### 3. ニコラエフスク空港 1 遺跡出土土器とアムール河口部の編年

#### 1) 資料の概要

ニコラエフスク空港 1 遺跡は、ロシア連邦ハバロフスク地区ニコラエフスク・ナ・アムーレ市の西郊、ニコラエフスク空港の南に位置する。1972 年に遺跡の存在が確認され（Г е р у с 1977）、1998 年には竪穴住居とみられる 2 基の凹みが再確認された（臼杵ほか 1999）。本格的な調査は 2001 年に日ロ共同で実施されており、2 基の凹みのうちの大型の 1 基が発掘され、中央に炉を持つ 5 角形の竪穴住居が検出された。

この 2001 年度調査では、住居址内外から江の浦 A 式やテバフ式土器を中心とする多数の土器が、住居址覆土から靺鞨系遺物である青銅製鐸が、それぞれ出土した。他に石器・土製品等も出土している。これらの調査成果は一部が概報として公表されている（熊木ほか 2002、臼杵・熊木 2003）が、正式な報告は現在未刊であり、2004 年に刊行予定である。本章で分析対象とするのは、この 2001 年度調査で出土したオホーツク土器とテバフ式土器である（注 2）。

これらの土器群の出土状態について述べておこう。発掘調査の際、住居址覆土～床面・住居址外とも遺物を層位的に取り上げ、平面的な出土位置もかなりの程度記録したが、層位的にも平面的にも特定の土器型式がまとまって出土する状況を見出すことは難しかった（注 3）。このため以下の考察では主に型式学的側面からの分析・編年を行うことにする。層位的観点からの検討は正式報告時の課題となろう（注 4）。

#### 2) 型式分類

まずは資料全体をオホーツク式系統、テバフ式系統、両者の折衷、の 3 群に大別し、各々につ

いて細別を行う。

a) オホーツク式系統

オホーツク式系統の土器型式のうち、本遺跡で多数を占めるのは、伊東信雄氏の設定した江の浦 B 式と江の浦 A 式である（伊東 1942）。

江の浦 B 式と A 式は、型式設定の時点で B 式→A 式という編年が示されたが、その後、B 式と A 式は「一連の土器群」で細別は困難とする意見も出されていた（天野 1978a）。しかし筆者は、臼杵氏の再検討（臼杵 1990）で示されたように細別は可能と考えてきた。ここで新たに提起するのは、B 式・A 式の 2 細別よりさらに細かい 3 段階の細別である。3 細別の意図をあらかじめ説明しておこう。まずこの細別は「一つの遺跡内での型式的なまとまり」を根拠としている、という点で型式の実態に即したものである。次に、従来の 2 細別よりも 3 細別の方が、地域間の交渉が段階的に変化するプロセスをすっきりと理解しやすくなるという利点がある。なお細別の根拠や先学の編年との対比についてはサハリン編年の項で後述することとし、ここでは簡単なコメントに止める。

オホーツク式系土器の胎土についても述べておこう。臼杵氏が指摘したように（臼杵 1999）、アムール河口部のオホーツク式系土器の胎土には、金雲母が多く含まれるというこの地域独自の特徴がみられる。サハリンのオホーツク土器とは異なる特徴として注目されよう。ちなみにこの特徴はアムール河口部のテバフ式系土器の胎土にも共通している。両者共に在地の製作であることを示す特徴としてとらえておきたい。

i) 江の浦式河口部 1 類土器（第 100 図 1～11）

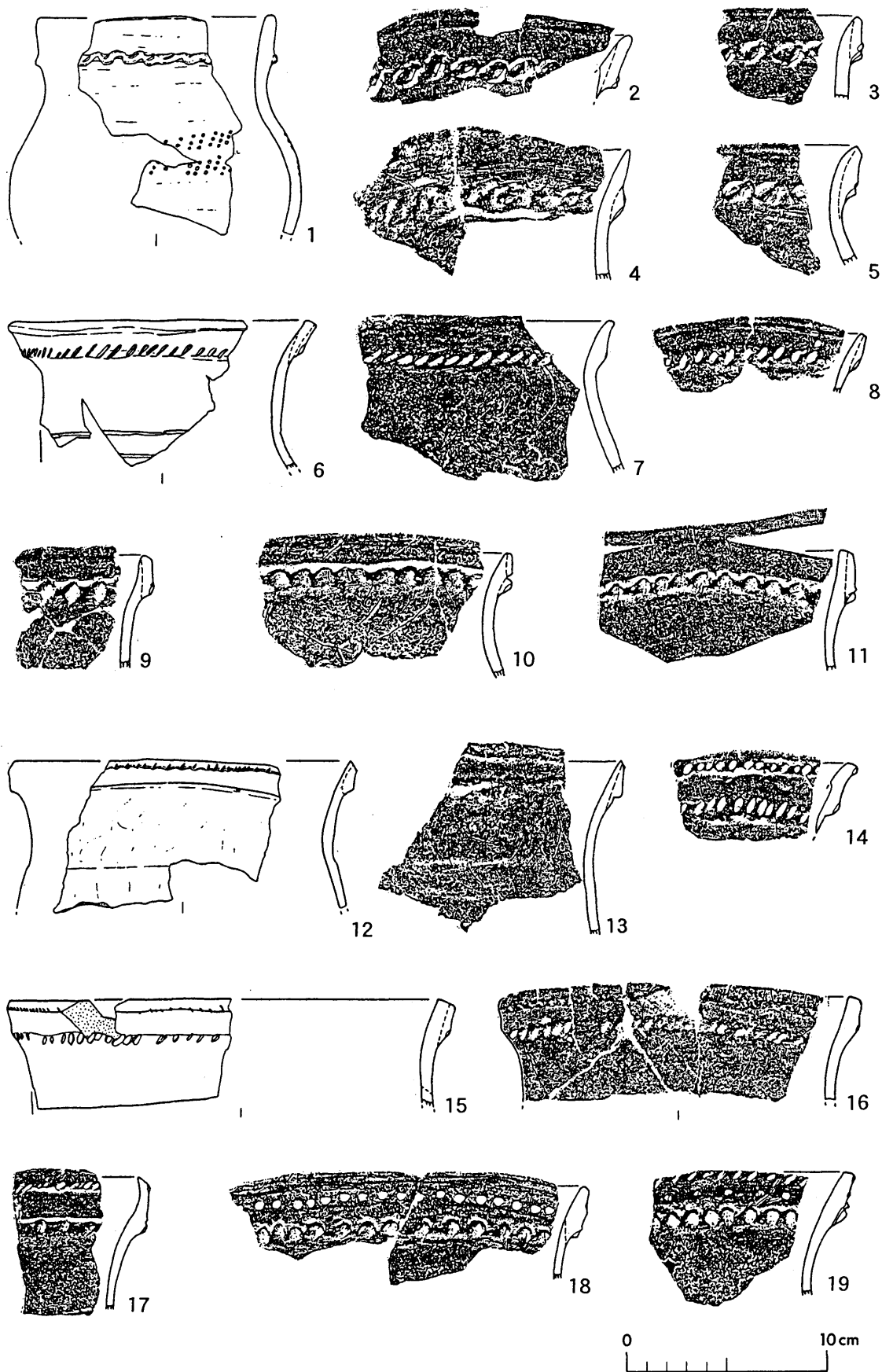
このグループは、口縁部肥厚帯の形態と口縁部文様の施文位置を指標として設定した。伊東編年では江の浦 B 式の一部、臼杵編年でも江の浦 B 式に対比される。

器形：

肥厚帯は、薄くて断面三角形ないしは稜状を呈し、口縁端部よりやや低い位置に粘土紐を貼り付けて整形したものを基本とする(注 5)。口唇面の面取りは無い個体が多い。

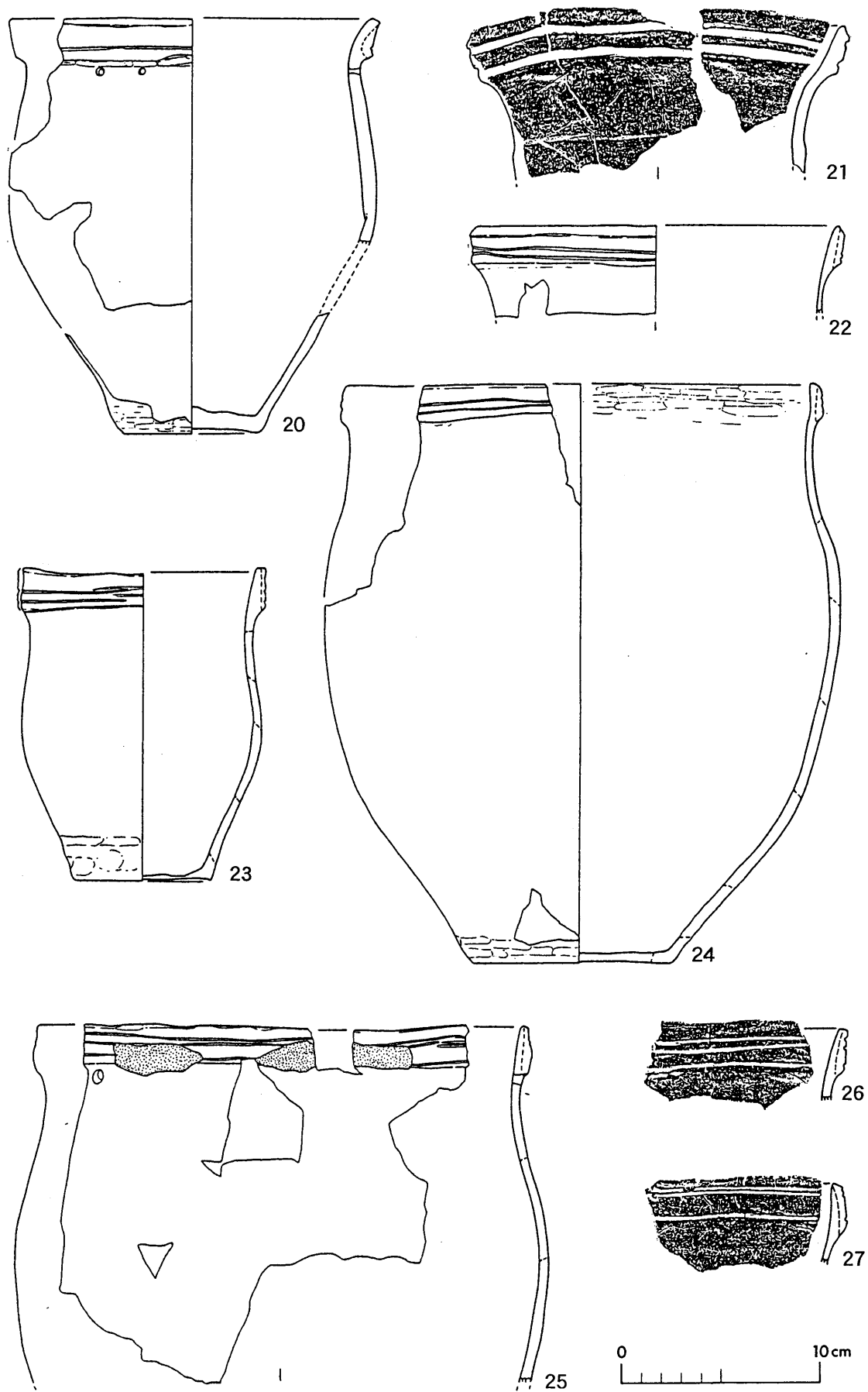
文様：

口縁部文様の施文位置であるが、肥厚帯の下縁にのみ施文されるものをこのグループとした。口縁部の文様要素については、刻文系のみのもものと、沈線文と刻文系とが複合したもの二者がある。前者には二本の指先でつまんでひねり施文する爪形文（第 100 図 1～5）、斜めの刻文（第 100 図 6～8）などがある。後者には、肥厚帯下縁に太い沈線を引き、その上から刻文や爪形文を



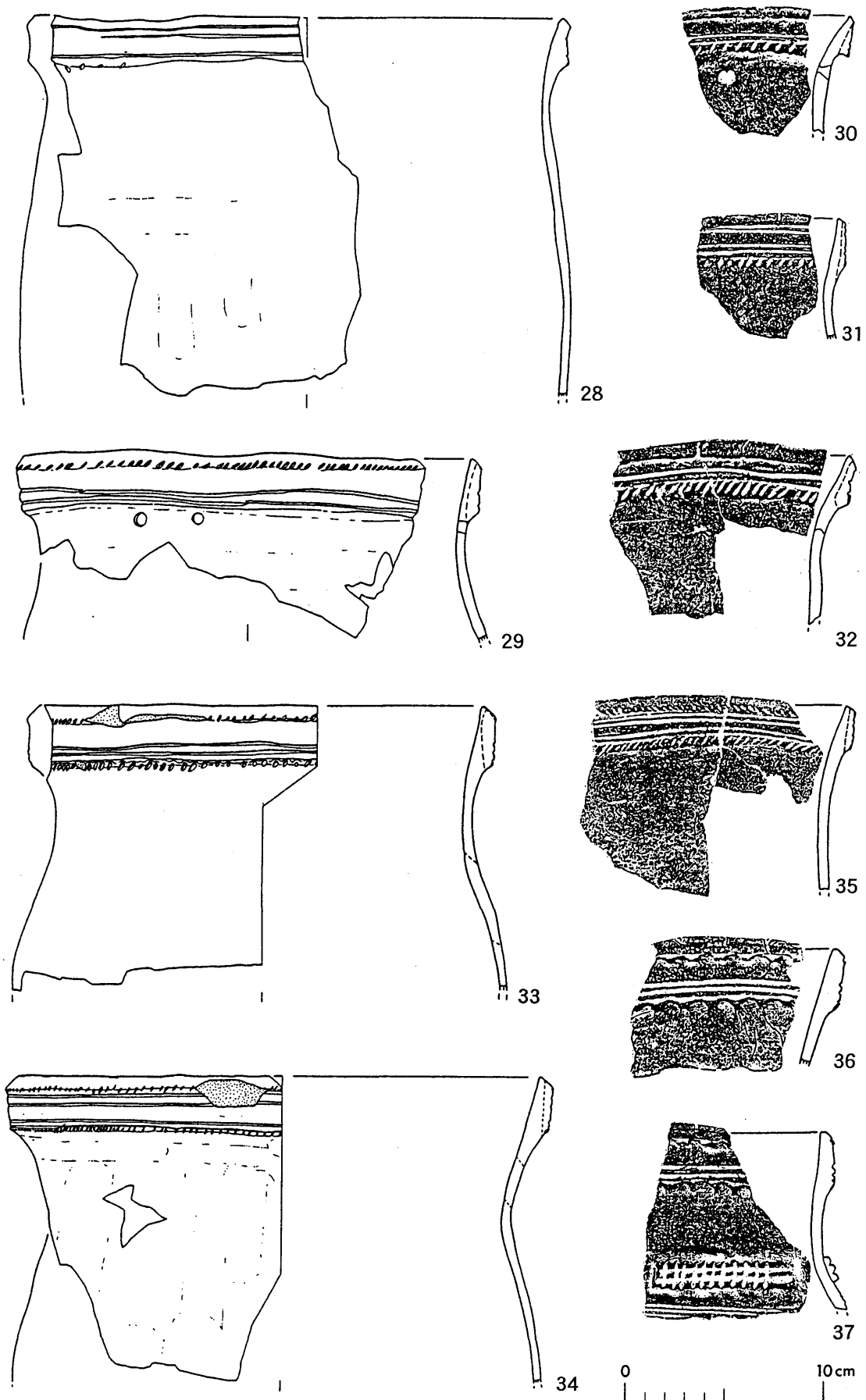
第 100 図 ニコラエフスク空港 1 遺跡出土土器群 (1)

1~11 : 江の浦式河口部 1 類 12~19 : 江の浦式河口部 2 類



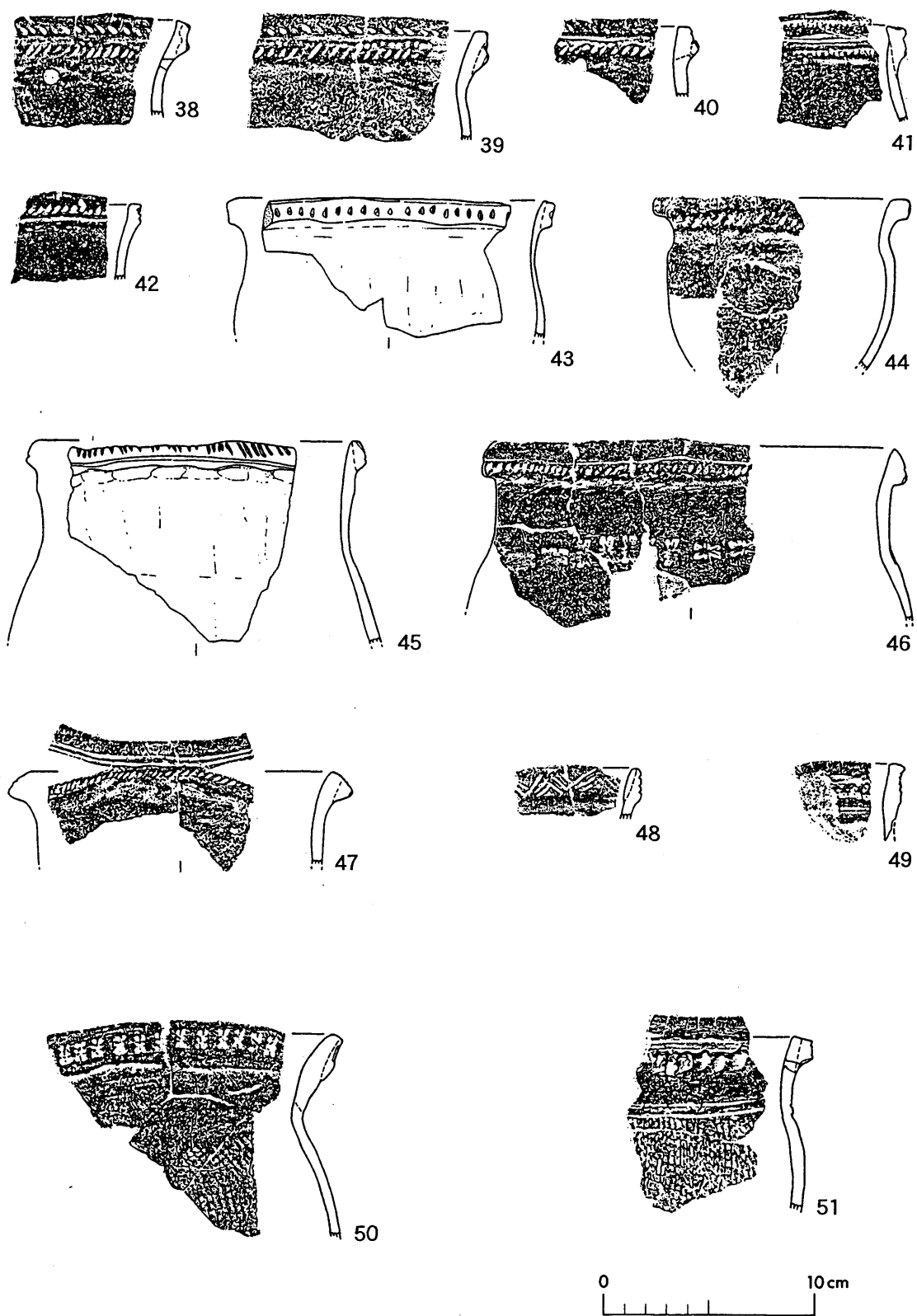
第 101 図 ニコラエフスク空港 1 遺跡出土土器群 (2)

20～27：江の浦式河口部 2 類



第 102 図 ニコラエフスク空港 1 遺跡出土土器群 (3)

28~37 : 江の浦式河口部 2 類



第 103 図 ニコラエフスク空港 1 遺跡出土土器群 (4)

38～48 : 江の浦式河口部 3 類 49 : その他オホーツク土器

50・51 : オホーツク式系統とテバフ式系統の折衷土器

施文するもの（第 100 図 9）、肥厚帯下縁に接して粘土紐を貼り付け、両者の接する間に沈線を引き、沈線の下方から上方に向かって刺突文や爪形文を施文するもの（第 100 図 10～11）などがある。なお後者の文様要素は次の「江の浦式河口部 2 類」と関連が強いものであり、若干新しい段階の土器群と捉えるべきかも知れない。

ii) 江の浦式河口部 2 類土器（第 100 図 12～19、第 101 図、第 102 図）

ニコラエフスク空港 1 遺跡で最も多数を占める土器群である。1 類との区別は、やはり口縁部肥厚帯の形態・口縁部文様の施文位置を指標としている。この 2 類は伊東編年との対比が難しい。文様の特徵でみれば江の浦 B 式となる一方、肥厚帯の形態は江の浦 A 式に近い。B 式と A 式の間といえよう。臼杵編年では肥厚帯の形態・製作技法が重視されるため分類上は江の浦 A 式になるが、臼杵氏自身が「A 式の初期の段階」（臼杵 1999：32）と述べているように、A 式でもより古手に位置づけられる。

器形：

肥厚帯は 1 類よりも厚く、断面長方形となるものをこのグループの指標とする。口唇面に面取りを施し、その面が外傾するものが多い。

文様：

口縁部の施文位置は、肥厚帯の上縁・下縁を中心に施文されるものをこのグループの指標とする。口縁部文様要素には、刻文や爪形文、刺突文を施すもの（第 100 図 12～19）、肥厚帯上に沈線を数条施すもの（第 101 図 20～27）、両者を複合施文するもの（第 102 図 28～37）がある。ちなみにやや内陸のテバフ遺跡では、摩擦式浮文や櫛歯文なども確認されている（臼杵 1990）（注 6）。

なお、土器の肩部には貼付文が施される例がある（第 102 図 37）。

iii) 江の浦式河口部 3 類土器（第 103 図 38～48）

2 類との区別は口縁部肥厚帯の形態を指標とする。伊東編年・臼杵編年とも江の浦 A 式に対比される。しかし、サハリンの典型的な江の浦 A 式にみられる幅広の肥厚帯を持つ例は確認されておらず、さらに刻文・沈線文の文様要素の長さが短いなど、サハリンと比較すると口縁部の装飾がやや地味である。この点にはテバフ式 b 類土器との関連で注目しておく。

器形：

肥厚帯は、幅が狭くて厚く、断面形が方形の突帯状を呈するものをこのグループとする。

文様：

突帯の全面に、刻文、もしくは刻文と沈線文が複合施文される。第 103 図 45～47 の土器では

突帯が断面三角形を呈し、後述のテバフ式 b 類に近くなっているが、テバフ b 類とは異なり胴部以下に叩き目は見られない。突帯上の文様等から判断して、45～47 もこのグループに含めておく。46 では胴部にスタンプ文が出現している。スタンプ文の採用はこの時期からと考えておきたい。

#### iv) その他のオホーツク式系土器 (第 103 図 49)

第 103 図 49 は、口縁部の肥厚帯が薄く幅の広い点で他の類とやや異なっている。口縁部文様は、肥厚帯の全面に櫛歯文、押引文、沈線文が施されている。器形・文様とも南貝塚式との関連が指摘できるが、典型的な南貝塚式とは異なる土器である。

南貝塚式に関連する可能性のある土器は、ニコラエフスク空港 1 遺跡ではこの 1 点のみしか出土していない。

#### b) テバフ式系統

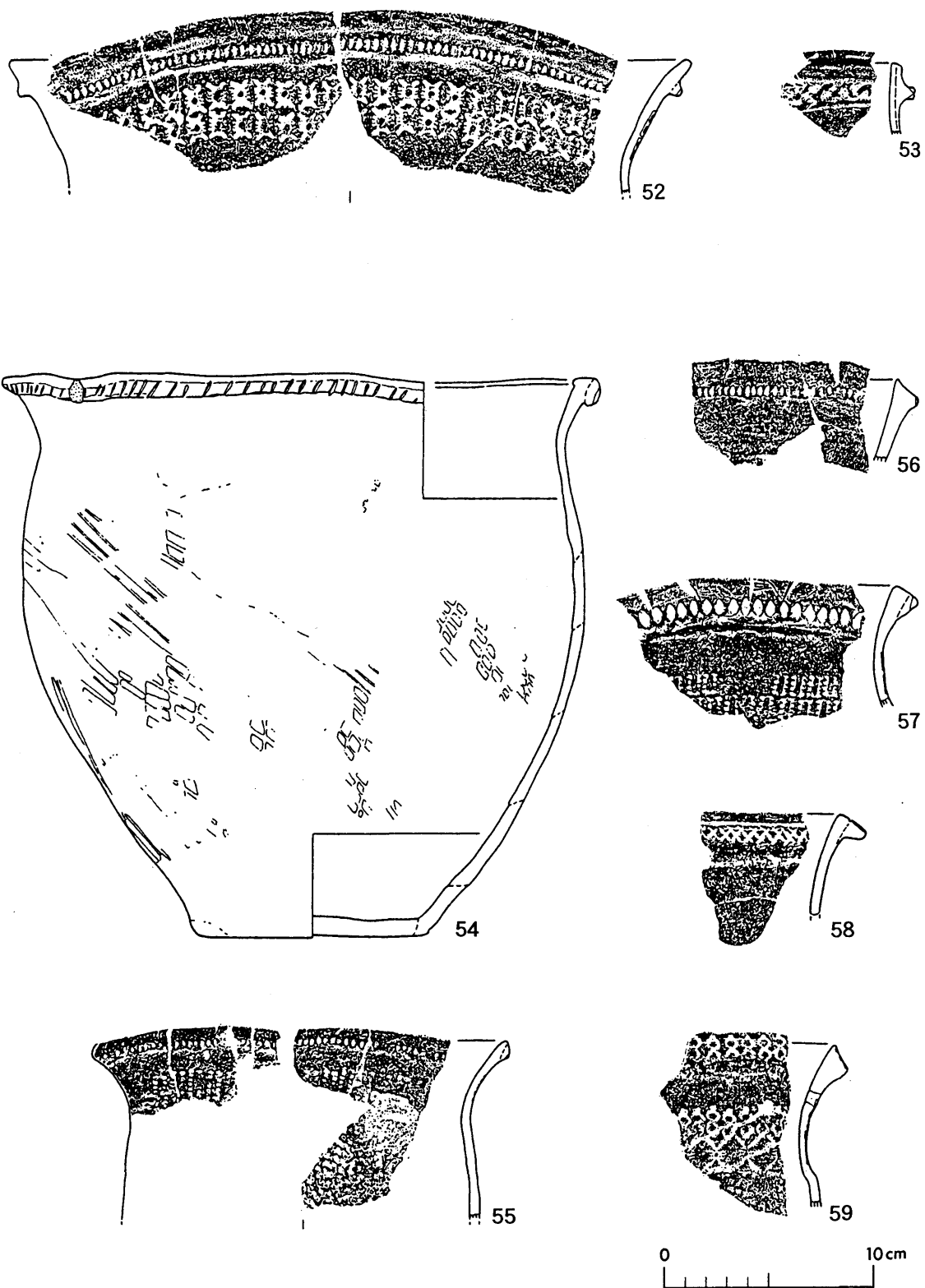
「テバフ式土器」の型式分類は、デリュージン氏に従う (デリュージン 1999)。頸部以下に方格の叩き目を有する点が江の浦式との最大の違いである。これは製作技法上の大きな隔たりであり、両系統の土器製作者を捉える上で重要な特徴となる。ただし前述のように、アムール河口部ではオホーツク式系統とテバフ式系統との間で胎土の特徴が共通しており、また色調や焼成の特徴にも明確な違いはない。

##### i) テバフ式 c 類土器 (第 104 図 52・53)

口縁端部よりやや低い位置に作り出された、粘土紐を貼り付けて作られる細い突帯を指標とする。第 104 図 52 は突帯上に刻みを施し、頸部にスタンプ文を施文している。第 104 図 53 は突帯上につまんでひねる爪形文を施文している。この遺跡からは全体の器形がわかる土器は出土していないが、デリュージン分類によれば、このような突帯を持つテバフ c 類土器は、平底で頸部が明確にくびれる器形になるようである。

##### ii) テバフ式 b 類土器 (第 104 図 54～59)

口縁に貼り付けられた、断面三角形の突帯を指標とする。器形は平底で、頸部がややくびれる。文様は、突帯頂部に刻み目を施す例 (第 104 図 54～57) が多いが、沈線 (第 104 図 58) やスタンプ文 (第 104 図 59) を施す例もある。頸部にスタンプ文を持つ例が目立つが (第 104 図 55・57・59)、頸部が無文になる例もある (第 104 図 54)。なお前述のように、口縁部突帯の形や文様は江の浦式河口部 3 類土器の一部と共通する。



第 104 図 ニコラエフスク空港 1 遺跡出土土器群 (5)

52・53 : テバフ式 c 類 54~59 : テバフ式 b 類

なお、テバフ式 a 類土器（器形は丸底砲弾形でくびれがなく、口縁に断面三角形等の突帯を持つ土器）は、この遺跡では全く確認されていない。

#### c) オホーツク式系統とテバフ式系統の折衷土器（第 103 図 50・51）

口縁部の器形・文様は江の浦式河口部 3 類とほぼ同じであるが、頸部以下にテバフ式系統と同じ叩き目を有する、という折衷的な土器群である。第 103 図 50 は、やや幅広の薄い肥厚帯と、肥厚帯上にスタンプ文を巡らす特徴が江の浦 A 式と同じである一方、胴部には叩き目が施されている。第 103 図 51 も同様に、江の浦 A 式的な口縁部器形・文様を持つ土器の胴部に叩き目がつけられる、という構成になっている。

これらの折衷土器はニコラエフスク空港 1 遺跡からは数点しか出土していないが、オホーツク式系統とテバフ式系統との間にある型式交渉の実態を示す好例として注目される。

### 3) アムール河口部地域の編年

ニコラエフスク空港 1 遺跡の調査成果によって、アムール河口部の土器編年について以下の新知見がもたらされた。

第 1 点は編年の根拠となるような出土状況が確認された点である。テバフ式系統では b 類の出土がやや多く、c 類がそれに続く一方、a 類は全く出土していない。このような出土状況は、c 類・b 類と a 類との間にある時期差を反映する可能性が高い。一方のオホーツク式系統では、「江の浦式河口部 1 類」（江の浦 B 式前半相当）、「同 2 類」（江の浦 B 式と A 式の間中型）、「同 3 類」（江の浦 A 式後半相当）の 3 型式が出土しているが、この中では河口部 2 類が量的にも型式的にもまとまって出土している。江の浦式の 3 細別を設定した意図と根拠は後述するが、この遺跡で確認された河口部 2 類のまとまりが 3 細別の根拠の一つとなっている。

新知見の第 2 点はオホーツク式系・テバフ式系の折衷土器が発見された点である。この土器群の存在によって、少なくとも筆者分類でいう江の浦 A 式河口部 3 類土器の時期には、両系統が併行していることが明らかになった。しかも両系統の関係は在地品と搬入品ではなく、土器製作技法上の交流を背景とする折衷・融合的な性格を持つことも新たに判明した。

以上の成果をもとにオホーツク式系とテバフ式系の編年を対応させてみよう（第 105 図）。まずは両系統の併行関係であるが、両系統に併行する時期があるのは折衷土器の存在から見て明らかである。細かく対比すると、前述のように江の浦式河口部 3 類とテバフ式 b 類との間で口縁部形態が類似する例があるので、この両者が同時期と考えられる。この併行関係を基点に作成したのが第 105 図の編年表である。編年の根拠について補足しておこう。オホーツク式系の編年（江の浦式 1 類→江の浦式 2 類→江の浦式 3 類→南貝塚式）は、サハリン・北海道での研究成果から

考えて動かないであろう。問題はテバフ式 c 類と a 類の位置づけであり、冒頭で紹介したようにこの点について臼杵氏・筆者とデリュージン氏との間で議論がある。ただしテバフ式系の型式組列が a 類→b 類→c 類であることについては、(どちらが古いかはともかく) 臼杵氏・筆者ともデリュージン氏に賛成である。問題はどのような時間的關係が設定できるかであるが、筆者は以下の論理から第 105 図の編年が妥当と考える。仮に a 類が b 類よりも古いのであれば、ニコラエフスク空港 1 遺跡では遺跡形成の中心時期が b 類より古いのであるから、a 類が出土してもよいはずであるが、実際には全く出土しておらず逆に c 類が出土している。一方で b 類(江の浦式河口部 3 類併行)よりも新しいとみられる南貝塚式そのものも同遺跡からは出土していない。おそらく b 類=江の浦式 3 類併行期以降、同遺跡の利用は一旦断絶したのであり、南貝塚式と a 類が出土しないのは両者ともその時期より新しいからであると考えられる。従ってテバフ式系の編年は表 1 のように c 類→b 類→a 類となり、a 類を南貝塚式併行とするのが妥当となろう。c 類の位置づけについては、c 類と b 類の間に大きな時期差を示すような型式的ギャップはないので、江の浦式 2 類併行に仮設しておこう。なおラザレフ 2 遺跡では江の浦式河口部 2 類とテバフ式 c 類が同じ層位から出土している(Лосан 1996)。確実な共伴か否かには検討の余地を残すものの、両者の併行関係の傍証とみなすことは可能であろう(注 7)。

#### 4. サハリン出土江の浦式土器の再検討

##### 1) 研究の現状

サハリンのオホーツク土器編年については、ここで何度も取り上げた伊東信雄氏による編年が基礎となっている(伊東 1942・同 1982)。伊東氏の設定した、十和田式→江の浦 B 式→江の浦 A 式→南貝塚式・東多来加式というオホーツク土器(注 8)の型式と編年は、これまでに若干の補遺修正が試みられているものの(新岡 1970、天野 1978a、山浦 1985、臼杵 1990 など)、基本的な型式観・編年については現在でもロシア側も含め多くの研究者に支持されている。例外としては大井晴男氏による批判があるが(大井 1982a)、大井氏の「型式論」に問題があることは第 7 章で論じたとおりである。

このように現在も支持されている伊東編年であるが、周辺地域の編年研究が進展しつつある現在、型式細別や地域差をより詳細に検討する必要が生じてきている。特に、オホーツク文化が急激かつ広域的に拡散する江の浦 B 式期と、展開後に地域化が進む江の浦 A 式期は、オホーツク文化の成立・展開のプロセスを解明する上で重要な時期である。これらの時期における各地域間の関係とその変化を土器からトレースするのがここでの目的となる。

アムール河口部		サハリン
テバフ式系	オホーツク式系	
	江の浦式1類	
テバフ式c類	江の浦式2類	
テバフ式b類	江の浦式河口部3類	江の浦式サハリン3類
テバフ式a類	(南貝塚式?)	南貝塚式

第 105 図 アムール河口部・サハリンにおける土器編年対比

		器形	文様
江の浦B式	伊東による定義	平底で深鉢形や甕形が多く、広口の壺形もある。口縁部に幅3cm内外の肥厚帯があり、肥厚帯の上下縁が稜状をなしている。	文様は肥厚帯の稜上に施される。文様要素には斜行の刻文、1指の爪形文、2指でひねる爪形文のほか、2指の爪形文を模して波状に粘土紐を貼り付けたもの、沈線2本の間に刻文を施すもの、2本の沈線のみを引いたものがある。
	臼杵による補足	口縁部肥厚帯は断面三角形を呈する。口縁部のやや下部に断面三角形の粘土帯を貼り付けて作り出される。口唇部外側の稜は横ナデによって形成される。	刻文の大きさは数mm程度。型押文は櫛歯文のみ。
江の浦A式	伊東による定義	(特に記述なし)	刻文が肥厚帯上一面に施されるようになる。刻文は沈線と矢羽状刻文の組み合わせがあらわれ、2指の爪形文のうねりも大きくなる。型押文も出現する。
	臼杵による補足	口縁部の肥厚帯は平面的。口縁外側に幅広の粘土帯をかぶせるか、頸部と段をつけて接合することによって作り出される。口縁部に突帯状の肥厚帯を形成する例もある。	刻文は1cm程度の大きいものが増える。型押文には様々なスタンプ文が増える。

第 106 図 江の浦式土器群の定義と補足

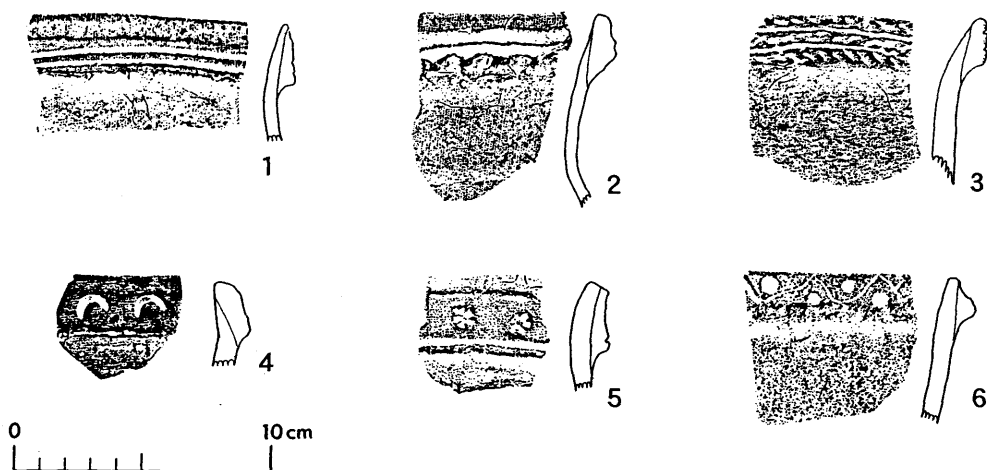
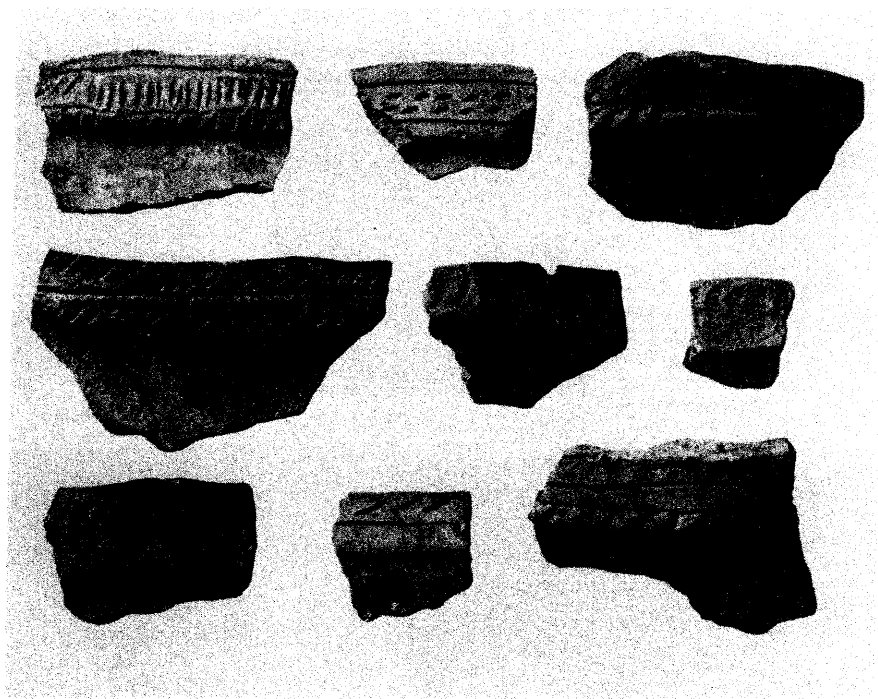


第 107 図 上段：江の浦 B 式の標式資料（江の浦貝塚）

下段左：東北大学所蔵の江の浦 B 式（柏浜）

下段右 1～3：臼杵氏分類による江の浦 B 式と類似土器

1：モヨロ貝塚 2：アレキサンドロフスク 3：鈴谷貝塚



第 108 図 上段：伊東氏自身が示した江の浦 A 式（遠淵遺跡）

下段 1～6：白杵氏分類による江の浦 A 式

1・2：南貝塚 3・6：宗仁 4・5：鈴谷貝塚

しかしながらサハリン資料については現在においてもデータが少なく、特に遺跡・層位・遺構毎の一括資料といえるものはほとんど公表されていないため、未だ再検討が困難である。そこで重要となってくるのが前節までに明らかになった北海道北部・アムール河口部の編年である。ここでは両地域の編年を軸として地域間の異同に着目し、間に挟まれたサハリンの江の浦式の編年を検討する。間接的な分析なので隔靴搔痒の感があり、方法論的にも課題が残るが、それでもいくつかの成果が得られることを示したいと思う。

分析に先立ち、江の浦 B 式土器・A 式土器の定義と内容についてあらためて確認しておこう。江の浦 B 式→同 A 式という型式編年は、サハリン南部の江の浦貝塚 B 地点・A 地点の各々で確認された型式的まとまりに基づいて設定されたものである（伊東 1942）。型式設定者である伊東氏の定義と、臼杵氏による型式内容の補足（臼杵 1990）を、図版を含めてまとめたのが第 106 図～第 108 図である。これらを見る限り、B 式と A 式とでは型式学的特徴がかなり異なっていることが理解できよう。

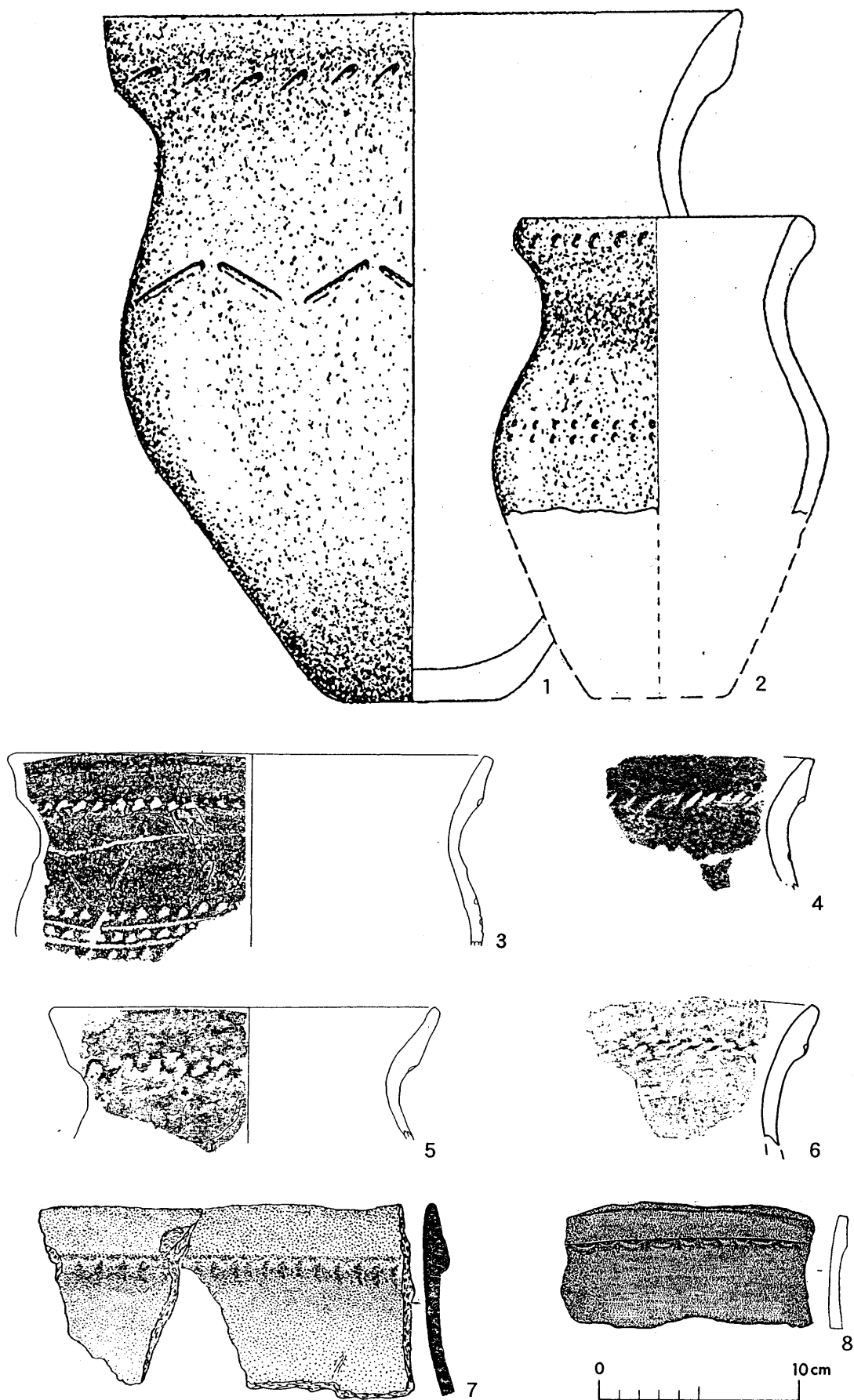
しかしある意味当然ではあるが、ここにあげた典型例のほかに B 式と A 式の間間的な例も存在する。前述した B 式・A 式の細別は困難とする意見（天野 1978a）はその点などを重視しているのであろう。細別否定派の意見に与するならば、江の浦 B 式～A 式は「漸移的に変化する一連の型式群」と言えそうである。ただし、細別否定派も両型式間にある程度の型式差・時期差が存在することは認めている。

ここではそのような「一連の型式群」に対し、アムール河口部と同様に 3 段階の細別を試みる。その際に問題となるのは、細別の基準・根拠は何か、さらには細別の意義は何か（細別によって何を明らかにするのか）であろう。その答えは、一地域内の「縦」の型式変遷を追うだけでは見えてこない場合がある。しかし隣接する地域間の編年を対比して、地域間の（横の）関係が変化する時期が捉えられた場合、この「横」の関係の変化が「縦」の型式変遷の画期となりうる。ここでは 3 細別を設定した後、編年対比を行って「横」の関係の変化についても確認し、編年を縦と横の構造で支えることにする。

## 2) 型式分類

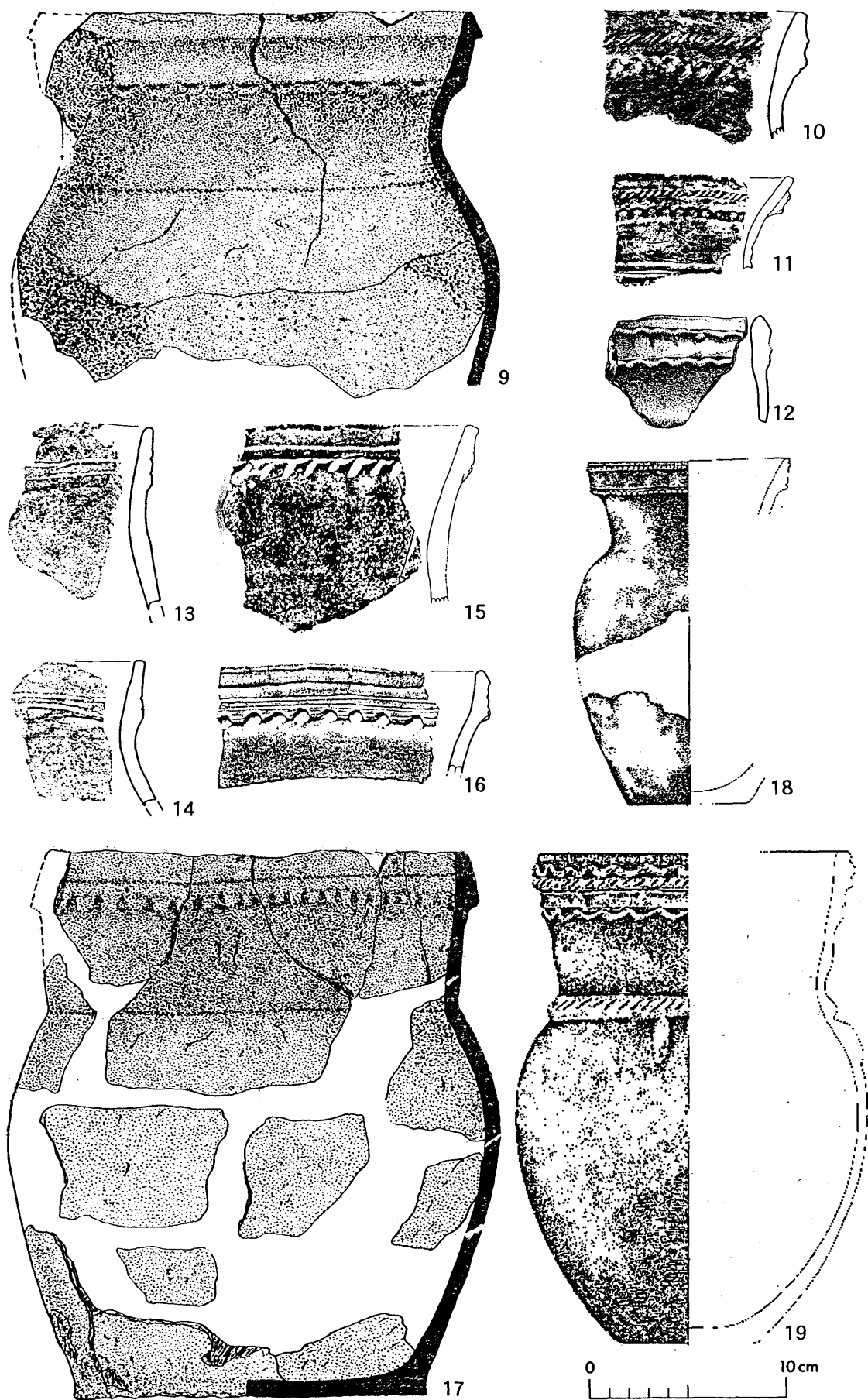
### i) 江の浦式サハリン 1 類土器（第 109 図）

伊東編年・臼杵編年の江の浦 B 式土器のうちの、古手と考えられるグループを分離して設定した。型式学的特徴は河口部 1 類土器と同一である。北海道北部の刻文 I 群土器と対比した場合には僅かな地域差が認められるが、基本的にはほぼ同一の型式と位置づけてよいであろう。型式学的に斉一性が強く、さらに分布が広範囲に及ぶ土器群といえる。



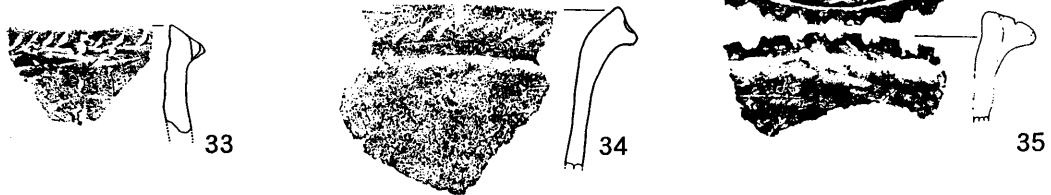
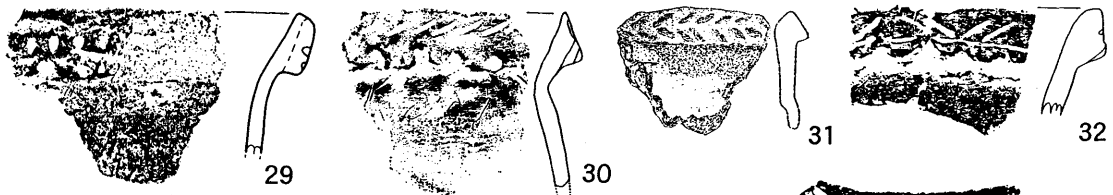
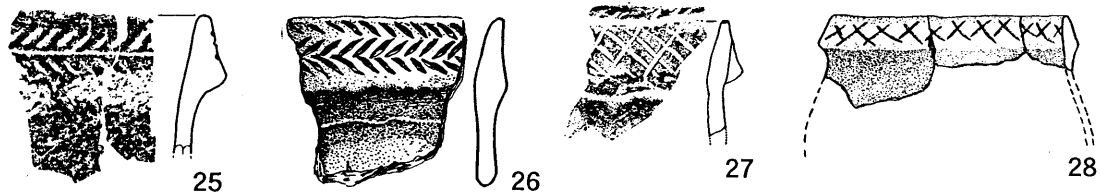
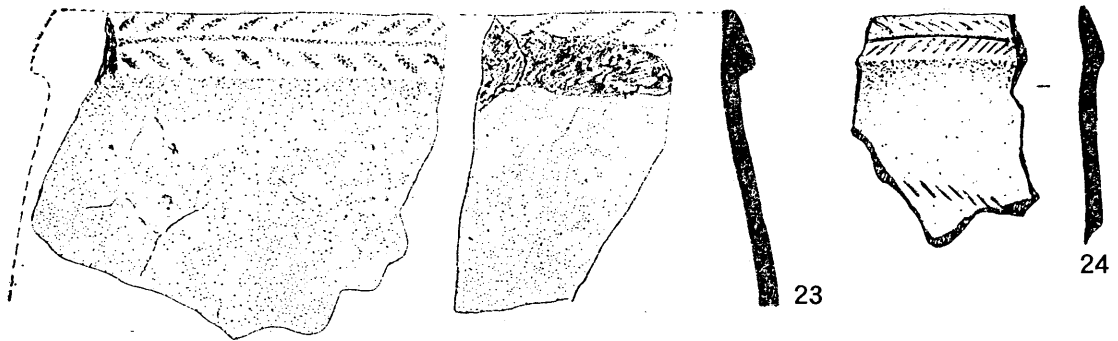
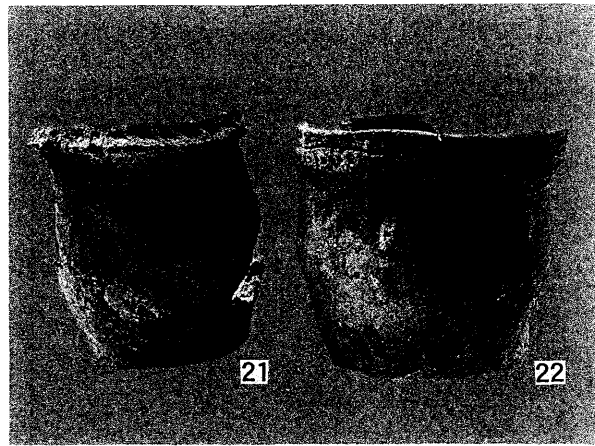
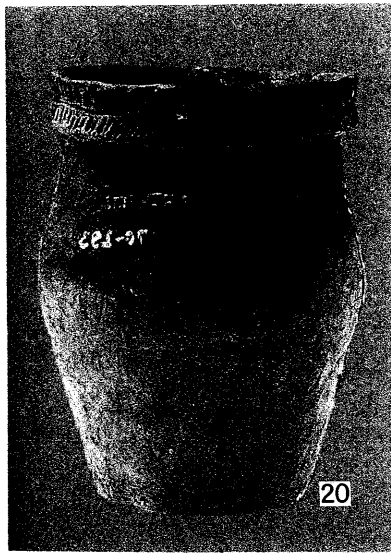
第 109 図 江の浦式サハリン 1 類土器

1・2: Бердянские озера-2 (東多来加) 3: 江の浦貝塚 4: 出土地不明 (サハリン) 5: 出土地不明 (サハリン) 6: 広地 7: Найбучи I 8: モネロン島キタコタン



第110図 江の浦式サハリン2類土器

9・17: Найбучи I 10: 出土地不明 11: 南貝塚 B 地点 12: 鈴谷貝塚 13・14: 金比羅神社 15: 内砂浜 16: 南浜通二丁目 18: Островное-2 19: Кожедуба



第 111 図 江の浦式サハリン 3 類土器

- 20 : 出土地不明 21・22 : アジョールスク 23 : Найбучи I 24 : Озерск I  
 25 : 南浜通二丁目 26 : 鈴谷貝塚 27 : クズネツオーヴォ I 28 : Найбучи I  
 29 : 南浜通二丁目 30 : クズネツオーヴォ I 31 : Третья Падь 32 : 江の浦貝塚  
 33 : クズネツオーヴォ I 34 : 南浜通二丁目 35 : 内砂浜 36 : 二号沢チャシ 37 : 南貝塚  
 38 : 出土地不明 (サハリン) 39 : 布袋ノ沢

器形：

このグループの指標の一つは河口部 1 類と同じで、薄手で断面三角形を呈する肥厚帯である。ただし後述のように、肥厚帯の上縁が肥厚して尖るものや、口唇面に面取りがあるものはやや新しいと筆者は考えており、基本的にこのグループには含めない。

全体の器形がわかる土器は報告例が少なく詳細不明だが、頸部がややすぼまる甕形や壺形が多いようである。

文様：

このグループのもう一つの指標はやはり河口部 1 類と同じで、口縁部の施文位置である。従来、江の浦 B 式に分類されていた土器には、肥厚帯の上縁・下縁の両方に施文があるものが含まれていた。ここでは、肥厚帯の下縁にのみ施文があるものだけをこのグループとし、上縁に施文があるものは新しいと考慮して除外する。

文様要素は、やはり河口部 1 類と同様、刻文系のみのも（第 109 図 1～6）と、沈線文と刻文系文様が複合するもの（第 109 図 7・8）の二者がある。河口部 1 類に認められた肥厚帯の下縁に粘土紐を貼り付ける例は、サハリンにも存在しているようである。ちなみにこの粘土紐を貼付する文様要素は北海道北部では認められていない。

## ii) 江の浦式サハリン 2 類土器（第 110 図）

伊東編年・臼杵編年の、江の浦 B 式の新手法と A 式の古手を一括して設定したグループである。江の浦式河口部 2 類とはほぼ同一の型式である。しかし北海道北部には類例がほとんどなく、地域差が進行していることが分かる。

器形：

やはりこのグループの指標は肥厚帯の形態である。河口部 2 類と同様、肥厚帯の断面が 1 類より厚く幅広いものをこのグループとする。ただし河口部 2 類と比較すると、肥厚帯の上下の縁が肥厚するもの（第 110 図 9）や、断面形が三角形に近いもの（第 110 図 15・18）が多いようである。肥厚帯の製作法が 1 類とやや異なる点は臼杵氏が指摘したとおりで、口縁部に幅広い粘土帯をかぶせるものが多い。口唇面には面取りが施され、その面が外傾するものがみられるようになる。

全体の器形が分かる土器はやはり報告例が少ない。管見では頸部がややすぼまる甕形が多いようである。特に器高に対し口径・底径の大きい、幅広い器形（第 110 図 17）はこの段階から出現する。ただし、1 類と同じような縦長の壺形（第 110 図 19）もこの段階まで併存するようである。

文様：

口縁部の施文位置もこのグループの指標である。河口部 2 類と同様、肥厚帯の上縁・下縁を中心に施文されるものをこのグループとする。文様要素も河口部 2 類と同様で、刻文、爪形文、刺突文等の刻文系文様のほか、沈線文が単独で出現する（第 110 図 13・14）。また、沈線文と刻文系文様を複合施文する例や、摩擦式浮文も認められる。

口縁部以下は無文となる例が多いようであるが、土器の肩部に貼付文を付ける例（第 110 図 19）があることには注目しておきたい。

### iii) 江の浦式サハリン 3 類土器（第 111 図）

伊東編年・臼杵編年の江の浦 A 式のうちの、新手と考えられるグループをまとめた。江の浦式河口部 3 類とは異なる点が多くなる。北海道北部では類例は見あたらない。

器形：

口縁部肥厚帯の形態には大きく分けて二つの種類がある。一つは幅広でやや薄いタイプである（第 111 図 20・22～28・36～39）。サハリン 2 類と近いが、断面形は縦長の三角形を呈するものが多く、肥厚帯上縁の肥厚は認められなくなる。なおこのタイプの肥厚帯は河口部 3 類にも存在するようであるが、数は少ないようである。もう一つのタイプは上下の幅が狭く、断面が三角形の突帯状を呈するものである（第 111 図 21・30～35）。この突帯状の肥厚帯は河口部 3 類の一部と類似している。サハリン 2 類にはないもので、サハリン 3 類の指標となる。

全体の器形が分かる例はほとんどないが、報告されている例は幅広の甕形で、縦長の壺形は確認できていない。

文様：

口縁部肥厚帯の全面に、面的に文様要素が展開するような文様意匠がこのグループの指標となる。文様要素は、大きさ 1cm 以上の刻文や沈線文を矢羽状などに組み合わせる例（第 111 図 20・22～28）が多いが、このような文様意匠は河口部 3 類では確認できていない。一方、突帯状の肥厚帯を有するものは河口部 3 類と類似し、突帯の頂部に刻みを施す例が目立つ（第 111 図 33・35）。円形・十字形等のスタンプ文（第 111 図 36・39）は河口部と同様にサハリンでも確認されており、出現はこの時期とみられる。

口縁部以下は無文となる例が多いようであるが、貼瘤文・刻文等が肩部に施される例（第 111 図 22・24）も散見される。

## 5. 江の浦式土器の編年および大陸側の諸型式との関係

### 1) 細別型式の整理と編年

江の浦式土器について、河口部・サハリンの地域別に再検討を行い、それぞれ 1～3 類の細別を設定してきた。細別型式の地域差と編年について整理しておこう。

まずは地域差である。両地域の 1 類、2 類については地域差は少なく別型式を設定する理由がないので、以下では地域の別をなくし単に江の浦式 1 類、2 類とする。一方、3 類では文様などに地域差があるので、河口部 3 類、サハリン 3 類という地域型式を設定する。







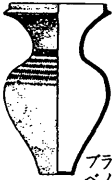
次に各細別型式の編年である。3 類にのみ目立つ地域差がある点を重視するならば、2 類と 3 類は時期差として解釈できよう(注 9)。問題は 1 類と 2 類である。特に従来サハリンでは 1 類と 2 類は「江の浦 B 式」として一括されてきた土器群であるので、細別には根拠が必要である。筆者が重視するのは北海道北部との型式学的対比である。すでに述べたように江の浦式 1 類は道北部の刻文 I 群とほぼ同一の型式である一方、江の浦式 2 類・刻文 II 群はともに江の浦式 1 類とは異なっている。刻文 I 群→II 群という編年が正しいのであれば、江の浦式 1 類と 2 類も時期差として解釈できるであろう。

江の浦式 2 類以後の、北海道との編年対比についても述べておこう。前述のとおり江の浦式 2 類以降は宗谷海峡を境界とした地域差が拡大するため、土器そのものの型式学的な比較による編年対比は難しい。江の浦式 2 類と北海道北部の刻文 II 群、双方の始まりの併行関係が上限の基点であり、南貝塚式と擦文土器宇田川編年後期～晩期の併行関係(注 10)が検討の余地を残すものの、現状では下限の基点となろう(第 10 章参照)。この間の型式群の併行関係をすりあわせる作業は今後の課題となろう。

### 2) 江の浦式土器の成立過程・靺鞨系土器との関係

本章の冒頭に述べたように、江の浦式 1 類土器が靺鞨系の土器と類似するという指摘は古くからなされていた。では、江の浦式 1 類土器はどのような過程を経て成立するのであろうか。この問題は、アムール流域における靺鞨系土器の成立過程とリンクして考える必要があろう。

靺鞨系の土器の編年については、すでにロシア・中国・日本で研究の蓄積がある(Дьяков a 1984、譚・趣 1993、臼杵 1994、喬 1994、菊池 1995)。年代観や地域性、系統の由来については諸説あるが、土器そのものの型式変遷の過程については大筋で意見が一致しており、大貫静夫氏はそれらを古・中・新の 3 段階にまとめている(大貫 1998)(第 112 図)。これら靺鞨系土器の分布について臼杵氏は、古段階の土器の分布は哈爾濱以北の松花江流域とハバロフスク周辺のアムール流域に限られるが、中段階になると分布が拡大し、北への影響もその時期に顕著になるとした。そして、江の浦 B 式の器形・文様に影響を与えたのはこの中段階の土器(「ナイフェリト型」)であるとしている(臼杵 1994)。以前から指摘されていたように(前田 1976、菊池 1976、

	第2松花江	松花江ー ハバロフスク周辺	牡丹江	黒龍江中流
新	 査里巴	 コルサコフ	 石灰場	 トロイツコエ
中	 大海猛	 ナイフェリド		
古		 ブラゴスロ ベノエ		0 10cm

第 112 図 大貫静夫氏による靺鞨系土器の編年

臼杵 1990)、靺鞨系土器の中段階と江の浦式 1 類土器の併行関係、というのが広域編年対比の基点となろう。しかしその基点から編年対比を拡大する際には未解決の問題が山積している。

その一つは靺鞨系土器の古段階におけるアムール下流域の様相である。アムールの中・下流域で靺鞨文化に先行するのはポリツェ文化であり、ポリツェ文化の土器はアムール河口部まで分布している。ポリツェ文化と靺鞨文化の関係については様々な関連性が指摘されているものの（Дьякова 1984、菊池 1995）、地域毎の様相の違いや年代の間隙の可能性も明らかになってきており（臼杵 1995、大貫 1998）、未だ整理されていない。アムール下流域で言えば、靺鞨系土器の古段階が「空白」となってしまう点が問題となろう。デリュージン氏のようにアムール河口部のポリツェ文化の終末を遅らせて考えるのも一つの案ではあるが（デリュージン 2003、デリュージンほか 2003）、いずれにせよポリツェ文化から靺鞨文化への移行の問題は、年代・系統・地域差を整理した上での包括的な検討が必要であろう。

もう一つの問題は、オホーツク土器と靺鞨系土器の「境界」である。前述のとおり江の浦式 1 類土器は靺鞨系土器の中段階に類似するが、口縁部の形態や肩部の文様などにはやはり違いがある。この型式学的な異同が連続的なのか非連続的なのか、という問題がまずある。さらには両者の分布の境界は何処にあり、そこでは土器群がどのような様相を呈するのか、という問題もある。これらの形式的・地理的境界の検討が、土器型式研究の基礎作業として今後必要であるし、その問題の解明こそが江の浦式 1 類土器の成立を説く鍵となろう。特に地理的境界については、現在知られている靺鞨系土器の北限がコムソモルスク・ナ・アムーリエ付近である一方（Дьякова 1984）、アムール下流域におけるオホーツク土器の南限はテバフであるという「空白地帯」がある現状に対し、問題意識を持っておく必要があろう。

### 3) 江の浦式土器とテバフ式土器

次に江の浦式土器とテバフ式土器の型式交渉について考察しよう。

アムール河口部では、江の浦式 2 類の段階からテバフ式系の土器（テバフ式 c 類）が共伴し始める。江の浦式 1 類期からの流れで考えれば、江の浦式 2 類が在地の主体で、テバフ式 c 類は河口部より北西(注 11)に起源を持つ客体的な系統である可能性が高い。両系統間の関係をみると、型式学的な影響関係はほとんど認められない一方で、胎土は両者とも金雲母を含む特徴的なもので選ぶところがない。しかし土器のセットに占める両系統の比率がはっきりせず、さらにテバフ式土器の分布の中心や型式圏もよく分からないなど、この時期のオホーツク土器とテバフ式の関係には不明な点も多い。共通の胎土＝在地製作である一方、なで整形／叩き整形という製作技法上の差が並立している点からあえて大胆に解釈すると、この時期のアムール河口部では「テバフ式 c 類の製作者が河口部に移動し、在地の胎土で故地の土器を製作した」という土器製作者の

動きが想定できる。

続く江の浦式河口部 3 類の段階ではオホーツク土器とテバフ式系土器の間で型式学的な影響関係が認められるようになる。口縁部に江の浦式 3 類の特徴を有しながら胴部には叩き目があるという「折衷土器」はまさにその好例であるし、口縁部に断面三角形の突帯が付く例（両系統とも存在する）も両系統の影響関係のなかで共有されたものであろう。江の浦式 3 類からオホーツク土器に出現する各種スタンプ文も、先立つ時期のテバフ式 c 類に存在する点からするとテバフ式系統から借用された要素である可能性が高い。江の浦式河口部 3 類期における以上の変化に対しては、「異系統の技術伝統が並立していた土器製作集団内で、製作技術やデザイン上の交流・模倣が進行した」という解釈が可能であろう。このようにアムール河口部における土器組成の変遷は、オホーツク土器とテバフ式系土器が次第に関係を強めてゆく過程として理解できる。

テバフ式系土器の影響はどの範囲まで及ぶのであろうか。サハリンではテバフ式系土器そのものはほとんど確認されていないようだが、これについては今後の精査が必要であろう(注 12)。なおサハリンでは河口部 3 類期にみられたような「折衷土器」こそ確認されていないが、断面三角形の突帯や各種スタンプ文といった河口部からの影響と思われる要素は江の浦式サハリン 3 類にも認められる。一方、これら河口部の要素は北海道北部までは及んでおらず、逆に北海道からの影響が江の浦式土器に及んだ形跡も今のところ見あたらない。

## 6. 小結

アムール河口部とサハリンのオホーツク土器編年を整理し、あわせて大陸との関係について再検討してきた。江の浦式土器と靺鞨系土器、およびテバフ式土器の関係は、オホーツク文化の形成プロセスや担い手の系譜と直接関わる問題であり、本章で論じたような土器型式編年の検討がそれらの問題に対して考古学的にアプローチするための基礎となるであろう。しかし本文で述べたように、靺鞨系土器、テバフ式土器と江の浦式土器との関係には未だ未確定要素が多く、本章の編年にもまだ再考の余地が多々ある。それでも本章の検討のごとく、ようやく具体的資料に基づいた議論が出来るようになってきている。今後もデリュージェン氏らとの議論を重ね、型式の系統・分布・編年を精緻に把握してゆく必要がある。

また、「オホーツク土器の分布域」という側面では同一領域といえるアムール河口部・サハリン・北海道オホーツク海沿岸地域であるが、アムール河口部における生業や居住形態、社会構造、信仰儀礼等の実態はほとんど分かっていないのが現状であり、それはサハリンでも大同小異といえる。土器以外の文化要素の構造、ならびにそれらの変遷史の解明が今後早急に取り組むべき課

題であることは論を待たない。異なる生態系や周辺諸文化への対応という視点を加味しつつ、オホーツク土器分布圏の中にみられる地域社会間の関係を把握し整理することで、オホーツク文化の実態や定義、歴史的な位置づけが解明されてゆくであろう。

注

- (1) 臼杵・熊木 2003 の編年では江の浦式について従来どおりの型式名称を用いたが、内容は本論と全く同じである。ちなみにこれはかつての臼杵編年（臼杵 1999）を基礎として一部を修正したものであるが、テバフ式 c 類が古く a 類が新しいという変遷観自体は当初から一貫しており、変更はない。
- (2) 出土遺物には新石器時代や初期鉄器時代に相当する土器や時期不明の土製品などもあるが、本章では省略する。また、オホーツク文化併行期の土器群も出土資料の一部しか掲載していない。それらは正式報告では掲載の予定である。ちなみに正式報告には本章の内容が再掲される予定であるが、現段階では特にロシア側の共同調査者との討議が不十分な部分もある。よって正式報告では本章の内容に一部修正が施される可能性もありうるので留意されたい。
- (3) ただし住居址外にはいくつかの土器集中地点があり、これらの集中地点では型式のまとまりがある程度見いだせる可能性が高い。
- (4) 正式報告では、注 3 の問題も含め、層位と出土状況に関する詳しい説明を行う予定である。
- (5) 図には示していないが、口縁部肥厚帯が 断面方形・幅広気味の例でも、肥厚帯下縁にのみ施文されている例は河口部 1 類に分類している。
- (6) これは、かつて臼杵氏が「テバフ遺跡 I 群」に分類した資料を指している（臼杵 1990）。ちなみにこの「テバフ遺跡 I 群」について、臼杵氏は江の浦 A 式に対比している。筆者分類を適用した場合には河口部 1 類と 2 類の両方を含むことになるようである。
- (7) テバフ式 c 類とした例のうち、特に口縁部突帯に爪形文が施される例には口縁部が江の浦式 1 類と酷似するものがあり、この類似を重視した場合にはテバフ式 c 類の位置づけはさらに古くなる。しかし両者の器形・文様全体を比較した場合には共通性より隔たりの方が著しいし、本文中に述べたような層位的な出土状況もあるので、ここでは本文のような編年対比を採用しておく。しかしながらテバフ式 c 類が江の浦式 1 類併行まで古くなる可能性もあることには注意しておきたい。
- (8) 鈴谷式をオホーツク土器に含めるか否かで論争があるのは周知の通りである（前田 2002 に詳しい）。本論では鈴谷式をオホーツク土器に含めない立場をとっている。
- (9) このように考える論理について念のため述べておこう。もし 2 類と 3 類が併行するならば、2 類には常に 3 類が伴うはずである。その場合、2 類には地域差がなく、3 類にのみ地域差があるという状況に対する説明は難しくなる。無論、両地域で「同時期のセットの一部のみ」が「意識的に作り分けられていた」可能性は皆無とは言いきれない。しかしやはりここは本文中のように 2 類・3 類を時期差と考える

のが最も単純で合理的な解釈であるといえよう。

(10) 筆者がこの併行関係の根拠とするのは、枝幸町ウエンナイ 1 号竪穴における「共伴」である（氏江 1995、平川 1995）。

(11) 「河口部の北西」としたが、アムール流域やサハリン側ではないという程度の意味で、具体的な地域・型式圏が判明しているわけではない。なおテバフ式の系統については、デリュージン氏がヤクート初期鉄器時代土器との関連性を提起している（デリュージン 1999）。確かに型式学的特徴には共通性がみられ、周辺地域の状況と照らし合わせた場合、基本的な枠組みとしては説得力がある。ただし遺跡分布をみるとヤクーチャとの間にはまだ地理的な間隙があるので、中間地域における分布や型式交渉の実態を今後明らかにしてゆく必要があろう。

(12) 福田正宏氏によれば、旭川市博物館所蔵の河野広道氏コレクション中に、サハリンの栄浜（スタロドゥプスコエ）出土のテバフ式系土器が存在するとのことである。筆者は実見していないが、福田氏による拓本と写真で確認したところ、テバフ式系土器にほぼ間違いないと思われた。ただし叩き目のある胴部片のみであるため詳しい型式分類は不可能である。なお河野広道氏のサハリン調査については河野 1933a を参照されたい。

## 第10章 オホーツク土器の展開過程とその背景

### 1. 本章の内容

本章は第Ⅱ部の総括編である。ここではまずオホーツク土器編年と、暦年代ならびに続縄文・擦文土器編年との対比について言及し、広域編年対比を試みる。その上で地域別に論じてきたオホーツク土器の展開過程を広域的な視点から総括し、地域型式間の関係を年代順に整理・概観するとともに、周辺地域、特に北海道の続縄文・擦文土器との型式交渉についても考察する。あわせて、これらの型式交渉の背景にあるヒトの動きについても、できる限り解釈を試みてみたい。

### 2. オホーツク土器の暦年代および続縄文・擦文土器との編年対比

#### 1) はじめに

オホーツク土器の展開過程を論じる際には、周辺地域の諸文化の動向を把握し、広域編年対比を確定しておく必要がある。大陸側に関しては第9章ですでに論じたので、ここではオホーツク土器と続縄文・擦文土器について、暦年代や編年対比を整理し、広域編年対比を試みよう。なお対比が煩瑣になるので、巻末付図1下の編年表を参照していただきたい。

オホーツク土器と擦文土器並びに土師器との間では、土器そのものの間に直接的な影響関係を認定しにくかったため、型式学的方法による編年対比には困難が伴ってきた。型式学的な影響関係がはっきりと認められるようになるのは後続するトビニタイ土器と擦文土器との間であり、それより古い部分の編年対比は主に層位的関係や暦年代を比較検討することによって行われてきた。

オホーツク文化の年代や擦文文化との編年対比に言及した論文は数多いが、今日の編年観につながる流れを作ったのは以下の各氏の論考である。まず、全体としてオホーツク文化が古く擦文文化が新しいという、今日の編年観の基礎を作ったのは石附 1969、大井 1970、同 1972a、同 1972b、金盛 1976、同 1981、野村ほか 1982、金盛・梶田 1984、などである。また、十和田式土器や刻文系土器群の暦年代をめぐる天野哲也氏の発言（天野 1978b）は今日の年代観につながるものであったといえよう。さらにオホーツク文化に認められる大陸系遺物の集成を行った菊池俊彦氏の論

考（菊池 1976）や、大陸とサハリン・北海道の広域編年対比を行い、あわせて暦年代の推定を行った臼杵勲氏の論考（臼杵 1990）は大陸との編年対比を行う上で重要な役割を果たしてきた。一方、今日最も広く引用されている暦年代観は右代啓視氏によるものであろう（右代 1991、同 1995）。右代氏はオホーツク文化に係る時期の編年対比・暦年代に関する諸説を続縄文文化・擦文文化を対象としたものを含めて集成し、整理した。他に、編年対比・暦年代に関するその後の注目すべき論文には梶田 1992、山田ほか 1995、氏江 1995、大沼 1996a、大西 1996、小野 1998c、阿部 1999、臼杵 2000、などがある。擦文土器との編年対比を論じる前に、まずはオホーツク土器編年と暦年代の対応関係を整理しておこう（注 1）。

## 2) オホーツク土器編年と暦年代

まずはオホーツク文化に先立つ鈴谷式土器の年代から確認する。鈴谷式土器が後北  $C_2$ ・D 式土器と併行する可能性が高いことは第Ⅰ部第 5 章で述べたが、後北  $C_2$ ・D 式と、続く北大 I 式土器との境はおおよそ 4 世紀と 5 世紀の間におかれている（森田 1967、佐藤 1984、乾 1989、中村 1992、上野 1992、高橋（信）1993、石井 1994、その他）（注 2）。だとすれば鈴谷式に続く十和田式土器の年代はおおよそ 5 世紀以後となろうが、十和田式の上限はどこまで下るのであるのか。

十和田式土器の暦年代を比定するためのデータは非常に少ない。阿部義平氏は礼文島香深井 5 遺跡出土の石製小玉が北大 I 式期のものと共通するとして、香深井 5 遺跡の十和田式（本論第 7 章で言う十和田式前半）の年代を 5 世紀においている（阿部 1999：119）。この阿部氏の説は、先の鈴谷式の年代観とも整合する。次に参考となるのは利尻島亦稚貝塚オホーツク文化層第 1 ブロック出土の土師器坏である（岡田ほか 1978）。岡田淳子氏は暦年代を「650～700 年頃に比定される」としている（岡田 1984：4）。また小野裕子氏はこの坏を住社式から栗圀式にかけての変遷の流れの中に位置づけ、概ね 6 世紀末に比定している（小野 1998c）（注 3）。ただしこの亦稚貝塚第 1 ブロックからは本論で言う十和田式後半と刻文期前半（道北部で言う刻文Ⅰ群）のオホーツク土器が拮抗して出土しており、さらに刻文Ⅱ群以降の土器群もわずかながらみられるので、この土師器坏がオホーツク土器のどの型式に伴うのか正確には比定できない。ここでは十和田式後半～刻文期前半にかけての年代が 6 世紀末と重なることを示すもの、と考えておこう。

刻文期前半の暦年代については臼杵勲氏の編年対比が基点となろう（臼杵 1985、同 1990）。臼杵氏は、アムール下流域において靺鞨系土器ナイフェリト群（Дьякова 1984）＝同仁文化系統中段階の土器（大貫 1998）を伴ったナイフェリト墓地 9 号墓の暦年代について、共伴した轡の検討から 6 世紀後半～7 世紀前半に比定した。本論第 9 章で述べたようにこの時期の靺鞨系土器が刻文期前半の土器と併行関係にあるので、刻文期前半の暦年代はほぼこの時期に相当する

と考えられる。

ほかに暦年代が推定されている遺物には、大陸系遺物である青銅製帯金具と、本州系遺物である蕨手刀がある。前者については臼杵氏がロシア・中国極東で出土した靺鞨－女真系帯金具全体の編年をまとめている（臼杵 2000）。それによれば北海道にもたらされた 3 例の帯金具は全て氏の編年の「Ⅱ期」に相当し、8 世紀前半に比定される。北海道出土のこれらの帯金具には土器が共伴していないためオホーツク土器のどの型式がこの年代に相当するのか不明であるが、この帯金具を出土した遺跡の一つである常呂町栄浦第二遺跡（藤本編 1972）では沈線文期より古い土器はこれまで稀にしか確認されていないので、これら北海道出土の帯金具は沈線文期以降に位置づけられる可能性が高い。この土器編年上の位置づけと臼杵氏の年代観との間にも矛盾はない。一方、蕨手刀の編年については八木光則氏の詳細な論考がある（八木 1996）。伴出土器の判明している枝幸町目梨泊遺跡（佐藤編 1994）出土の 4 振についてみると、全てが八木氏分類の「柄頭 1」に相当し（森 1997）、八木氏の年代観では 8 世紀後葉に比定される（注 4）。共伴した土器の型式をみると、第 30 号土墳墓は本論第 8 章で言う常呂川河口 15 号段階（貼付文期後半）、第 34 号土墳墓（2 振出土）は藤本編年 d 群相当（貼付文期前半）、範囲確認調査 1 号土墳墓は常呂川河口 15 号段階（貼付文期後半）となっている。このように目梨泊遺跡出土蕨手刀の下限は道東部のオホーツク文化最末期の土器である二ツ岩段階までは下らないとみられるので、八木氏の年代観に従うとオホーツク文化の終末は 9 世紀代まで下る可能性が高くなる。

### 3) オホーツク土器編年と続縄文・擦文土器編年の対比

擦文土器の型式編年と暦年代については、最近、道内各地域の編年を対比して地域差・画期・暦年代の整理を行った塚本浩司氏の編年を基準とし（塚本 2002）（注 5）、本論でみたオホーツク土器の編年・暦年代との対比を行う。ただし塚本氏の編年は詳細であり厳密な対比は難しいので、塚本編年の 4 期以降については宇田川編年（宇田川 1980）の前期～晩期の大別を併用し、大まかな対比とする（巻末付図 1 下の編年表参照）。なお塚本編年と宇田川編年の対比については塚本氏自身が明らかにしている（塚本前掲：表 2）。

まず基点となるのはオホーツク土器と擦文土器の共伴例であろう。網走市二ツ岩遺跡 2 号住居址骨塚で共伴例がある（野村ほか 1982）。この 2 号住居址骨塚及び住居址床面出土のオホーツク土器は本論第 8 章でいう二ツ岩段階（貼付文期後半）であり、共伴した擦文土器は塚本編年 3 期に相当する（塚本前掲：174）（注 6）。また、常呂町トコロチャシ跡遺跡 1 号内側竪穴の床面からは底面に回転糸切り痕をもつ坏が出土している（駒井編 1964）。岡田淳子氏はこの坏を「9 世紀後半以降のもので 10 世紀末までは降らない」（岡田 1984：4）としている。塚本氏によれば擦文土器にこの種の坏が認められるようになるのは氏の編年の 4 期以降であるので、トコロチャシ例

もその時期以降に相当することになる。共伴したオホーツク土器は二ツ岩段階（貼付文期後半）である。以上の点からすると、道東部オホーツク土器の最終末期である二ツ岩段階は、塚本編年 3～4 期に位置づけるのが妥当となるであろう。

二ツ岩段階に続いてトビニタイ土器群が成立するが、トビニタイ土器群と擦文土器の関係に関してはこれまで多数のデータが得られている。この問題はすでに各氏によって繰り返し論じられており（前掲の各氏の論文参照）、最近の成果としては大西秀之氏による編年がある（大西 1996）。大西氏の編年は一部に議論の余地があると筆者は考えるが（注 7）、ここでは概ね妥当ととらえておく。大西編年のトビニタイ「前期」が塚本編年 5～7 期、大西編年のトビニタイ「後期」が塚本編年 8～10 期に相当するとみられる（塚本前掲：註 12）。

道北部でオホーツク土器に遅れて成立する「元地式」土器の編年については、大井氏の論考（大井 1972b）があるほか、筆者も礼文島香深井 5 遺跡の成果から考察したことがある（熊木 2000c）。筆者の分析では「元地式」は 2 段階ほどの時間幅を有するようであり、塚本編年 4～7 期に対比される。また筆者は熊木 2000c の論考中で、「元地式」土器のうちの口縁部突帯がある資料について『突帯文系』江の浦 A 式」なる型式との類似を指摘し、併行関係として位置づけた（熊木前掲：166）。この『突帯文系』江の浦 A 式」とは、本論の江の浦式河口部 3 類およびサハリン 3 類の一部に相当する（注 8）。この関係が併行関係なのか前後関係なのかは議論の余地があるが、いずれにしろこの型式学的関係は擦文土器とサハリンのオホーツク土器の編年対比の材料となる希有なデータであり、参考になろう。

他に共伴事例で注目されるのは枝幸町ウエンナイ川右岸の竪穴の事例である（後藤 1933、氏江 1995）。この遺跡の 1 号竪穴のカマド・床からは、南貝塚式土器と「擦文土器」が出土している。この「擦文土器」について氏江氏はオホーツク・擦文の「接触様式」である可能性を述べている。この「擦文土器」の系統に対する評価はここでは保留するが、編年上の位置については器形・文様の特徴から判断して塚本編年の 10～11 期に相当することはほぼ確実とみてよいであろう（佐藤 1972b、平川 1995）。よって南貝塚式の位置づけもほぼその時期に相当しよう。

土器について型式学的または層位的な方法に基づいて編年対比を行う場合、確実な併行関係ととらえる事例は上記の例にほぼ限られるようである。事例は貼付文期以後の新しい時期に偏っており、貼付文期より古い時期については型式学的・層位的方法による編年対比は困難である。よってこれら古手の時期についてはオホーツク土器・擦文土器それぞれの暦年代に関するデータを対比するしか編年対比の方法がない。土器のみに基づく編年ではない、という方法論上の不統一に対する誹りは免れないが、現状を考えると止むを得ないので、貼付文期以前については推定されるそれぞれの暦年代に基づいた編年対比とする。

以上、編年対比と暦年代の検討結果をまとめると巻末付図 1 下の編年表のようになる。表にす

ると一目瞭然であるが、江の浦式 3 類と南貝塚式の位置づけについては議論の余地があろう。すなわち、江の浦式サハリン 3 類・河口部 3 類とテバフ式 b 類については存続期間が不自然に長いように思われるし、南貝塚式とテバフ式 a 類については、暦年代をここまで下げるとアムール河口部でも断片的に確認されているアムール女真（パクロフカ）文化の土器と年代が重なってしまう、という問題が生じてくる。しかし前述のように、江の浦式サハリン 3 類と「元地式」、南貝塚式と「擦文土器」とをそれぞれ対比しうるデータが存在することも確かである。現時点で筆者はこれらの問題を解消する術を持たないので、江の浦式サハリン 3 類・河口部 3 類と南貝塚式の位置づけについては筆者の提起がたたき台になることを期待しつつ、巻末付図 1 下の編年案を提示する。

### 3. オホーツク土器の成立・展開過程

第Ⅱ部第 7 章～第 9 章では地域別にオホーツク土器の編年を論じてきた。ここではオホーツク土器の地域型式間の関係や、周辺地域、特に北海道の続縄文・擦文土器との型式交渉について広域的な視点から総括し、変遷過程をトレースする。また、これらの型式交渉の背景にあるヒトの動きについても、できる限り解釈を試みる。

#### 1) 十和田式土器の成立、および分布について

##### a) 鈴谷式土器と十和田式土器の関係

十和田式土器と、それに先行する型式である鈴谷式土器との関係については第Ⅰ部第 5 章で述べたが、ここでも要点を簡単にまとめておこう。

まずは両型式の型式学的関係である。時間的に近い位置にある、鈴谷式土器でもっとも新しい「鈴谷式タイプ C2」と十和田式の前段階とが比較対象となる。両者の間では型式学的な関連性も一部には認められる。特に「短刻線」の文様と「砲弾型」の器形（菊池 1971、天野 1977、山浦 1985）、さらに第Ⅱ部第 7 章で述べた文様要素や文様帯の問題などには注目される。しかし両者の型式学的関係にはやはりギャップがあり、とぎれの無い型式変遷を認めるのは難しい。この型式学的「非連続」の説明としてまず考えられるのは、現在はまだ未確認の「未詳の他型式」が存在し、そこからの影響があった、という仮説であろう。

##### b) 十和田式土器の分布並びにサハリン北部の「空白」

その「未詳の他型式からの影響」の存在を思わせる状況証拠となるのが、十和田式土器の分布域の狭さである。現在知られている十和田式の分布はサハリン南西端部～北海道北端部を中心とする狭いもので（天野・小野 2002）、先立つ鈴谷式土器(注 9)や、後続する江の浦式 1 類土器と比較すると分布域の狭さが際だっている。この時期のサハリン北部・東部が「空白地帯」でないとするれば、「未詳の他型式」の存在が考えられるであろう。今のところ実態は不明であるが、今後このような視点から調査を進めることにより有意義な成果が得られるであろう。

さらにそれらサハリン北部・東部の「未詳の他型式」と関連して注目されるのが、最近、木山克彦氏らによって詳細が紹介された「バリシャヤ・ブフタ土器群」および「ザーパトナヤ 10 タイプ」土器群である（木山ほか 2003）。筆者はかつてこれらの土器群について、丸底という特徴が鈴谷式の後半と共通すること、胎土の特徴や突瘤文といった要素は十和田式前半と比較的近いこと、さらに十和田式とは排他的となるような、アムール河口部～サハリン北東部を中心とする分布を示すことなどを手がかりに、これらが十和田式前半の併行型式となる可能性を想定したことがある（熊木 2000a）。木山氏らも慎重な議論で断定を避けつつも、これらの土器群が鈴谷式後半期から十和田式に併行する可能性を述べている。いずれにしても現段階では確定的なことはいえないので、今後もデータの蓄積が必要となろう。

#### c) 十和田式土器と北大式土器

十和田式土器でもう一つ問題となるのは、北海道の続縄文土器型式である北大式土器との関係であろう。土器型式交渉の問題について確認しておこう。

松下亘氏は、北大式の口縁部にある土器外面からの（OI）刺突文と十和田式の OI 刺突文との関係について不明としながらも、「今後の研究課題として重要」（松下 1965 : 25）という見通しを述べていた。大井晴男氏はそこから一歩進んで十和田式から北大式へと「一方的に」（大井 1981 : 548）OI 刺突文の影響が及んだと説明している。両者の OI 刺突文に関連があると仮定した場合、どのような型式交渉が想定しうるか考察してみよう。

まずは十和田式側から北大式系統へ影響が及んだと仮定した場合である。北大式系統の円形刺突文の初出は後北  $C_2 \cdot D$  式の最終末段階（道東部では本論第Ⅰ部第 4 章でいう後北  $C_2 \cdot D$  道東 5 式の段階）にさかのぼる。ちなみに北大式系統の刺突文はすべて土器外面からの刺突であり、土器内面から（IO）は皆無である。一方、十和田式では前半段階では OI と IO が拮抗しており、後半段階でほぼ OI のみとなる。十和田式前半段階の出土例が少ないことも考慮すると、両系統の併行・影響関係は後北  $C_2 \cdot D$  道東 5 式と十和田式後半段階との間で設定するのが妥当となろう。そのように考えると、十和田式前半段階の位置づけは本論の編年対比よりさらに古く後北  $C_2 \cdot D$  式の中葉頃となり、さらに鈴谷式は後北  $C_1$  式以前まで遡る可能性が高くなってしまう。

前述したように、筆者はこのような編年対比が成立するとは考えていない。

では筆者の編年対比に従った場合で考えてみよう。刺突文の成立は逆に北大式系統の方が早くなるから、刺突文の影響は逆に北大Ⅰ式から十和田式前半段階の方へと及んだことになる。その場合は十和田式土器に地域差がほとんど確認できないことが問題となろう。サハリンの十和田式を含む十和田式全体に北大Ⅰ式の影響が及んだとするのは、道北部ではほとんど確認例のない北大Ⅰ式(注10)の分布状況から考えると、やや無理がある想定と言わざるを得ない。

結局、「北大式系統と十和田式の刺突文に関連がある」という仮定を、編年対比と矛盾せずに成立させることは難しいようである。そうすると両者の間に型式交渉があったとする仮定そのものを再考する必要も生じてこよう。先に述べたように道北部では北大Ⅰ式の確認例がほとんどないこと、さらに道南部で十和田式を出土した奥尻島青苗砂丘遺跡(皆川編 2002・越田編 2003)でも北大式の出土は皆無であること(注11)も、型式交渉に対し否定的な状況証拠となる。ただし現時点で「型式交渉はない」と断定するのは難しく、筆者もこの問題についてまだ定見を持つに至っていない。

このように北大式土器と十和田式土器の型式交渉については不明な部分が多いのが現状である。ここで興味深いのは、道東部オホーツク海沿岸や日本海沿岸積丹半島付近に点在する北大式土器に地域的な特色が散見される点である。しかしオホーツク文化の分布域に近い地域に展開するこれらの北大式土器については、地域差や製作技法等に関する分析が未だ不十分である。オホーツク土器との比較を念頭に置きつつ、これらの北大式土器について今後一層の検討を進めていく必要があろう。

## 2) 刻文系土器群の成立と展開

### a) 刻文系土器の分布

十和田式土器後半段階に続き、アムール下流域の靺鞨系土器ナイフェリト群(Дьякова 1984)＝同仁文化系統中段階の土器(大貫 1998)の影響を強く受けて刻文系土器群が成立する。この刻文期前半段階の土器は環オホーツク海沿岸の各地で確認されており、北はマガダン周辺からアムール河口部までのオホーツク海北西岸、東は南千島までの千島列島という広範囲に分布する。各地域の土器は形式的にほぼ同一であるが、詳細にみると地域差も認められる。具体的には、マガダン周辺については筆者未見のため詳細不明だが、アムール河口部とサハリンの土器は基本的に同一型式である(江の浦式Ⅰ類)。北海道北部と北海道東部では、それぞれ文様要素などになわずかな地域差を有する土器群(道北部では刻文Ⅰ群、道東部ではモヨロⅠ群Ⅰa類)が分布する。このように細かい地域差はあるが、全体としては斉一性の高い、ほぼ同一型式の土器が広範

囲に分布するというのがこの時期の特徴である。

b) 刻文系土器の分布拡大の背景

刻文系土器の成立は型式分布の爆発的拡大という意味でも、大陸とのつながりが顕在化するという意味でも、オホーツク文化における画期の一つとして位置づけられよう。この画期的変化に関連して研究課題となるのは、広域にわたって共通性の高い土器が分布するようになる背景、具体的には「サハリン以北から北海道へと大規模にヒトが流入してきたか／こなかったか」等のヒトの動きに関する問題であろう。前項でみたようにサハリン中部以北や千島列島の状況が不明なので、刻文系土器の分布域全域にわたる考察は現段階では難しい。しかし北海道ではこの問題に関するデータが得られているので、それらのデータ（下記の i）～iv））から刻文系土器の成立期におけるヒトの動きについて考察してみよう。

i) 第 7 章でみたようにこの時期では、十和田式の段階までで継続性が途切れる遺跡や、刻文期前半から利用が始まる遺跡が散見されるようになる。特に後者の遺跡は道東部に目立っており、結果的に道東部ではこの時期から遺跡数が増加する。

ii) 土器型式そのものについては、十和田式から刻文系土器への変化は漸移的ではなく、相対的にはむしろ速やかに置き換わるような状況であることが判明した。しかしながら、「十和田式土器の製作者が刻文系土器の要素を『受容』した」という状況を示すような、折衷的な土器（円形刺突文と刻文・肥厚帯とを併用する土器）もわずかながら存在する。注目すべきはこの手の折衷的な土器は道北端部だけではなく、根室市（八幡ほか編 1966：第 10 図 1～4）や日本海側の奥尻島（越田編 2003：図 17-15・図 23-9）にも存在する点である（注 12）。すなわち「受容」現象は情報流入の玄関口である道北端部だけではなく、日本海側や道東部でも起こっていたことがわかる。

iii) その一方で、刻文期前半の段階ですでに土器には微細な地域差があることが明らかになった。この地域差の境界は、アムール河口部・サハリン／道北部／道東部というように、続く時期の地域圏と共通する区分となるようである。

iv) 刻文期における地域差は、土器型式以外にも墓制などに存在することが明らかになっている（大井 1981：註 25、熊木 2002、高島 2003）（注 13）。

i) はこの時期にヒトの動きが活発化し、道東部への進出が積極的になされたことを示している（大井 1981：534）。ii) は十和田式土器の製作者が刻文系土器の型式学的要素を積極的に取り入れたことを示している。i) と併せると、この時期にサハリン以北からヒトが流入してきた可能性は考えられてよい（注 14）。ただしその場合もヒトの流入は道北部に集中するわけではなく、

道東部も含めて分散したのだと思われる。一方、iii) やiv) は逆に「一元的な地域（全く同じ型式の土器を製作している集団）からの大規模なヒトの流入」を否定するようなデータといえる。おそらく刻文期前半以前に「地域社会」のネットワークがすでに萌芽的に存在し、そのネットワークに取り込まれるような形・規模でヒトや土器情報の流入が起こったことをこのiii) やiv) のデータは示しているのではないだろうか。

以上のようにこの時期ではサハリン以北からヒトの流入があった可能性は高いが、それは一元的な地域からの大規模な侵入ではなく、すでに萌芽的に存在していた各地域別のネットワークに取り込まれる形・規模で起こったものである、とまとめることができよう。そしてこの時期以後、各地域毎のネットワークはさらに強化され、地域差がさらに顕在化してゆくことになる。

### 3) 刻文期以後における地域差の強化、及びその背景

#### a) 刻文期後半段階以後における地域差の概要

次の刻文期後半段階になると各地域で土器の型式差が目立ち始める。アムール河口部とサハリンでは江の浦式1類土器から江の浦式2類土器へと変化する。この段階では、オホーツク式系統に関して両地域の土器型式はまだ同一（江の浦式2類）であるが、アムール河口部では別系統の土器であるテバフ式c類土器が併存するようになり型式組成の面では地域差があらわれる。一方、道北部では刻文Ⅰ群土器から刻文Ⅱ群土器へと変化するが、ここで宗谷海峡以北との地域差は拡大する。道東部の刻文期後半の土器群（モヨロⅠ群1b類・同2a類・同2b類、モヨロⅡ群）は道北部の刻文Ⅱ群と近い部分もあるが、刻文期前半の特徴を維持する傾向がやや強く、やはり地域差が生じている。千島列島ではこの時期、北千島まで土器の分布が確認されているが、型式学的特徴は北千島の例も含め道東部の型式に近いようである。以上、全体としては宗谷海峡を境として型式差が拡大する、というのがこの時期の土器における変化といえる。

沈線文期以後、土器型式の地域差は各地でさらに拡大し、各地域型式圏の輪郭が明瞭になってくる。まず宗谷海峡より北では、江の浦式河口部3類土器・サハリン3類土器を設定したように、間宮海峡を境としてアムール河口部とサハリンの間で地域差が生じてくる。そしてアムール河口部ではテバフ式土器とオホーツク式土器の「融合」現象が認められるようになるほど、両系統の交渉が強化される。一方、北海道では特に道北部で型式変化が著しく進行して沈線文群土器が成立し、宗谷海峡以北との型式差がさらに強まる。道東部～南千島では在地の系統の上に道北部の影響が及び、沈線文系文様をもち道北部に近いモヨロⅤ群1類土器と、道北部・道東部の折衷的な土器であるモヨロⅢ群土器が並立する型式組成となる。

その後の型式変遷であるが、サハリン以北については江の浦式サハリン3類土器から南貝塚式

土器へと変化するが具体的な変遷過程はよくわかっていない。北海道では、沈線文期後半から道東部の系統が息を吹き返し、次の貼付文期になると道北端部では在地の系統が退化して道東部の系統に呑み込まれてしまうようになる。一方でこの時期の道東部では遺跡数・遺跡規模が増大し、貼付文系土器群が道北部まで展開する。

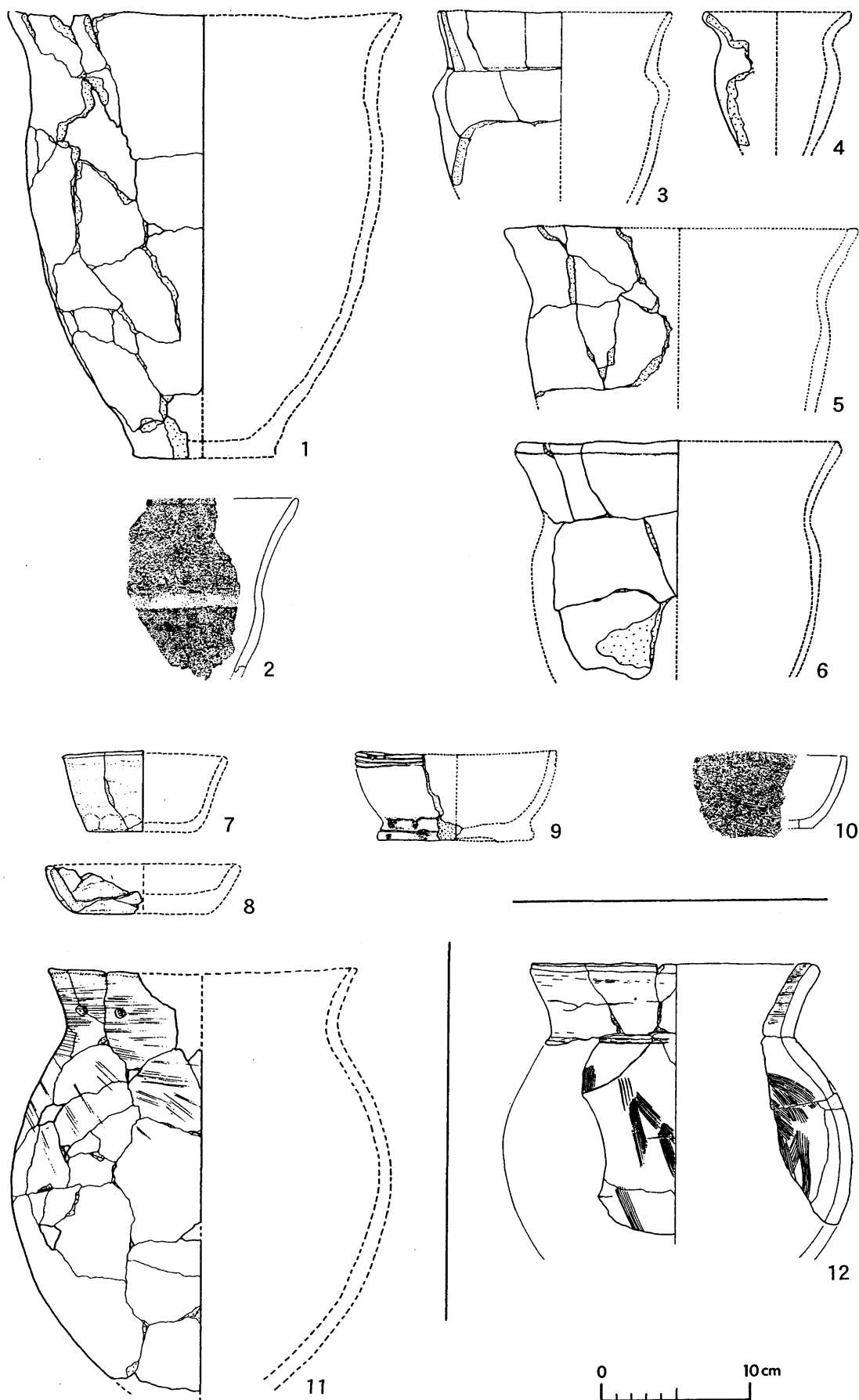
b) 北海道における地域差拡大の過程① オホーツク土器の地域差

オホーツク土器の地域差拡大は、刻文期後半にまずは宗谷海峡を境として型式圏が分かれていく形で始まることが判明した。これは先立つ時期の十和田式土器が宗谷海峡を跨いで拡がりつつも、海峡間で地域差は少ないこととは対照的である。その背景には、宗谷海峡間の往来よりも北海道内のネットワークが日常的かつ重要になった、という変化があると考えられる。それはオホーツク文化自身の「地域社会」の形成と関わってくるのであろうが、同時に擦文文化との接触・交流の持つ影響や役割が増大してきた結果である可能性も考慮する必要があるのではないだろうか。このように地域化が促進された原因の一つを「擦文文化との結びつきの強化」に求めるのであれば、近年の調査成果が物語るように（右代 2003、天野 2003、越田 2003）、日本海を舞台とした道北部オホーツク文化と続縄文文化・擦文文化との接触・交流の持つ影響や役割を、これまで以上に早い時期から重要視してゆく必要があるだろう。次節ではそのことを土器型式交渉の側面から具体的に指摘する。

次に道北部と道東部で地域差が拡大してゆく過程についてである。両地域での型式変遷を対比すると、道北部の方が型式変化が著しく、沈線文期前半になると道東部に道北部の影響（口縁部肥厚帯の消滅、沈線文の付加）が及ぶようになる。だが沈線文期後半になると型式の勢力関係は逆転し、道東部の影響（貼付文系文様の付加）が道北部に及ぶようになり、道北部の型式圏も次第に縮小してゆく（注 15）。このうち道北部での著しい型式変化（沈線文群土器の成立）に関しては、後述のように擦文土器との型式交渉による影響が一因となっていたと筆者は考えている。なお道北部から道東部へ沈線文系土器の影響が及ぶ背景には、その後の道北部で活動がやや低調になることからみても、道北部からのヒトの移動が伴っていた可能性が高い。そして貼付文期には逆に道東部から道北部へと型式の影響が及ぶようになるが、それには大規模なヒトの移動が伴うことはなく、道北部ではオホーツク文化の衰退・終末がやや早く訪れたようである。

c) 北海道における地域差拡大の過程② オホーツク土器と擦文土器の型式交渉

オホーツク土器と擦文土器との間で型式交渉を認めるのは難しいため、結果として両系統の型式編年対比が困難になることを述べた。しかしながら各氏が指摘してきたように（藤本 1966、



第 113 図 擦文土器の器形を模したオホーツク土器 (1~11)

(比較資料) 擦文土器 (12)

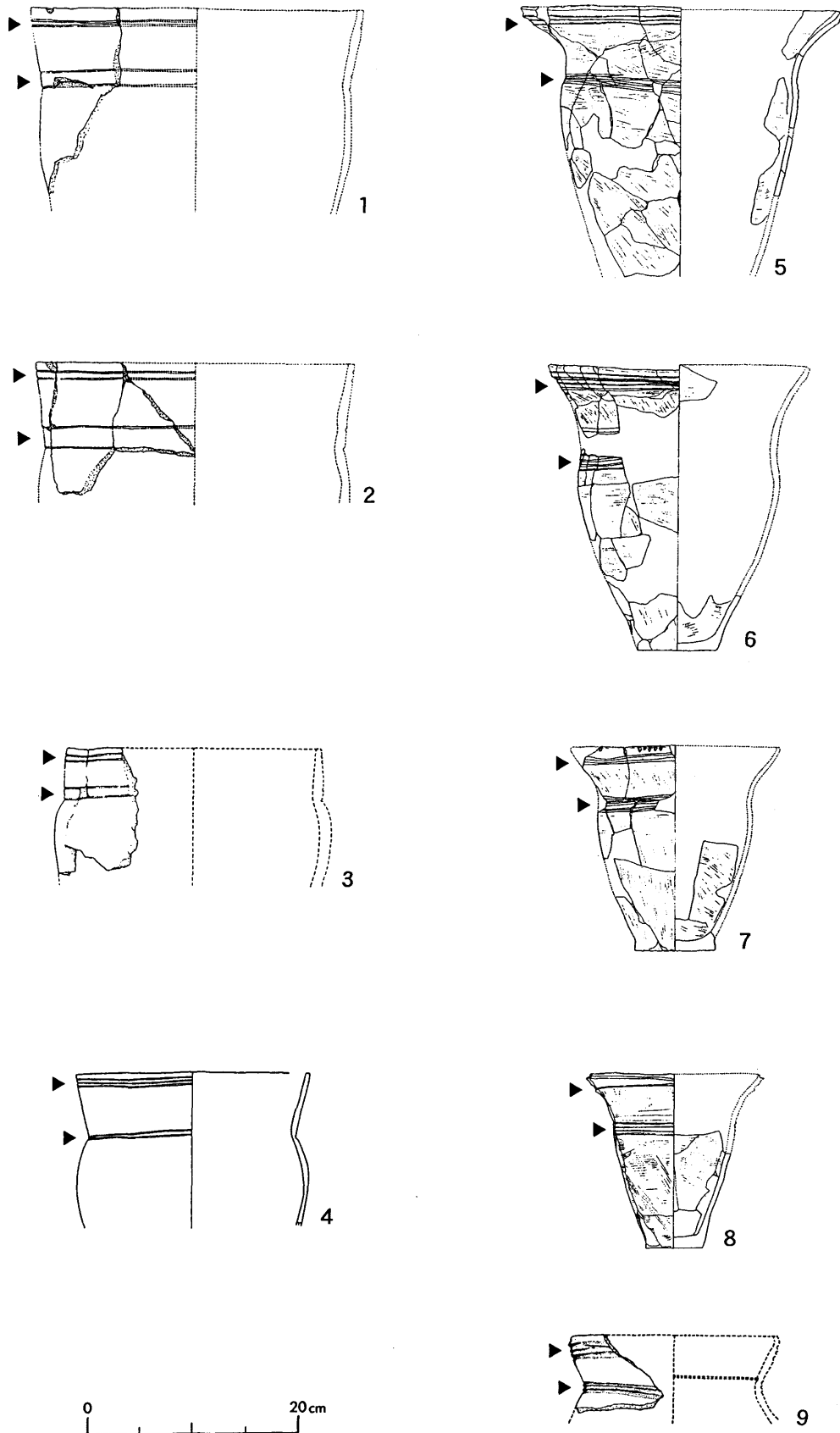
1~6・9~11: 香深井 A 7・8: 目梨泊 12: 祝梅三角山 D

大井 1981、佐藤編 1994)、実は両型式間で型式学的な影響関係があることを示すような土器はこれまでに少数ながら確認されている。いずれも擦文土器からオホーツク土器の側に影響が及んだとされる事例である。

まずは器形の影響についてみておこう。大井氏は香深井 A 遺跡出土のオホーツク土器のうちに、「器形・外壁の擦痕など、擦文式土器ないし土師器に類する特徴を持つ例がないわけではない」として、第 113 図 1～6 等の土器を例示した（大井 1981：550）。これらは口縁部が大きく開く器形が特徴的である一方、全て文様のない土器であることには注意しておきたい。すなわち大井氏は器形に関する影響関係のみを「特例」（大井 1981）として認めていただだけで、後述する文様等の影響関係については否定的に捉えていたと考えられる。

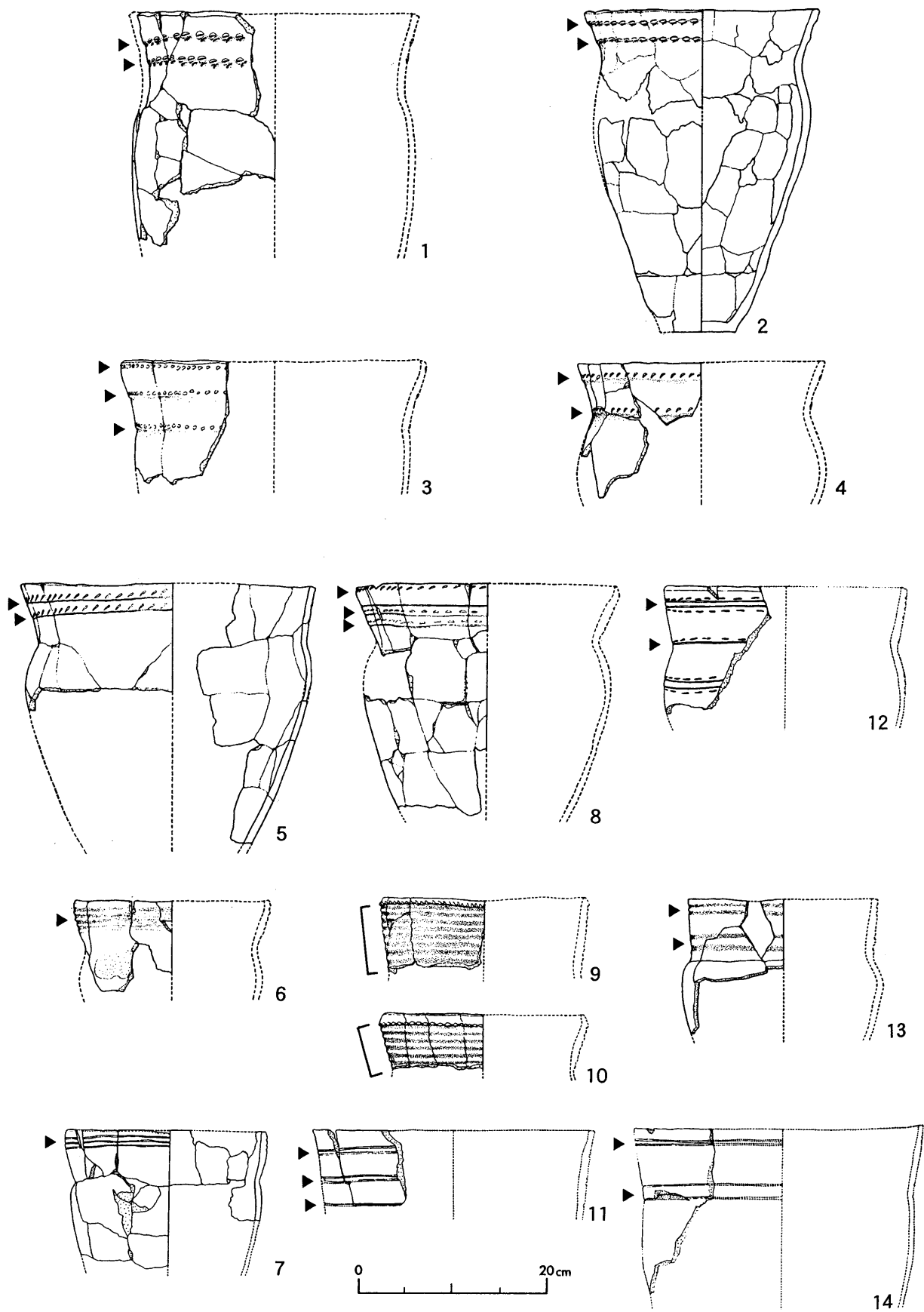
次はオホーツク土器にはない器種をオホーツク人が模倣した例である。佐藤隆広氏は枝幸町目梨泊遺跡出土の「小型の碗」（第 113 図 7）および「灯明皿に近い器形」（第 113 図 8）の土器について、「その器形などは明らかに土師器を意識したものと思われる」と述べている（佐藤編 1994：155）。正確な模倣とはいえないが、佐藤氏の指摘通りこれらは土師器の坏を意識したものとみてよいであろう。管見では香深井 A 遺跡でも魚骨層Ⅰおよび魚骨層Ⅲから同様の器形の土器が出土している（第 113 図 9・10）（注 16）。他に器種については香深井 A 遺跡間層Ⅲ／Ⅳ出土土器（第 113 図 11）にも注意しておきたい。この土器のように胴部が球形に膨らみ、胴部下半が丸いカーブを描いてすぼまる器形は、土師器ないし擦文土器のいわゆる球胴甕を模したものである可能性が高い。模倣がそれほど正確ではないので型式同定は難しいが、胴部の張り出しと口縁部の拡がりがともに弱い点や、これまで検討してきた併行関係から推察すると、塚本編年Ⅰ期の球胴甕（第 113 図 12）の模倣である可能性が高いと言えよう。以上の器形・器種模倣例は、香深井 A 遺跡では間層Ⅴ／Ⅵから魚骨層Ⅰまでの間で出土しており、十和田式期後半から沈線文期前半までの各時期にわたって土師器ないし擦文土器の模倣が少数ながら行われていたことがわかる。

擦文土器からの影響については、これら器形・器種の影響以外にも、前節で見たようにオホーツク文化の各時期においては土師器・擦文土器そのものが少数ながら搬入されている。しかしこれらの搬入例も含めて擦文土器からの影響が上記のみに止まるのであれば、やはり大井氏の指摘通りオホーツク土器と擦文土器の型式交渉は稀な「特例」であったことになるだろう。だがここで筆者はかつて藤本強氏が指摘した文様の類似にも注目してみたい。実は藤本氏は氏の編年の a 群土器の文様について、「摩擦式浮文と江別式、北大式のある種のものに見られる巾広の沈線文、更に擦文土器の初期のものに現われる数条～十数条の横走る沈線文とは、出現の時期から考えて、



第 114 図 オホーツク土器 (1~4) と擦文土器 (5~9) の文様構成

1~3・9: 香深井 A 4: 香深井 6 5~8: 末広



第 115 図 道北部刻文Ⅱ群土器から沈線文群土器への変遷過程

1~14 : 香深井 A

無関係であったとは云えないものがある」と指摘していたのである（藤本 1966 : 39）。この指摘のうち、摩擦式浮文と北大式の関連については筆者編年では時間的な隔たりが大きいので同意できないが、沈線文系土器と擦文土器の関係はあらためて注意されてよい。筆者編年でオホーツク土器沈線文期と併行するのは塚本編年 2 期の擦文土器であるので、両者で実際に比較してみよう。

まず注目されるのは沈線文の意匠と施文位置であろう（第 114 図）。擦文土器塚本編年 2 期では甕に沈線文が出現するが、その沈線文の特徴は、数本が単位となって、口唇部の直下と、頸部と胴部の境目の段の部分に施されて間には無文部が残されるというものである（塚本分類の文様 a（塚本 2002 : 150-151））（第 114 図 5～8）。一方、併行する道北部のオホーツク土器（沈線文群前半の土器）にも、これとよく似た文様構成を持つ例が散見される（第 114 図 1～4）。この類似的背景にはある種の型式交渉が認められるというのが筆者の想定である。ただしこれらの文様構成はオホーツク・擦文のそれぞれの系統の中でもスムーズな変遷として捉えうるので、全くの「他人の空似」である可能性もないとはいえない。各々の系統の流れを確認しておこう。

まずはオホーツク沈線文群前半の土器の成立過程である（第 115 図）。先立つ刻文期後半の刻文Ⅱ群土器の文様構成を見ると、口縁部上半に複数の文様列がある例（第 115 図 1・2）から、口縁部全体ないし上端と下端にまで文様列が広がる例（第 115 図 3・4）へと型式変遷が想定される（注 17）。続く沈線文期前半では a）口縁部全体に文様列が広がる例（第 115 図 8～11）を基本として、b）口縁部上縁にのみ文様列がある例（第 115 図 5～7）や、c）口縁部の上縁と下縁にのみ文様列がある例（第 115 図 12～14）がそれらのバリエーションとして併存するようになる。ちなみにこれら a）～c）が時期差であることを示すデータはない。また文様要素との結びつきについては c）が沈線文と結びつく傾向が強いようにも見えるが、それほど明確ではない。

一方、擦文土器における沈線の出現であるが、菊池徹夫氏は土師器の頸部に見られる段状のくびれが発展し、平行沈線文に置き換わるといった変遷過程を示唆している（菊池 1984 : 99・143）。菊池氏の説に従えば沈線文の出現は縦の系統の流れのなかで説明できることになり、横の影響関係を無理に想定する必要はなくなる。

系統解釈の現状は上記のようであり、また沈線文自体の特徴もやや異なる（注 18）ので、筆者も当初はこれら文様構成の「類似」を偶然と考えていた。考えが変わったのは第 114 図 9 の土器を実見してからである。この土器は香深井 A 遺跡の攪乱・排土から出土した土器で、報告では「やや特異な例」（大場・大井編 1976 : 141）とされながらもオホーツク土器に分類されている。筆者の見たところでは、確かに頸部が短くあまり外に開かないという特異点はあるが、胎土・焼成が良好でやや堅緻である点、器面調整は外面が縦方向となる点、器形は口唇面の中央が凹んでいる点（塚本分類口辺部形態 c）、沈線文の施文具が太くて施文が深い点など、むしろ塚本編年 2

期～3 期の擦文土器とした方が妥当であるように思われた。しかしここで筆者が問題にしたいのは分類の是非ではなく、「どちらか判断に迷うような土器が存在すること自体」にある。この土器が搬入／模倣のいずれかであるかの判断は難しいが、たとえ搬入土器であったにせよ折衷的な要素はあるとみられるから、搬入元の擦文土器製作者はオホーツク土器の特徴を意識していたと考えられる。この土器をそのように評価するならば先に筆者が指摘した文様構成の「類似」は現実味を帯びてくるし、またそのような意識のもとであらためて沈線文期のオホーツク土器を見た場合、例えば第 115 図 8 のような頸部と胴部の境の屈曲点が明確でそこから口縁部が直線的に開く器形（大井分類Ⅰd：第 7 章第 55 図参照）など、土師器ないし擦文土器からの影響を再検討すべき要素が認められてくるように思われる。

以上、筆者はこの時期の道北部オホーツク土器と擦文土器の間に、従来の評価よりもさらに進んだ型式交渉を認めるものである。むろん、この時期の型式交渉は後の時期の「元地式」土器やトビタイ土器群と比較した場合にはそれほど緊密とはいえない。しかしこの時期の交流が、土師器ないし擦文土器に沈線文が付加されたり、道北部オホーツク土器の地域色を強める契機の一つにはなったであろうし、両系統で類似する文様構成が採用される背景には、少なくとも文様意匠に対するイメージが共有・同期される程度の交流が存在したとはいえるのではないだろうか。

さらに重要なのは、道北部とは異なり、道東部のオホーツク土器には擦文土器との直接的な型式交渉を示唆するような特徴がほとんど見出せない点である。擦文文化とオホーツク文化の接触過程をめぐっては、道央部からの擦文文化の移動・拡散が日本海沿岸経由でいち早く行われた（大井 1984a、塚本 2003）ことなどを根拠として、日本海側や道北部では接触がより早く、その機会も頻繁であったことが示唆されてきた（大井 1981）。ここでの土器の分析結果は、日本海沿岸を舞台とした接触が道東部での交流よりもやや早い段階から行われたことを追認すると同時に、日本海沿岸での「接触」の内容が、「相互にみるべき影響・文物の交流は起っていなかった」（大井 1981：550）という段階よりもやや緊密な「交流」として評価すべきものであったことを示唆している。

#### d) アムール河口部における地域差拡大とその背景

オホーツク土器の地域差拡大に関してはアムール河口部での成果も興味深い。北海道で地域化が進行する頃、アムール河口部でもオホーツク式系土器とテバフ式系土器の型式交渉が進展するが、テバフ式系土器の系譜がヤクーチャ方面に求められるとするならば、この時期のアムール河口部においては、少なくとも土器型式に関してはアムール下流域よりもむしろ北西側（ヤクーチャ方面）との関係が緊密になる、という可能性が高くなってきた。土器型式の交渉がこの通りであるとすれば、青銅器等の大陸系遺物の供給元がアムール中・下流域であることとは対照的とな

る。大陸系遺物の具体的な搬入ルートが明らかではない現状では多くを語ることはできないが、土器と稀少遺物との間にある系統の齟齬は、同じ地域間交流でも対象によって形態・相手先・背景が異なるような、重層的・多面的な交流の実態を暗示するデータとして注目されよう。

#### 注

- (1) 放射性炭素年代については較正年代や海洋リザーバー効果の問題も含めて最近さらに論議が高まっているところであるので、ここでは扱いを保留とし、測定データは取り上げないことにする。
- (2) 最近、鈴木信氏は北大Ⅰ式の上限が4世紀後葉に遡るという年代観を発表している（鈴木 2003）。従来の見解よりもやや古い年代観といえよう。ここでは細かい議論には立ち入らず本文中のような大まかな年代観を与えておく。
- (3) ちなみに宇部則保氏は馬淵川流域の土師器編年を考察するなかで、赤彩坏と内外面に黒色処理された坏の交替の時期を氏の編年の二段階と三段階の間、暦年代では7世紀中葉と後葉の間においている（宇部 2002）。宇部氏の説に従った場合でも亦稚貝塚の坏は7世紀中葉以前に収まることとなり、小野氏の年代観との矛盾は生じない。しかしながら赤彩坏の編年観について小野氏と宇部氏の間で若干の差がみられる点には注意しておきたい。
- (4) 森秀之氏（森 1997）は本文中で言及した目梨泊遺跡出土の4振の蕨手刀のうち、第34号土墳墓の2号刀については厳密にみると八木氏分類の範疇には収まらず、分類不可能になるとしている。その一方で、森氏はこれらの4振の蕨手刀を全て7世紀代に比定している。氏の年代観の根拠は、目梨泊遺跡で蕨手刀に加えて出土している直刀の編年対比にあるようである。しかし氏自らが述べているように直刀の使用年代はやや長い期間にわたるようであり、また氏が7世紀に比定した太刀を出土する恵庭市柏木東遺跡等の年代については、8世紀代とする意見が主流となっている（鈴木 1999 など）。ここでは本文のように八木氏の年代観に従っておくこととしたい。
- (5) 擦文文化の暦年代に関する最近の学説は塚本 2002 のほか、右代 1999 にも簡潔にまとめられている。本論との関連で特に問題となるのは擦文文化全体の年代幅、すなわち開始年代と終末年代であろう。前者については7世紀からというのが一般的なようであるが、6世紀台まで遡らせる意見（大沼 1996a、同 1996b、仲田 1997）もあり、後者については年代に地理的な傾斜を認める見解（塚本 2002 参照）や、擦文文化の終末を11世紀後葉まで遡らせる意見（三浦 1994）まで諸説がある。塚本編年の年代観は現時点での最大公約数的なものと位置づけることができよう。ここでは塚本編年に従ったが、以上のような議論がある点は明記しておく。
- (6) 柳澤清一氏はこのニツ岩遺跡や後述するトコロチャシ跡遺跡1号竪穴での擦文土器ないし土師器の共伴例について、出土したオホーツク土器と同時期とすることに疑問を投げかけている（柳澤 2003）。柳澤氏の意見に対しては以下のように反論しておく。

確かにオホーツク文化堅穴住居内の骨塚には、オホーツク人の「土器送り」的な行為の結果として残されたような形で、古い時期の土器が安置されていることがある（宇田川・熊木編 2003：39-40）。管見では、北筒式土器が安置されていた常呂町栄浦第二遺跡 23 号堅穴骨塚（武田編 1995）と、後北 C<sub>2</sub>・D 式土器が置かれていた常呂町トコロチャシ跡遺跡 7 号堅穴外側骨塚（宇田川・熊木編 2003）、さらに本文で触れたニツ岩遺跡の 3 例が確認されている。しかし、ニツ岩遺跡やトコロチャシ跡遺跡 1 号堅穴例の場合は他とは異なり、安置された擦文土器とオホーツク土器の間に著しい時間的な隔たりを考える必要はないと筆者は考える。

ニツ岩遺跡やトコロチャシ跡遺跡 1 号堅穴例と他の事例の違いは土器の入手方法にある。栄浦第二遺跡やトコロチャシ跡遺跡の場合、縄文・続縄文時代の土器を出土する遺跡・遺構は同一地点に多数形成されている。上記 2 遺跡のオホーツク人にとってこれら前時代の土器は堅穴住居の構築時等に偶然遭遇できるほどありふれたものであって、実際、トコロチャシ跡遺跡ではオホーツク文化の堅穴が続縄文期の墓墳を破壊していることが確認されている（9 号堅穴：未報告）。よって上記 2 遺跡の場合、骨塚出土の前時代の土器はそのような状況でいわば「拾われた」ものである可能性が高いとみられる。その一方で、ニツ岩遺跡例にみられるような塚本編年 3 期の擦文土器は同遺跡周辺はおろか道東一円でもきわめて稀なものであり、住居の構築時等に偶然遭遇できる可能性はほぼ無いに等しい。すなわち、ニツ岩の擦文土器は交易等により人の手を介して意識的に入手された可能性が高いといえる。少なくとも擦文文化の遺構を偶然破壊した際に入手したという可能性はほとんど無いと思われる。また、トコロチャシ跡遺跡 1 号堅穴の例は骨塚出土ではないが、同様の事実関係と論理でやはり偶然の入手は否定される。なお柳澤氏はトコロチャシ跡遺跡 1 号堅穴の地点で、オホーツク文化の堅穴に先だってに擦文文化宇田川編年中期頃の堅穴住居址が構築されていた可能性を述べているが、この遺跡（トコロチャシ跡並びに同オホーツク地点）では擦文文化の堅穴住居の痕跡はこれまで全く確認されていない。確かに土器は出土しており擦文文化の活動があったことは認められるが、堅穴住居の痕跡は全く認められないと断言してよいし、今後もそれらが発見される可能性はほとんどないとみられる。その理由はおそらく、「窪みの明らかな地点には居住しない」という擦文文化の住居構築パターン（藤本 1977：130）によるところが大きいと考えられる。トコロチャシ跡遺跡や常呂川河口遺跡、栄浦第二遺跡等の、オホーツク文化と擦文文化が混在する遺跡で両者の堅穴住居址が切り合っているケースが絶無であるのは、オホーツク文化の終末後にこれらの遺跡に擦文文化が去来して堅穴住居を構築したこと（時期は塚本編年 4 期以後）を非常にわかりやすく示すものであると筆者はとらえている。

残る可能性として柳澤氏は、オホーツク人による伝世、またはオホーツク人が同一地点における前代のオホーツク文化堅穴を重複利用した際に偶然入手したことを想定している。「伝世」という可能性は皆無ではなかろうが、管見ではそれが明らかな事例はもとより、その可能性を示すような事例すらこれまで全く確認されていない。よって現時点で「伝世」を想定するのは確率的にはかなりの無理であろう。

一方、オホーツク人による再利用についてもその可能性がないとはいえないが、それを認めた場合でも問題の土師器ないし擦文土器が、それらの出土遺跡におけるオホーツク文化の活動時期の上限（ニツ岩遺跡では貼付文期後半）を大きく遡ることはないことになる。以上の説明で、これらの土器の「共伴」を否定し、自らの編年と整合させるべく土師器ないし擦文土器を古く位置づけようとした柳澤氏の主張には根拠らしいものがほとんどないことが理解できるであろう。なお、擦文文化がオホーツク文化よりも早く終末を迎えるという氏の「北方編年」に対しては、型式編年研究の見地から逐一反論を行っても筆者にとっては不毛な作業となるので言及しないが、以上の説明は別の見地からの反証となる。ちなみに柳澤編年に対する批判はすでに高瀬克範氏によって明瞭簡潔になされているので参照されたい（高瀬2002a）。

- (7) 大西氏は、古手のトビニタイ土器であるいわゆる「トビニタイ土器群Ⅱ」（菊池1972）＝大西編年の「トビニタイⅡ型」が、知床半島南西岸では新しい時期まで残存したとしている。氏の説の根拠は層位的データにありそれなりの説得力をもつが、型式学的な見地からはやや疑問が残る。この問題については南千島の動向が鍵を握ると考えられるが、データ不足の現状では結論を出すのは難しい。よってここでは、とりあえず氏の編年のトビニタイ「前期」を氏の「カリカリウス型」と「トビニタイⅡ型」相当に、「後期」を「トビニタイⅢ型」と「トビニタイⅠ型」相当と読み替え、知床半島南西岸でトビニタイ「後期」まで残存するとされる「トビニタイⅡ型」の扱いについては判断を保留する。
- (8) 熊木2000cでは『突帯文系』江の浦A式土器という用語を使用した。これは本論で言う江の浦式河川部3類土器・サハリン3類土器のうちの突帯状の肥厚帯を有する資料（第103図45～47、第111図21・30～35）との対比から命名したものであった。ただし（当時から意識していたのであるが）、「元地式」土器の中には、江の浦A式サハリン3類のうちの「幅広でやや薄いタイプ」の肥厚帯を持つ例の方と文様意匠等が近くなる例も多数認められており、その意味では熊木2000cの用語は誤解を招きやすい表現であった。本論の編年で補遺訂正しておきたい。

なお、山浦清氏（山浦1985）や大沼忠春氏（大沼1996a）は、「元地式」をサハリンの「東多来加式」（伊東1942）と関連づけている。伊東氏がこの「東多来加式」について「器形が雄大で且つ土器は非常に厚手」（伊東前掲：10）と述べている点は確かに「元地式」と符合する点があり、傾聴すべき見解であろう。「元地式」と、先立つ時期のオホーツク土器との間に型式学的ギャップが激しい点も（熊木2000c）、この時期の道北部とサハリンとの関係強化を暗示している。山浦氏や大沼氏に従うならば、筆者が指摘した江の浦式3類と「元地式」の型式学的類似は前後関係として捉えられることになる。しかし筆者は未だ「東多来加式」を実見できておらず、土器の実態や編年対比について定見を持つに至っていないのでここでは判断を保留しておく。

- 9) ただし鈴谷式土器のもっとも新しい段階「鈴谷式タイプC2」はサハリン南部でしか確認されていない。確認された数そのものが僅少であるので詳細不明であり、この段階から分布域の縮小が始まっているの

か否かは確言できないが、いずれにしろそれ以前の段階の鈴谷式から十和田式にかけての間に分布域の縮小が認められることは事実であろう。

- (10) 天野氏は香深井 A 遺跡魚骨層Ⅳ出土の北大式土器（大場・大井編 1981：第 374 図 7）を「北大Ⅰ式」としている。しかしこの土器は鈴木氏編年では北大Ⅲ式「古」段階に相当するもので、鈴木氏によれば北大Ⅰ式の最終末併行に位置づけられる（鈴木 2003）。いずれにしろこの土器は一般的な北大Ⅰ式の範疇に収まるものではなく、時期もやや新しいものと思われる。管見では、香深井 A 遺跡で北大Ⅰ式と同定しうるのは間層Ⅲ／Ⅳ出土の注口土器（大場・大井編前掲：第 337 図 1・2）のみであり、あとは前述の例を含めて北大Ⅱ式が数点出土しているだけである。香深井 A 遺跡でもやはり十和田式と北大Ⅰ式の積極的な型式交渉の根拠を認めるのは難しい。
- (11) ただし、同じ奥尻島内の宮津チャシ遺跡では北大Ⅰ式・Ⅱ式が確認されている（乾 1997：第 3 図 3・6）。
- (12) 天野哲也氏はこの点を見落としている（天野 1978：註 82）。
- (13) 2003 年度の網走市モヨロ貝塚発掘調査で筆者らは刻文期前半の竪穴住居址（9 号住居址）の調査を行ったが（未報告）、そこでの特徴、特に住居の建て替え等の様相（縮小して入れ子状に重複させる）は香深井 A 遺跡等の道北部の竪穴住居址とはやや異なり、むしろ常呂町トコロチャシ跡遺跡等の道東部貼付文期のパターンに近いものであった。この例にみるように、墓制だけではなく、居住形態等でも刻文期前半の段階から地域差が存在する可能性は高い。
- (14) サハリン以北からのヒトの流入については、すでに大井晴男氏や小野裕子氏が"carring capacity"の観点から言及している（大井 1982a：（上）註 35、大井 1988：473・註 28、小野 1996：（下）註 108・註 110）。
- (15) このように道北部／道東部の型式圏の境界が南北に揺れ動くことや、貼付文期に道東部の型式が道北部に拡大してゆくことについては、小野氏が集団関係論の立場から言及している（小野 1996：（上）註 4、同：（下）註 95）。
- (16) 靺鞨系土器にも碗形の器種が存在する点には注意が必要である。しかしここであげた例は刻文期後半以降に比定される可能性が高い一方で、刻文期前半の土器群にこれらの器種が確実に伴う例は見あたらない点からすると、これらの器種が靺鞨系土器に由来する可能性は低いとみられる。
- (17) 刻文期の後半の土器から沈線文期の土器への型式変遷の流れについては、天野哲也氏による指摘がすでにあり（天野 1981：320-321）、ここではそれも参考にしている。
- (18) 擦文土器の沈線文の施文具は断面形が太く角張っている（塚本 2002：151）。一方オホーツク土器の沈線文は先端が鋭く細い施文具で施されたものが大半である。

## 第 11 章 先行研究との比較

本章では本論第Ⅱ部で筆者が参照した主な論文について言及し、本論が先学に依拠した部分と、それを基礎として筆者なりに発展させた部分とを明確にしておきたい。

なお、本章で取り上げるのはオホーツク土器全体の編年を論じた主要論文のうちの、筆者が重要と考える各氏の論文である。前章で引用した擦文土器とオホーツク土器・トビニタイ土器との関係に関する諸論文や、すでに前章までに内容を検討した一部の論文については、取り上げていないものもある。ちなみに 1980 年代以前のオホーツク文化研究全体の学史については種市幸生氏や大井晴男氏による総括がある（種市 1980、大井 1982c）。ここでは 1960 年代以後の学説を中心に論じたので、それ以前の諸説については両氏による総括を参照されたい。

### 1) 伊東信雄氏によるサハリン編年（伊東 1942、1982）

第 9 章でも述べたように、サハリンのオホーツク土器編年については現在でも伊東氏の編年が基礎となっている。筆者は本論第Ⅰ部第 5 章で鈴谷式の編年を、第 9 章で江の浦 B 式・A 式の編年を再検討し、細別・地域差・縦の系統・横の影響関係を整理したが、大筋では伊東氏の示した編年の流れを変更する必要はなかった。1942 年当時のごく限られた資料を基にした編年が現在でも有効であることは驚くべきことで、伊東氏の慧眼を証明している。ただし、伊東編年の東多来加式については現在でも実態がほとんど不明である。伊東編年を支持する土器研究者にとっては、東多来加式の解明が残された重要な課題であるといえよう。

なおサハリンとアムール河口部の土器編年研究においては、最近の臼杵勲氏や V. デリュューギン氏の研究も重要であるが、第 9 章で詳述したのでここでは繰り返さない。

### 2) 藤本強氏による北海道編年（藤本 1966）

藤本氏の編年は戦後に行われた主要な発掘調査の成果をまとめる形で行われた。氏はオホーツク土器の文様を属性分析の手法を用いて分類して遺構・層位別に集計し、a・b・c・d・e の各群を設定し、a→e 群の順で編年した。さらに氏は十和田式相当の土器が a 群以前に位置づけられることと、現在トビニタイ期前半に位置づけられる土器群が e 群に後続することを指摘したのである。a 群の位置づけについては後に大井氏により修正されたが（大井 1972b、1973）、b～e 群

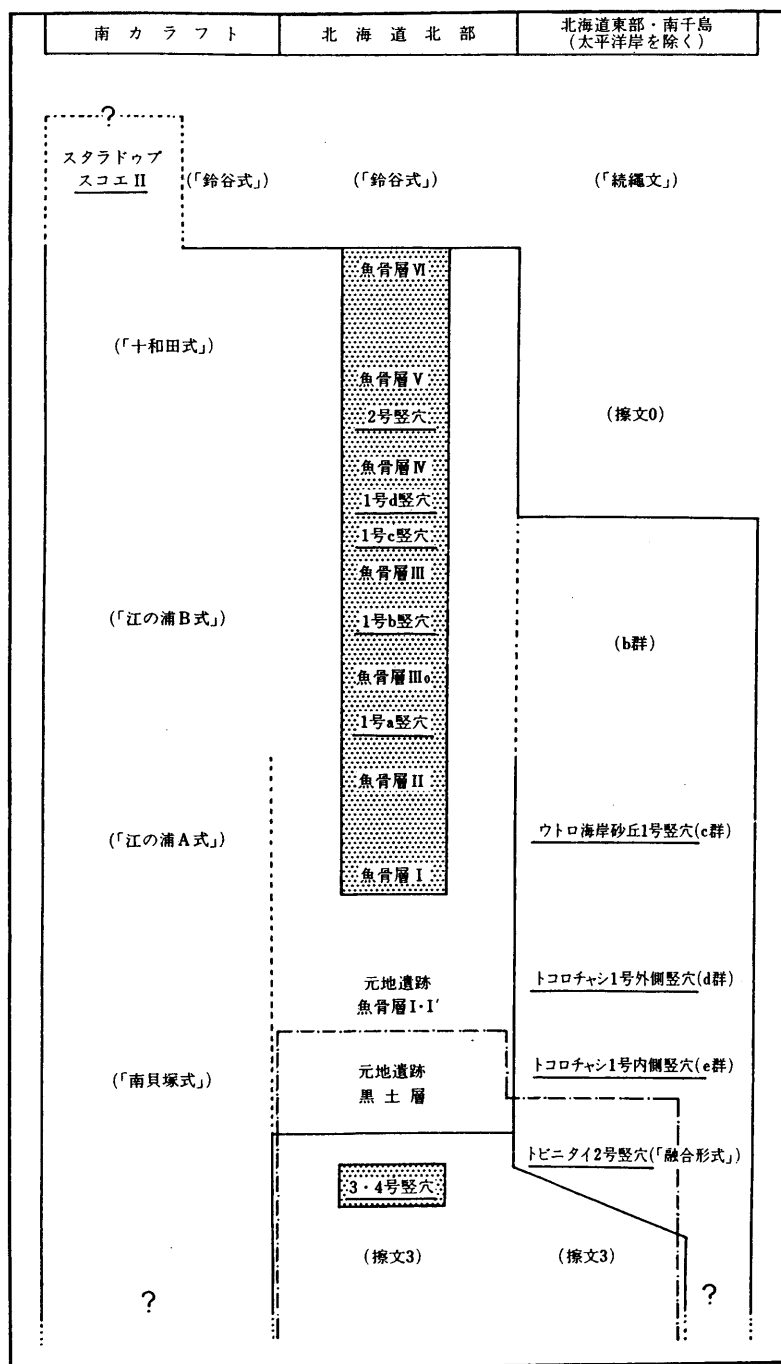
の細別型式は現在でも用いられている。この藤本編年がオホーツク土器研究の基礎となっていることは間違いなく、現在でも多くの研究が氏の編年に依拠している。

筆者編年との対比では特に c 群の内容が問題となろう。筆者は c 群相当期の道東部の型式を、前述のように「道東部の系統」と「道北部からの影響」という二側面から整理し、モヨロⅢ群・V群 1 類→モヨロⅣ群・V群 2 類という型式編年へと再編した。逆説的なことに、実はこのような系統観のヒントは藤本氏の系統分析にあったのである。氏は a 群の位置づけを検討する際に、「b～e までの土器群の変化は漸進的なもので、その間に a 群の入る余地は全くない」（藤本 1966：34）と述べている。この「b～e までの変化が一連である」という指摘こそが、筆者に「道東部の系統」を意識させる契機となった。そしてその系統的変遷の中に散見されるイレギュラーな特徴こそが a 群の要素＝道北部の影響である、という理解へとつながったのである。

もう一つ、方法論的な側面にも注意しておきたい。氏の編年は「層位別に文様要素を集計する」という方法に基づいて行われた。当時、層位的データを伴う調査成果は限られており、竪穴床面一括土器群の事例や貝塚の層位を最大限活用しようとする意図がそこには感じられる。この藤本氏の方法は大井氏の「型式論」に継承されていくことになるが（大井 1982a：（上）註 15）、そこで問題となってくるのが「層位」と「型式」の関係であった。

### 3) 大井晴男氏による「型式論」（大井 1982a）と編年（大井 1972a、1972b、1973、1981、その他）

大井氏の「型式論」に対する批判は第 7 章で詳述したが、批判の第一は「層位が型式に優先する」という主張に対するものであった。しかし藤本編年の当時、さらには大井氏「型式論」の時点においても利用できた資料は限られ、大井の編年においてすら未確定部分があったことを考慮するならば、「層位」を優先して編年の確実な基点とする方針が両氏の編年に採用されたことは、当時としてはむしろ当然で賢明な選択であったと評価すべきかもしれない。実際にそのような方法によって系統観と編年の基礎が確立されたのである。その意味で、あるいは筆者の批判には学史に対する配慮を欠く部分があるというべきなのかもしれない。ただし「層位が型式に優先する」というのが決して自明の論理ではない点に対しては、もう少し注意が払われるべきであったと筆者は考える。さらに第 7 章でも述べたように大井氏「型式論」の発表当時には、すでに香深井 A 遺跡の「層位」と矛盾する事例が存在していた。それらの矛盾例は「土器製作集団の世代差」として解釈されたが、順序としては、香深井 A 遺跡の「層位」そのものに対するアンチテーゼとなる可能性がまず先に考慮されるべきであったと考えられる。



	カラフト	道北部	道東部
前期	十和田式	香深井魚骨層 (Ⅴ)	
中期	江の浦 B式) 江の浦 A式)	Ⅲ)	藤 b 群) 本 c 群)
後期	南貝塚式・東多米加式	I	d 群) e 群)

第 116 図 上段：大井晴男氏による編年表

下段：天野哲也氏による編年表

批判の第二としては属性分析の手法に言及した。通常、一個体の土器の中には編年の指標となる属性が複数存在するのだが、それらの属性を個別に分析した場合と、「一個体中の属性の組合せ」に着目して変遷を捉えた場合とでは、型式変遷過程に対する認識が異なってくることを述べた。しかし本論で筆者が用いた方法も、「対象資料全体を属性分析の手法に基づいて分析し、帰納的に型式を認定する」という点で藤本氏・大井氏が用いた方法の延長線上にあることは確かである。さらに文様要素の分類などの実践面においても、本論が両氏の業績に依拠している部分は多い。

本論では大井氏に対する批判を前面にうち出してきた。しかし実は筆者の編年は、大枠では大井氏の編年観（第 116 図上）と重なる部分が大きいのである。あらためて言うまでもなく、今日のオホーツク文化研究の発展は大井氏の業績による部分が大きく、それは土器編年についても例外ではない。道北部と道東部の間で地域差があることの指摘に始まり、それら地域間の編年対比（特に藤本編年 c 群が香深井 A 遺跡魚骨層Ⅱ～Ⅰとほぼ併行関係になる点）、擦文土器との編年対比、「元地式」やトビニタイ土器群の位置づけなど、およそその編年観において筆者の編年は大井氏の業績に準拠しているといっても過言ではない。むしろ、（発表年代の新しい）右代氏の編年観（後述）との差の方が大きいのが実状なのである。では大井氏編年と筆者編年の違いは何か。暦年代やサハリンの編年に関する異同もあるが、決定的な違いはやはり「型式論」に係る部分である。大井氏の「型式論」では、一時期に筆者編年という 3 型式以上の土器群が重複して併存することになる。それに対し筆者の編年では、隣接する 2 つの型式が同時に併存することはありうるが、3 つ以上の型式が併存することはないと考える。この隔たりは大きい、先に述べたように大枠での編年観については、実は筆者と大井氏はそう遠いところにいるわけではない。

#### 4) 天野哲也氏による土器研究（天野 1978a、1981）

天野氏の方法論と編年が大井氏の「型式論」に準拠していることは、あらためて指摘するまでもないであろう。そのことを踏まえた上でここでは以下の 2 点に注目したい。

一つは大井編年との異同である。第 116 図下は天野氏による編年であるが、同図上の大井編年とは、地域間の編年対比において差が認められる。特に藤本編年 c 群並びに江の浦 A 式の位置づけに注目されたい。これらの位置づけについての筆者の考えは、天野氏よりもむしろ大井氏に近い。

さらにより重要な点として、天野氏の型式変遷に対する見方をあげておこう。第 10 章注 17 でも触れたが、天野氏は刻文系土器から沈線文土器に至る変遷過程について以下のように述べている。

「肥厚帯の幅が拡大するに従って、その下縁に施文される刻文系文様の位置は、必然的に下がる。そしてこれと口唇部との間の拡大された空間には、肥厚帯下縁部と同じ文様が刻まれることが多くなり、文様の複段化、文様帯の拡大が進行する。肥厚帯が消失したり、あるいは不明瞭な例では、頸部にまで文様帯のおよぶものすら現われる。」(天野 1981 : 320-321)

本論で筆者が示した刻文Ⅱ群土器から沈線文群土器への変遷過程は、上記のようにすでに天野氏によって言及されていた。筆者が刻文系土器の細別を意識するに至ったのは、この天野氏の指摘による部分が多い。

しかしここで読者は矛盾に気づくであろう。なぜならば、上記の天野氏の説明は、型式変遷を筆者と同じように単線的かつ不可逆的にとらえていることの表明に他ならないからである。すなわち、大井氏が提起し天野氏も採用した「型式論的変遷」－「複数の型式論的特徴が、(中略)重複しながら漸移的に推移してゆく形」(大井 1982a : (上) 37)－と上記の説明は明らかに矛盾する。おそらく天野氏の認識の中でも、香深井 A 遺跡の「層位」と、経験的・直感的に抽象された型式組列とがうまくかみ合っていないのではないだろうか。実はこの齟齬の解消を図るプロセスこそが正しい編年へと進む道であり、本論ではその道筋を示してきたつもりである。

##### 5) 右代啓視氏による編年と暦年代 (右代 1991、1995)

右代氏の編年については、特に北海道のオホーツク土器編年に関する部分 (右代 1991) について言及しておきたい。右代編年の検討対象と型式分類は以下のようにになっている (引用箇所は煩瑣なので省略する)。

- a) 「香深井 A 遺跡を標式遺跡とする」土器群をⅠ期、「貼付文を代表とする土器群」をⅡ期とする。
- b) Ⅰ期は、Ⅰ-a (「いわゆる刺突文に代表される十和田式」)、Ⅰ-b (香深井 A 魚骨層Ⅳ～Ⅱから出土した刻文系文様を有する土器)、Ⅰ-c (香深井 A 魚骨層Ⅱ～Ⅰから出土した沈線文系文様を有する土器) の3型式に細別される。
- c) Ⅱ期は、Ⅱ-a (藤本編年 c 群にほぼ相当)、Ⅱ-b (藤本編年 d 群にほぼ相当)、Ⅱ-c (藤本編年 e 群にほぼ相当) の3型式に細別される。

これらⅠ期とⅡ期の時間的關係は第 117 図上のようにやや変則的なものとされた。

右代編年と筆者編年にはいくつか異同があるが、もっとも大きな齟齬は氏のⅡ-a に関する認識と、Ⅰ-c とⅡ-b の併行關係に関する部分にあらう。まずⅡ-a の内容をみると (第 118 図)、右代氏はこれらを藤本編年 c 群相当としているが、筆者編年ではモヨロⅠ群～Ⅳ群に相当する各種

の土器が含まれている。よってもしこれらを右代編年Ⅰ期と対比させるのであれば、Ⅰ-b～Ⅰ-cの全期間に併行することとなろう。また、Ⅱ-aとⅡ-bは時間的に重複しないと筆者は考えるし、さらにⅡ-bはⅠ-cに後続するものとして筆者はとらえている。このように右代編年と筆者編年が錯綜してしまう原因の第一は、右代氏が藤本編年c群を拡大解釈していることにあると思われる。これらの問題に対する筆者の見解は第8章で詳述したので、ここでは繰り返さない。

右代氏の編年で画期的であったのは、暦年代について積極的に言及したことであろう。氏はオホーツク文化に係る時期の放射性炭素年代並びに暦年代に関する学説を集成し、土器編年と暦年代を第117図上のように対比した。この年代観は、例えばそれ以前に大井氏が示していた年代観（7世紀～13世紀前半）と比較するとかなり古いものであったが、その後も右代氏の年代観に大きく抵触するようなデータは出ておらず、最近では氏の示した暦年代が研究者間にも定着しつつある。筆者が先に引用した暦年代も氏の集成に依拠している部分が大きい。

#### 6) 佐藤隆広氏による目梨泊遺跡出土土器の分類と編年（佐藤編1994）

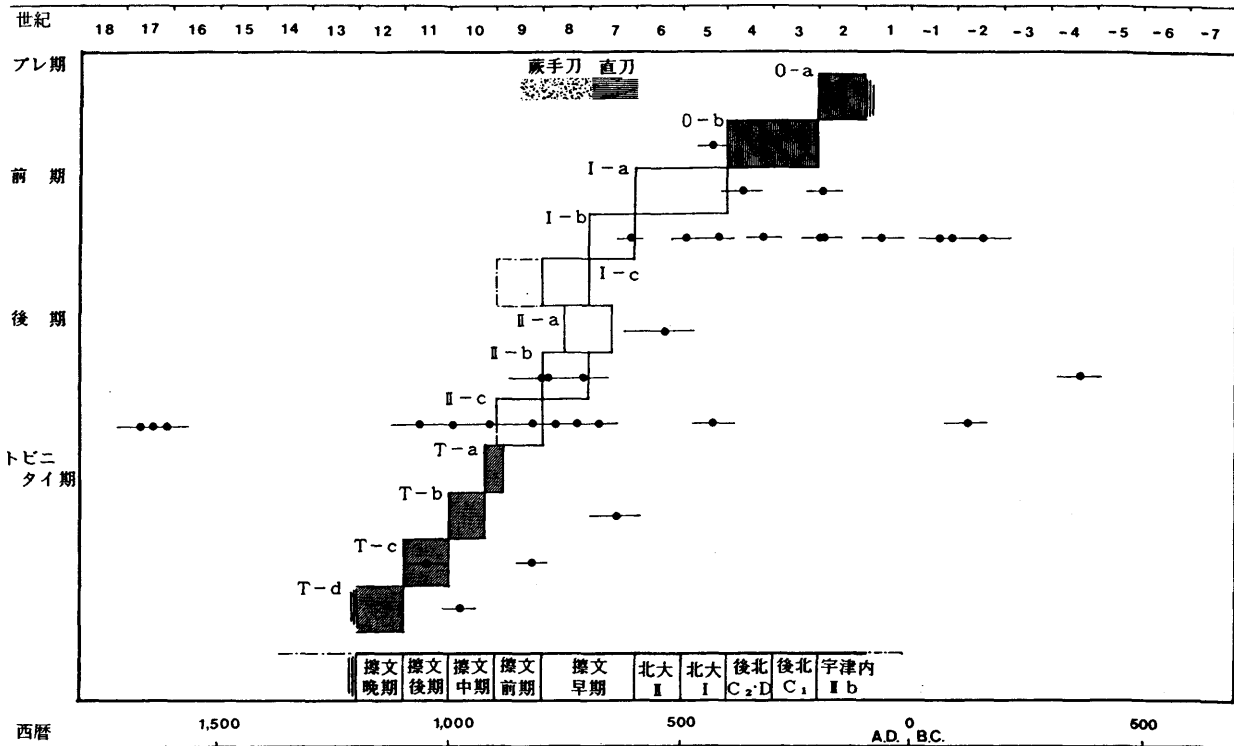
佐藤氏は枝幸町目梨泊遺跡出土土器を対象として、文様要素と文様単位・モチーフを基準に分類と編年を試みている（佐藤編1994：128-155・186-188）（第117図下）。佐藤編年と筆者編年とは異同も多いが、細かい対比についてはあまり重要ではないのでここでは言及しない。佐藤氏の指摘で筆者が重要と考えるのは以下の点である。

##### a) 沈線文系文様と貼付文系文様が部分的に重複・併行する(注1)とした点

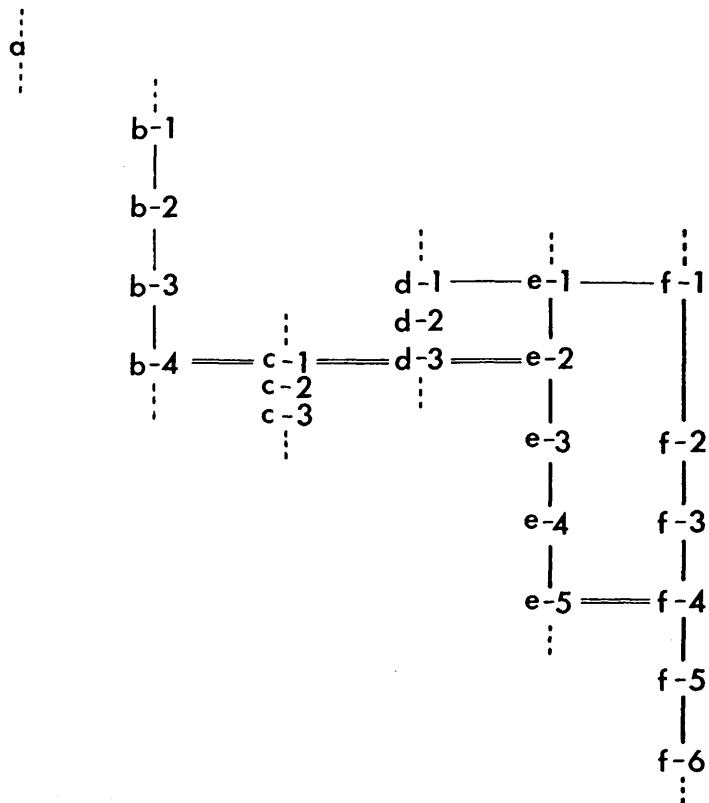
これはすでに大井氏によっても示されていたが、佐藤氏の分類でこの視点が一層明確になったといえる。

##### b) 貼付文系文様の細別に関する点

佐藤氏は貼付文系文様をもつ土器の細別するにあたり、まずは文様要素（「擬縄貼付文」・「擬縄＋ソーメン」・「ソーメン状貼付文」）を大別基準とし、貼付文の単位やモチーフによる分類を各大別のサブグループに位置づけた（第117図下）。しかし第117図下では一目瞭然であるが、実は時期差を敏感に反映しているのは文様要素よりも、単位やモチーフであると佐藤氏は考えていたようである。筆者はこの点を意識して単位やモチーフを上位においた分類基準を設定し、貼付文系文様の分類を試みたが（宇田川・熊木編2001：84-88）、核となるトコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の資料が未報告ということもあり（第8章注14参照）、未だ型式の細別を確定するまでには至っていない。佐藤氏の遺した課題を引き継ぐことで、貼付文土器の正しい細別と編年が完成すると筆者は確信している。



(刻文) (沈線文) (沈線+擬縄) (擬縄貼付文) (擬縄+ソーメン) (ソーメン状貼付文)



第 117 図 上段：右代啓視氏による編年と暦年代

下段：佐藤隆広氏による編年

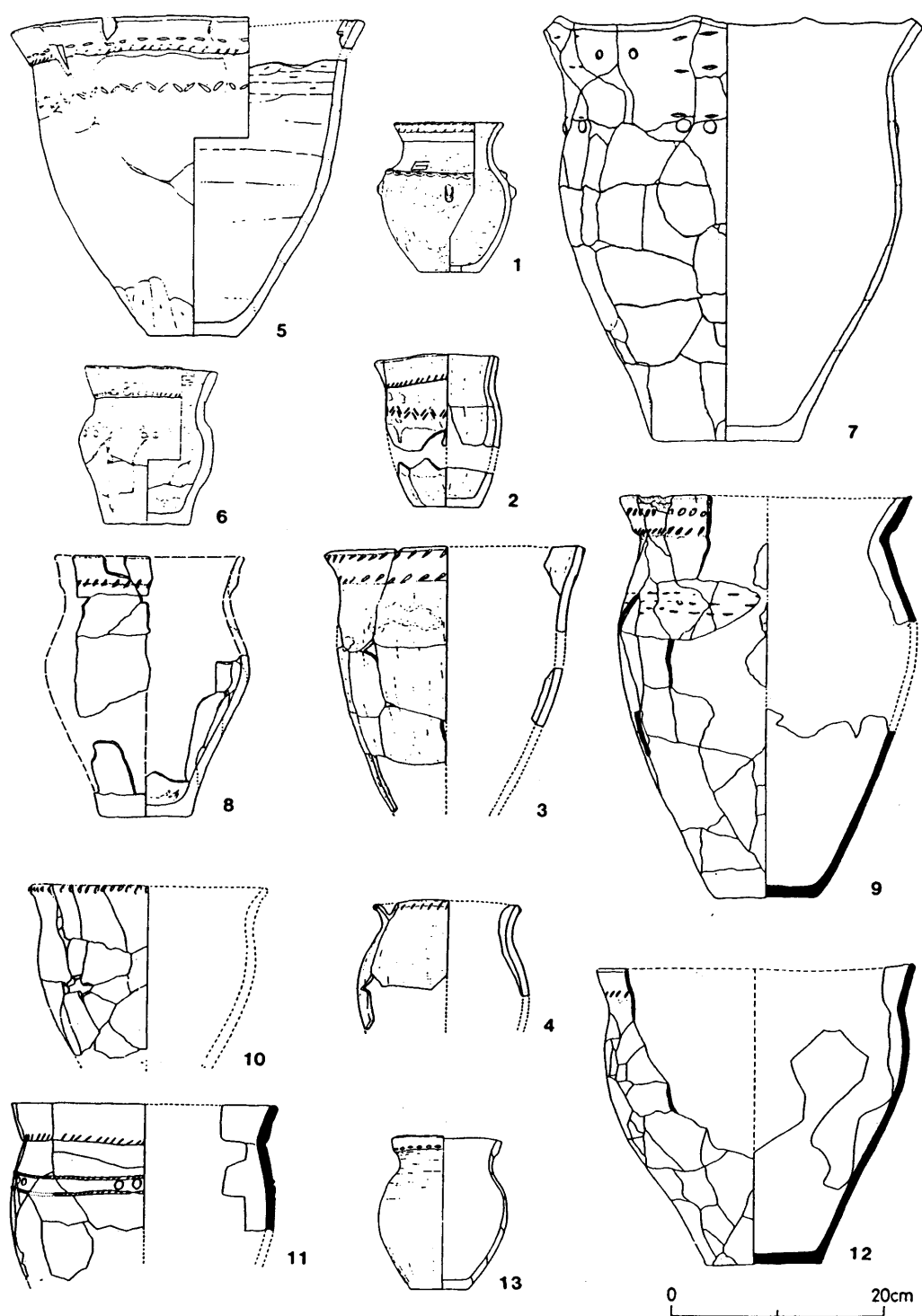


Fig.5 オホーツク式土器編年 (II-a)

II-a 期：1－目梨泊3号墓，2～4－ホロボツ砂丘遺構外，5・6－トコロチャシ上部台地加藤コレクション，7－栄浦第二4号床面，8－能取西岸遺跡，9－モヨロ貝塚2号墓，10－同10号下層竪穴床面，11・12－ウトロ海岸砂丘1号竪穴床面，13－松法川北岸5号竪穴床面。

注

- (1) 目梨泊遺跡の包含層から出土した沈線文系文様をもつ土器群について筆者は、概ね沈線文期後半に相当し、前半に相当する土器は少ないと考えている。ただし第 8 章に述べたように、道東部の系統に属する土器では、沈線文期の前半・後半の細別を明瞭に行うことは難しく、目梨泊遺跡の例もまさにその事例に該当する。

## 総括

## 総括

### 1. 第 I 部

本論第 I 部では文様割りつけ原理と文様単位の分析に基づいて、構造的かつ広域的な視点から続縄文土器の型式編年を検討した。土器そのものの型式学的特徴、なかでも文様割りつけ原理と文様単位の変遷やそれらを分析することの意義については第 I 部第 6 章にまとめておいた。ここでは道内の地域間の関係、すなわち型式交渉に関する部分の成果を総括し、土器型式からみた続縄文期の地域間関係とその変遷過程についてまとめておきたい。

- a) 続縄文前半期の北海道における土器型式の地域性と動態は、一方の極に恵山式土器を、もう一方の極に宇津内式土器を配して図式的に考えると理解しやすくなる。

東北北部～道南部の系統を母胎とする恵山式土器は、道南部で成立した後に道央部に分布域を拡大してゆくが、道央部では恵山式と在地の系統とが並立することではなく、いわば「なし崩し」的に恵山式が侵入し、受容(注 1)されている。同じ頃、釧路地域でも網走地域の宇津内Ⅱa 式土器がやはり「なし崩し」的に受容され、それまで存在していた網走／釧路地域間の地域差(注 2)は縮小する。道央部と道東部においてこのような拡大があった後に、道央部で恵山式と宇津内式の両系統が接触して生じたのが後北 A 式土器である。後北 A 式の成立以後、道南部／道央部／網走地域／釧路地域間の地域差は再び顕在化し、互いに交渉を持ちながらもこの 4 系統は意識的に排他性を保ち続け、後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の成立期まで痕跡的にはあるが各系統が存続する。

- b) 以上の土器の動態について地域別に詳述すると以下ようになる。まずは続縄文前半期の網走地域と釧路地域である。縄文晩期後葉においては網走・釧路間の地域差はわずかであったが、続縄文早期の網走地域に元町 2 式土器が、そして釧路地域に興津式土器がそれぞれ成立すると地域差ははっきりしてくる。だが次の続縄文前期になると網走地域からの影響が増大し、地域差は不明瞭になる。しかし、続縄文中期になると再び地域差が鮮明になるのである。この続縄文中期では、網走地域／釧路地域の両系統が接する知床半島南岸部周辺において両系統を折衷したような土器が多数認められている。しかし網走／釧路の両系統は「なし崩し」

的に折衷・融合されるのではなく、折衷の際には「下田ノ沢系宇津内Ⅱb式」／「宇津内式系下田ノ沢Ⅱ式」という作り分けが生じている。土器製作者は両系統の違いをはっきりと意識した上で、何らかの意図を持って両者を折衷させていたと考えられる。

- c) 次に道央部における後北 A 式土器の成立過程をまとめてみる。最近、深川市北広里 3 遺跡の調査成果により、後北 A 式土器と宇津内ⅡbⅠ式土器の併行関係と、両型式の密接な型式交渉が判明した。この成果によって後北 A 式の成立過程がより正確かつ具体的に記述できるようになったのである。すなわち後北 A 式の成立過程を正しい編年に基づいて評価するならば、それは先立つ時期の恵山式アヨロ 2b 式相当の土器を母胎とし、続く時期に宇津内ⅡbⅠ式との型式交渉が強化されることによって独自の系統が生成されてゆくプロセスとして理解できることになる。

このように続縄文中期には道央部一道東部網走地域間で土器の型式交渉が活発化するが、やはりここでも両地域の系統は「なし崩し」的に融合してしまうことはない。すなわち、後北式系統では 4 単位を基本とする文様割りつけが、宇津内式系統では 2+2 単位を基本とする文様割りつけがそれぞれ維持されつつ、後北 C<sub>1</sub> 式期まで両系統が併立し続けるというのが道央部・道東部間の関係なのである。

- d) 続縄文後期の後北 C<sub>2</sub>・D 式土器は、高い斉一性を持ちながら広域に分布するとこれまで考えられてきた。しかし、時期・地域別に後北 C<sub>2</sub>・D 式土器を細別してみると、以下のような地域差が段階的に生じていることが判明した。すなわち、成立当初の後北 C<sub>2</sub>・D 式には道央部／道東部それぞれの系統の影響が残ることにより地域差が生じているが、その後地域差は一旦解消される。しかしさらに次の時期には道央部的な文様割りつけが道東部でいち早く崩壊することにより、地域差が再び顕在化してくる。このように、斉一性が高いとされる後北 C<sub>2</sub>・D 式土器であっても、その「斉一性」には進行／後退するプロセスがあり、その結果としてこの型式にも地域差が存在することが明らかになった。

なお、後北 C<sub>2</sub>・D 式土器が広域的に分布する背景にはヒトの移動があった可能性が高いと考えられる。しかし以上の分析結果から考えると、少なくとも網走地域では在地の集団が道央部の集団と丸ごと入れ替わってしまうような事態は生じていなかったことが推測できる。

- e) 続縄文後期のサハリン中部～北海道北端部に分布する鈴谷式土器の型式学的特徴については、これまで縄線文＝南部側に分布／櫛目文＝北部側に分布という二分法的な理解が支配的であったが、資料の現状との矛盾も多かった。鈴谷式土器の型式変遷を「複雑から単純へ」という視点から再整理してトレースすると、資料の現状をうまく説明できると同時に、そこには南北交流が段階的に進行するプロセスが浮かび上がってくる。

本論第Ⅰ部では続縄文土器型式全体を構造的に把握しようと努めてきた。ここで総括したように、その試みはかなりの程度成功したと言えるであろう。しかしながら、本論第Ⅰ部の考察は未だ土器型式そのものの分析・記述に止まっている部分も多く、土器型式交渉の背景にあるヒトや社会の動きについてはもう少し踏み込んだ検討・解釈が必要とされよう。特に続縄文前半期においては、続縄文前期における恵山式土器・宇津内式土器の「なし崩し」的な侵入・分布圏の拡大と、続縄文中期における「意識された作り分け」による地域型式群の排他的並立とが、どちらも全道的な動きとして鮮やかな対比をなしているのであるが、これらの現象の背後にあるヒトや社会の動態については立ち入った議論ができなかった。この問題を解明するためには、土器の製作技術論的な分析によって土器製作者の動きに迫るアプローチに加え、各地域における遺跡の消長や、土器型式圏の境界域での土器や遺跡のあり方、地域間の交渉ルートの検討などが有効な手段となろう。続いて、後北 C<sub>2</sub>・D 式期のヒトや社会の動きについては道東部を中心にある程度の見通しを示すことができたが、現状ではまだデータが粗く、精密な議論にはなっていない。今後は各遺跡の消長等のデータをさらに詳しく整備するとともに、道央部や道南部、さらに東北地方やサハリン・千島列島も視野に入れつつ、広域的な動きの背景についてさらに検討を深めていく必要があるといえよう。

なお、本論では土器以外の考古資料に関してはほとんど触れることができなかった。その部分を補う意味で、巻末に「北海道東北部における続縄文文化研究の現状と課題」と題する付篇を用意したので、そちらも一読いただければ幸いである。

## 2. 第Ⅱ部

第Ⅱ部ではオホーツク土器の広域編年を検討し、アムール河口～サハリン～北海道に至る地域の土器型式の動態を考察した。そこで新たに得られた成果を以下に総括する。

- a) オホーツク文化初頭の土器である十和田式土器の分布はサハリン南西端部～北海道北端部に限られるが、次のオホーツク文化刻文期になると、アムール下流域の靺鞨系土器の影響を受けて環オホーツク海沿岸の広い地域でほぼ同一の土器型式（刻文系土器）が分布するようになる。北海道においては十和田式土器から刻文系土器への型式変化は非連続的であり、遺跡の継続性にも断絶が認められる例が多いことから判断すると、この時期にはサハリン以北から北海道へとヒトの流入があった可能性が高い。しかし刻文系土器には前半段階からすでに微細な地域差がある点等からすると、ヒトの流入は一元的な地域からの大規模な侵入ではな

く、すでに萌芽的に存在していた各地域別のネットワークに取り込まれる形・規模で起こったものである、と考えることができる。

- b) オホーツク文化刻文期の土器群は 2 時期に細別可能であり、その後半期から顕著な地域差が生じ始める。地域差はまず宗谷海峡を境に生じ、その後さらに地域化が進んでアムール河口部／サハリン／北海道北部／北海道東部とそれ以东という型式圏に分かれるようになる。地域差がまず宗谷海峡を境として生じる背景には、擦文文化との交流が道北部でいち早く生じたことが影響している。またそのような交流によって、オホーツク土器・擦文土器両者に型式学的な影響が双方向的にもたらされ、特に道北部ではオホーツク土器の型式変化が促進された。
- c) 同じ頃、アムール河口部ではオホーツク式系統の土器と在地のテバフ式系統の土器の交渉が進み、両者の系統が「融合」した土器が生み出されるまでに至った。オホーツク文化とロシア極東地域の交流は、金属器等の大陸系遺物がアムール流域のものであることからその地域との関係が注目されてきたが、アムール河口部周辺の在地伝統やヤクーチャ方面との交流も視野に入れた多面的な視点が必要である。
- d) 北海道東部における刻文系土器から貼付文系土器への移行過程については、これまで不明な部分が多かった。この問題は、刻文系土器と貼付文系土器の間に、道北部の沈線文系土器に併行する時期を新たに設定すると理解が容易になる。具体的な移行過程は、まず沈線文期の前半には道東部独自の系統の上に道北部の影響が及び、その後再び道東部の系統が復活し、逆に道東部から道北部へと型式学的な影響が及び始める、という流れである。
- e) 北海道の貼付文期後半においては、道北部の系統は衰退して道東部の系統に呑み込まれ、道北端部にまで貼付文系土器が分布するようになる。

他に、扱った資料で言えば、アムール河口部やモヨロ貝塚の土器を紹介し資料的空白を補完したことと、サハリンの土器編年を具体的な資料に基づいて行い、広域編年対比を再検証したことが特筆される。また方法論上では、大井晴男氏の「型式論」に対し直接的な批判を行い、属性分析の手法に基づいて土器型式編年を精緻化したことが、新たな成果であった。

これらの成果を踏まえた上で、第Ⅱ部で扱ったテーマに関する今後の課題をあげるとすれば、以下のようなだろう。

#### a) サハリン中部以北の位置づけ

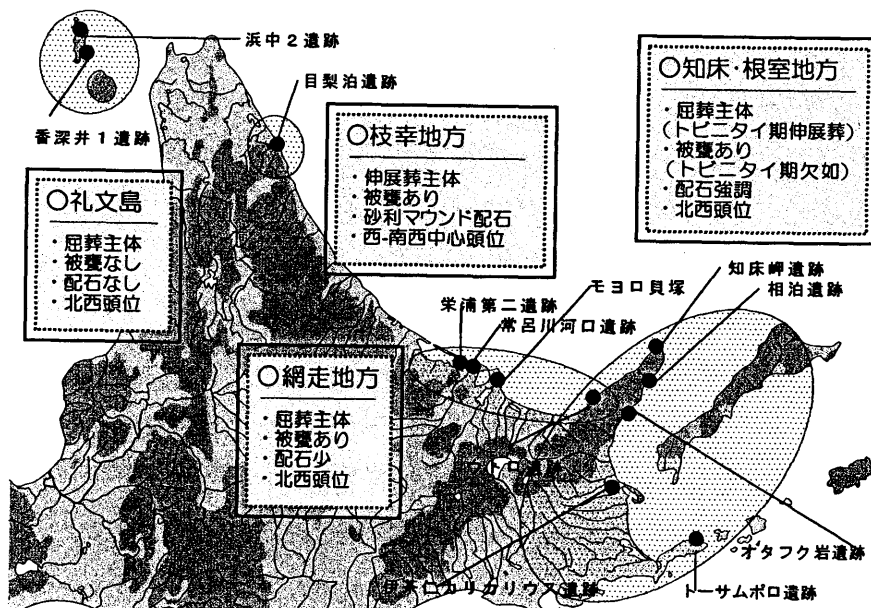
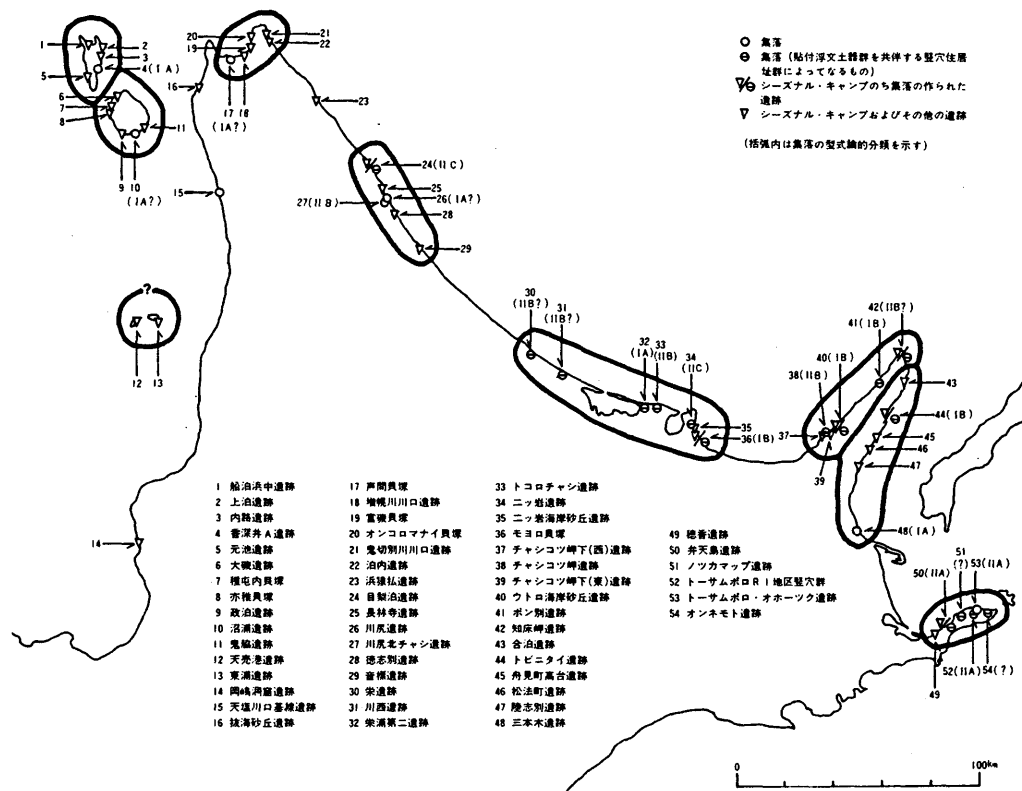
アムール河口部の考古学情報が具体的になるにつれて、サハリン中部以北に対する評価が逆に難しくなっている。特に十和田式期のサハリン中部以北・アムール河口部の状況はよく分か

っており、その後の時期も土器以外の要素については未だ情報が少ない。確かに刻文期前半にはアムール下流域から千島列島に至るまではほぼ同一型式の刻文系土器が拡散するのであるが、土器以外の諸要素やヒトの動きについては、サハリン中部以北には元々在地の文化(?)が存在しそれが変化するのか、あるいは大陸からヒトが移動してくるのか等々、実態が不明である。サハリン南部と北海道では、少なくとも十和田式からオホーツク文化として定義され、続く刻文期の拡散やその後の地域化も全てオホーツク文化の連続的な展開・変容の過程として把握されている。しかし、サハリン中部以北では十和田式土器が存在する可能性は低いことが次第に判明してきており、江の浦式 1 類以後も、ニコラエフスク空港 1 遺跡の調査成果(熊木ほか 2002、臼杵・熊木 2003)にみるとおり、土器のみならず他の遺物・住居等もサハリン南部・北海道とはやや異なる可能性が生じてきている。刻文期に先立つと思われる「バリシャヤ・ブフタ土器群」および「ザーパトナヤ 10 タイプ」土器群の問題や、サハリン以北マガダン周辺などのオホーツク海北西岸の様相など、サハリン中部以北の実態を解明し、そしてそれを「オホーツク文化」の枠組みの中にどう位置づけていくかということが、今後の重要な課題となるであろう。それは、大陸と北海道を繋ぐ位置に展開したオホーツク文化の性格や歴史的な位置づけを再吟味することでもある。

#### b) 土器の分析による集団関係論へのアプローチ

本論で扱った土器型式圏の地理的枠組みは、アムール河口／サハリン北部／サハリン南部／道北部／道東部といった大きなもので、分類レベルでいえば「オホーツク土器全体」の直下に位置する、いわば最大の単位が対象であった。しかし当然のことながら、もっと細かい分析を行えばこれより下位の分類単位、すなわち型式的・地理的により小さな単位のまとまりを抽出できる可能性がある。本論ではまず基本的な編年枠の構築に重点を置いたのでそこまで踏み込むことはできなかったが、土器の型式学的な対比に加えて製作技術面での分析等を行うことにより、より細かな地域差を判別できる可能性があらう(注 3)。

このような「土器型式の細かい地域差」との関連で問題となってくるのが、集団関係・社会組織との対応である。大井晴男氏はオホーツク文化の社会組織として、「世帯」・「地域集団」・「地方群」の 3 つのレベルの集団を規定し、オホーツク文化の社会においては、一軒の竪穴住居＝一「世帯」を最小単位として、「複数の世帯が地域集団を形成し、さらに複数の地域集団が地方群を作るという形」で、「構造体としての社会組織」が形成されていた、と分析した(大井 1978・



第 119 図 上段：大井晴男氏によるオホーツク文化の「地域集団」

下段：高島孝宗氏によるオホーツク文化の「墓制の地域性」

大井 1982b)。このうち、「地方群」は本論でいう道北部／道東部の地域型式圏とほぼ重なる地理的単位である。「地方群」間では土器型式以外にも、生態的条件とそれに伴う生業形態・集落構造・祭祀形態などの面で様々な差が認められており、「地方群」のレベルにおいては土器型式圏がある種の社会組織と結果的に(注 4)対応している可能性が高いことになる。興味深い問題は、大井氏のいう「地域集団」と土器型式の細かい地域差が対応するか否かである。大井氏の「地域集団」とは、「地方群」内に認められる遺跡群の地理的まとまりを示したものであり、確かに大井氏の指摘通りオホーツク文化の遺跡分布をみるといくつかの地理的まとまりが確認できる(第 119 図上)。ちなみに、これらの地理的まとまりとかなりの程度重なる考古学資料の単位としては、高島孝宗氏の指摘した「墓制の地域性」(高島 2003)(第 119 図下)がある。その点からすると、これらの地理的まとまりがある種の社会組織と対応している可能性は高く、大井氏のいう「地域集団」にもある種の実体を当てはめることができるかもしれない。このような「地域集団」に対応するような土器の地域差がもしあるとすれば、「地域集団」をある種の(ここでは土器の類似性を保つようなコミュニケーションの高さ・頻度が維持されているという意味での)「実体的な集団」として規定するという仮説が強化されることになる。

また、このような土器の細かい地域差に着目した分析は、「地域集団」間の差異という静的な区分の規定のみならず、「地域集団」間のヒトの移動という動的な現象の解明にもつながる情報をもたらす可能性がある。今後一層の分析を進めていきたい。

#### c) 千島列島の実態解明

本論では千島列島については資料的制約によりほとんど言及できなかった。しかし北千島を含めた千島列島がオホーツク土器の分布域であることは改めて言うまでもないし、特に続縄文土器との関係や、トビニタイ土器群と擦文土器の関係を考える上で、南千島地域が重要な鍵を握っていることは疑いない。近年のロシア側の研究動向をみても千島列島地域の研究が進展しているとは言いがたい状況にあるが、今後も問題意識を持ち続ける必要があろう。

#### 注

- (1) 恵山式土器が道央部へ拡大する背景にあったのが、土器製作者の「交替」ではなく、在地の土器製作者による恵山式土器の「受容」(土器型式の「持ち替え」)であったことは、高瀬克範氏が論じたとおりであろう(高瀬 1998)。
- (2) もっともこの時期(続縄文早期～前期)の釧路／網走間の地域差と、同時期の道南部／道央部の地域差は同レベルで論じられるものではない。前者はいわゆる「非大洞系」土器群の中の細かい地域差であるし、後者は「大洞系」と「非大洞系」の系統差に端を発する大きな地域差・系統差あるからである。

- (3) もっとも筆者の実感としては、本論で扱った地域差より下位レベルの細かい地域差を見いだすのはかなり困難な作業である、というのが本音である。例えば、一遺跡内の個々の資料にみられるバラツキの幅と、隣接する遺跡間での異同の幅とどちらが大きいのか、という実際的な問題があるし、モヨロ貝塚のように一つの遺跡がやや突出した特異性を持つ場合があるという問題もある。しかし、より細かな地域差を伺わせるような傾向もいくつか散見されるのも確かである。例えば道北部でいえば枝幸周辺とそれ以北はやや地域差が大きいようであるし、道東部では根室周辺がそれ以北の地域とはやや特徴が異なっている。さらに奥尻島青苗砂丘の資料は道北部との開きが大きい。このような見通しを手がかりに時期差・地域差の整理をもう少し精緻に行うと、各地域の内部の関係・構造がより鮮明に捉えられるかもしれない。
- (4) ここで「結果的に」と述べたのは、「先験的に」土器型式圏をある種の社会集団と対応させるような仮説との差を強調するためである。すなわち、本論では土器型式圏の背景を「土器の製作や移動に関するコミュニケーションの高さ・頻度の反映」として限定的に捉えている。なおこの問題に関しては小杉康氏の論考が参考となろう（小杉 2001）。小杉氏は型式群圏→型式圏→地域差・地域色へと向かう土器型式の地域区分原理と、住居→集落→遺跡群へと向かう集団の把握原理が全く逆の方向性を持つことに注目し、土器型式圏に対し通婚圏のような実体的な集団を対比する研究に対して、その論理的矛盾を指摘している。

## 付篇

## 付篇 北海道東北部における続縄文文化研究の現状と課題

### 1. はじめに

現在の続縄文文化研究の基本的枠組みは 1980 年代前半に確立したといえる（熊木 2003）。その後、研究は着実に進展を見せているが、80 年代の枠組み自体が改変されるまでには至っていないというのが筆者の認識である。しかし特に 90 年代以後、続縄文文化をめぐる研究状況は新たな局面を迎えつつある。道東北部の研究で言えば、日本・ロシア間の研究交流の活発化がその最たるものといえよう。それでは、ロシア側の情報を取り入れるなどして進められてきた最近の道東北部研究は、従来の枠組みに対していかなる問題を提起しつつあるのだろうか。ここでは 1994 年度～2003 年度における道東北部の続縄文文化研究(注 1)を概観してその動向を探るとともに、今後の研究展望を述べてみたい。

### 2. 宗谷海峡地域の続縄文文化

#### 1) 研究の進展

近年の道東北部続縄文文化研究における最大の成果は、宗谷海峡を挟んだ地域で調査研究が進展したことである。この進展の基礎となったのが、礼文町浜中 2 遺跡（西本編 2000）や礼文町オションナイ 2 遺跡（藤沢編 2001）、利尻町種屯内遺跡（種屯内遺跡調査団 2002）などの発掘調査成果と、日ロ共同シンポジウムの開催（天野・ワシリエフスキー編 2002）に代表されるような、ロシアとの研究交流の活発化にあることは言うまでもない。

近年の発掘調査からは様々な情報が得られており、特に浜中 2 遺跡で明らかにされた生業上の特徴－アワビの捕獲とイヌの食用－は、道東北部ではこれまで生業関連のデータが少なかっただけに非常に興味深いものがあつた（佐藤 1996、西本編前掲）。これら生業研究に関しては別にまとめて後述する。他に、特に土器や骨角器を中心として、道北端部続縄文期前半の地域色を示唆するような特徴的な遺物の存在が確認されている。

一方、ロシアとの研究交流でもたらされた最大の成果は、「アニワ文化」に対する共通理解の

確立であろう。「アニワ文化」の提唱者であるワシリエフスキー氏は、当初からこの文化と北海道の「新石器文化」との関連を指摘していたが、帰属年代については放射性炭素年代を根拠に「紀元前 3 千年紀末から前 2 千年紀と前 1 千年紀の境までの時期」と位置づけ、縄文期とする日本側の意見より古くみていた（ワシリエフスキー1992）。しかし最近、氏は年代観を「前 1 千年紀の前半から中葉」とやや新しく修正するとともに、この文化を「初期縄文文化のサハリン的変異」と位置づけた（ワシリエフスキー2003）。年代については未だ日本側とは多少の齟齬(注 2)が認められるが、大枠での年代観・文化的帰属に関しては日ロ双方で共通理解が生まれつつあると言えよう。このような日ロ間の相互理解や共同調査・研究交流を背景として、特に「アニワ文化」併行期から鈴谷式に至る時期の土器編年を中心に、各氏から論考や調査報告が発表されている（熊木 1996、前田 1999、小野・天野 2002、前田 2002、ONO2003、カシツィン 2003、熊木 2003、木山ほか 2003、熊木 2004）。

## 2) 宗谷海峡を挟んだ南北交流

以上のような調査研究の進展を受けて各氏が様々な発言・考察を行っているが、なかでも多いのが宗谷海峡地域を舞台とした南北交流に関するコメントである。まず道北端部とサハリンの関係については、縄文初頭における道北端部とサハリン南端部の集団関係、さらにその時期のサハリン南端部以北の様相が第一の問題となっている。前述のとおり、サハリン南端部の「アニワ文化」を縄文文化の地域的変異とみる、という点では各氏の意見はほぼ一致しているが、「アニワ文化」の系統と性格をめぐっては意見が分かれるようである。筆者は今のところ、「アニワ文化」は道北端部からの移住という性格が強いもので、サハリンの「在地集団」(?)との交流はあったとしても少ないと見ている（「移住説」）。しかし、多くの論者は道北端部からの侵入者とサハリン「在地集団」との交流はこの時期すでに活発であり、サハリン「在地集団」が縄文文化を受容したというのがむしろ実態に近い（「受容説」）という立場をとっているようである。おそらく「受容説」が根拠とするのは以下の 3 点であろう。1) 泊村茶津 4 号洞窟発見の恵山式期の人骨にオホーツク文化期人に近い形質をもつ個体がある（松村 2003）。2) 浜中 2 遺跡出土の縄文初頭のイヌのなかにオホーツク文化期のイヌやサハリン出土のイヌに形質に近いものがある（内山・松村 1997、内山 2003）。3) 「アニワ文化」の土器と道北端部の型式群とは細かな差異があり、それら地域差の一部はアムール下流の「パリシャヤ・ブフタ土器群」およびサハリン中部の「ザーパトナヤ 10 タイプ」に由来する（小野・天野 2002、ONO2003、木山ほか 2003）。1) は確かに恵山式期の交流を直接的に示唆するデータである。2) も説得力はあり注目すべきデータであるが、a) 縄文期の道東北部のイヌに関する形質のデータがない、b) 道北端部浜中 2 遺跡と、地理的にサハリンから遠い釧路市幣舞遺跡とでイヌの形質・利用形態が共通する、c) 関

連例としてあげられているサハリン中部ザーパトナヤ遺跡群のイヌは正確な帰属時期が不明で、オホーツク文化期まで降る可能性がある、等の点に問題が残っており、再検討の余地は残されていると考える。3) については筆者も細かな地域差の存在は認めるが(熊木 2003)、「アニワ文化」の前後及び併行する時期におけるサハリンの型式の実態が曖昧な現状では、その差が在地の伝統に由来するのか併行するサハリン南端部以北からの影響なのか、あるいは移入後の自律的な変化であるのか等々について判断不能であるから、土器の地域差を根拠にサハリンの「在地集団」を想定することには慎重でありたいと考える。このように「アニワ文化」以前のサハリン南端部の実態や、併行期のサハリン南端部以北の様相が不明に近い現状で、「在地集団」の存在を前提としつつ議論を組み立てることには違和感を覚えるので、現状では「移住説」に傾かざるを得ないというのが筆者の立場である。また、上記の根拠 1) 2) 以外にサハリンからの影響の可能性は見出し難いので、この時期の動きは基本的に縄文文化の範囲拡大として評価するのが妥当と考えている。無論、これは現時点で結論を下せるような問題ではないし、この時期のサハリンは無人ではない、という小野氏らの想定の高蓋然性が高いことも確かであろう(小野・天野 2002)。ここでは、現在得られているデータを解釈する上での方法と論理に関する私見を述べてみた。なお、縄文前半期における北海道とサハリン以北の交流に関しては石器・金属器・琥珀等の問題もあるが、これらは後で紹介する。

二番目の問題は鈴谷式期の交流に関するものである。これについて筆者は、この時期の交流は北海道北端部～サハリン北部に跨る相互的なもので、北からの南下が確認できるという点も含めて縄文前半期とは様相・背景が大きく異なるととらえている。縄文前半期の土器と鈴谷式土器の関係、及び鈴谷式土器にみる南／北サハリン間の型式交渉については過去に何度も述べているので詳述は控え、以下の要点のみを述べておく(熊木 1996、熊木 2003、熊木 2004)。1) 縄文前半期の道北端部の土器と縄線文をもつ鈴谷式土器とは、系統的にはつながるが土器編年上は間隙がある、2) 鈴谷式土器の変遷過程は北海道北端部～サハリン北部間で南北交流が段階的に進行するプロセスとして理解することができる。この 2 点のうち、特に 1) については異論も提出されている(小野・天野 2002、前田 2002)。ともあれ縄文期の道北端部とサハリンの交流については、縄文初頭に一つの画期があり、さらに鈴谷式期で交流様相が再び大きく変化する、という理解が現状では妥当となろう。

### 3) 日本海沿岸域を舞台とした北海道以南との交流

以上のようなサハリン以北との交流とは逆方向の、日本海沿岸域を舞台とした道北端部と道南部以南の交流についてもいくつかの発言がある。佐藤孝雄氏・西本豊弘氏は浜中 2 遺跡におけるアワビ殻・食用のイヌ・鯨骨製のヤスとヘラ(厚手のものは「アワビ起こし」としての機能が想

定されている) という動物遺体と骨角器群の特徴的なセットが長崎県壱岐ノ島の遺跡と共通してみられることなどから、日本海沿岸地域の類似性と交流の可能性を指摘している(西本編 2000)。

「もう二つの日本文化」論(藤本 1988、佐原 1999)とも関連する両氏の大胆な説は示唆に富む部分も多いが、この説に対しては慎重な立場をとる意見(乾 2001)や具体的な批判(内山 2003)が提出されている。現状では乾・内山両氏の批判の方に分があろう。これらの議論を生産的に発展させるためには、利尻・礼文両島の置かれた歴史的な位置と環境に対する理解を深めてゆくことが肝要であると筆者は考えている(福田・前田 1998、乾 2000: 134)。例えば縄文後期～晩期の両島においては、福田正宏・前田潮の両氏が明らかにしたように、対馬海流を背景として渡島半島西岸地域との間の強い結びつきが認められている。続縄文初頭における両島の土器型式も、次第に道東部との結びつきを強めていくのは確かであるが、成立期の流れは晩期以来の日本海沿岸交流の延長上にあると言える。両島の歴史的 위치がこのようなコンテキスト上にあることを理解した上で、情報の空白が多い北海道日本海沿岸地域の様相を具体的な遺跡・遺物に基づいて明らかにし、両島との交流史を再構築する作業こそが求められているのである。ささやかではあるが、そのような問題意識に基づく調査もすでに開始されており、今後の成果が期待される(福田ほか 2002、高橋ほか 2003)。浜中 2 遺跡の内容を、続縄文初頭に顕著となる「交易品の生産を目的とした漁場開拓」として説明した西脇対名夫氏の説(西脇 2001)に対する評価についても、類例のない現状では当否の判断が難しいが、このような歴史的コンテキストの中で検討していくのが正しいあり方となろう。

### 3. 千島列島の続縄文文化

千島列島に関しては、杉浦重信氏や野村崇氏が北海道・千島・カムチャツカを繋ぐ文化伝播ルートについて続縄文期以外の事例も含めつつ積極的に発言している(野村・杉浦 1995、杉浦 1998、杉浦 1999)。中千島における続縄文土器の出土を「続縄文文化の範囲拡大」とみる野村・杉浦両氏の意見には同意したい。一方で両氏は、カムチャツカ方面から来た要素としてラブレットと舌状張出部をもつ竪穴を、北海道・千島・カムチャツカで共通する要素として石偶・石製ナイフ・横断面形が特徴的な片刃石斧等を例示し、この時期の双方向的な交流をも提起している。氏らの説は類似遺物・遺構が具体的に示された労作として評価されよう。ただしこの時期の交流が存在したことを確実に証明するためには、遺構・遺物の型式学的類似を指摘するだけではなく、それらの遺構・遺物の機能や役割について各文化の中で検討した上で対照し、その類似が偶然なのか構造的なものなのかを判定する必要がある。これはまた、続縄文文化とその外部に広がる文化と

の接触の具体像や、接触が果たした役割・意義について考えることでもある。

他に千島列島関連では、新しい発掘資料の報告や戦前のコレクションの紹介がなされている。注目すべきは中千島松輪島で発掘された「縄文のついた土器片（手塚 2001）」と、伊勢神宮に所蔵されていた中瀬庄吉氏収集の大規模なコレクションであろう（鈴木ほか 2003、豊原 2003）。両者とも詳細は未報告であり、今後の公表が期待される。これら以外にも資料集成や概説などが発表されている（右代 1996、川上 1996、川上 2001）。生業に関する指摘（山田 1996）については後述する。

## 4. 遺物各論

### 1) 土器型式編年論

縄文土器型式全体を概観する際の枠組み、すなわち「地方色豊かな前半期」・「斉一性の強い後半期」と言う図式も 1980 年代前半に確立したものである。近年の土器型式編年研究はこの枠組み自体を覆すものではないが、土器型式に関する地域間の関係や地域区分は図式どおりの固定的なものではないことが明らかになってきている。筆者による道東部の型式編年研究（熊本 1997、同 2000d、同 2001、同 2003）の概要は以下のとおりである。a) 縄文前半期の網走／釧路という地域区分は固定的なものではない。例えば宇津内Ⅱa 式期では両地域はほぼ同一の型式圏と言ってもよいが、宇津内ⅡbⅠ 式期には地域差が顕在化する。b) 道央部／道東部の関係も時期による変動が著しい。網走地域と道央部は縄文前半期から後半期にかけて次第に関係を強めてゆくが、釧路地域と道央部は逆に関係が弱くなり、後北 C<sub>1</sub> 式期になると道央部（後北 C<sub>1</sub> 式）－網走地域（宇津内ⅡbⅡ 式）－根室・南千島地域（下田ノ沢Ⅱ2 式）という横つながりの地域構造が成立する。c) 全道斉一的とみられてきた後北 C<sub>2</sub>・D 式土器も、細かくみると伝統的な道央部／道東部の地域差が残っているし、斉一化が進行／後退するプロセスも段階を経ながら進行している。d) 以上のような（恵山式以外の）縄文土器編年は、文様の縦の割りつけ原理と文様単位という共通の分析手法によって、系統的・構造的に把握することが可能である。

他に道東北部の土器型式編年論に関しては、道北部（西谷 1996、福田 1999）、道東部（工藤 1999、工藤・村田 1999）、日高と道央部との関係（川内谷 1998、赤石 2001）のそれぞれを対象とした論考・概説・資料集成が発表されている。また、発掘調査では深川市北広里 3 遺跡（葛西 1994・同 2002）の成果に注目しておきたい。この遺跡からは宇津内Ⅱb 式、後北 A 式・B 式、南川Ⅳ群段階の恵山式の各土器群が共伴ないし混在して出土している。これらの土器群は広域編年のための好例であると同時に、地域間の交渉経路を知る上でも重要な資料であると言えよう。

## 2) 石器

内山真澄氏が石鏃の形態の地域差と変遷について、縄文期の全道を対象にまとめており、道東北部に関しても多くの成果が得られている（内山 1998）。一つは常呂町常呂川河口遺跡ピット 23 についてである。この土壌墓では非在地系の後北 B 式土器が副葬されていたが、石鏃も在地系とは異なる道央部の形態であることが判明した。異系統の副葬品がセットになっているこの土壌墓の被葬者は、道央部からの移入者である可能性が考えられる。もう一つは同じ常呂川河口遺跡ピット 130 に関してである。この土壌墓の副葬土器は後北 C<sub>1</sub> 式というより、それよりやや古い新手の宇津内Ⅱb1 式（貼付文上に縄端の刺突がないもの）であるのだが、石鏃はすでに道央部の形態へと変化していることが明らかにされた。ここでは土器型式の伝播・変化よりも石鏃の形態の伝播・変化のほうが一段階早いことが示されよう。ただし内山氏のまとめをみると他の時期・地域では土器型式よりも石鏃の変化の方が遅い事例もあるので、両者の伝播・変化スピードの関係は単純ではないようである。このような「ずれ」の背景についても今後考察してみたい。さらに、鈴谷式に伴うとみられる石鏃の内容も多くの問題を提起しよう。特にオニコロマネイ遺跡例が宇津内式系の形態に近い、という内山氏の指摘は、時期差と解釈すればオニコロマネイの鈴谷式土器を新手とみる筆者らの土器編年と齟齬をきたす可能性もあり、興味深い。

佐藤宏之氏はサハリン出土黒曜石製石器の原産地分析を行っている（佐藤ほか 2002）。氏らの資料で「新石器時代」・「初期鉄器時代」とされているもののそれぞれ一部が縄文期に併行することになるが、これらの時代の黒曜石製石器でも置戸産および白滝産の石材が用いられていたと分析されている。分析資料の内容や伴遺物、年代測定値等が明らかにされていないので詳細は不明であるが、従来の想定を裏付けるデータであり注目されよう。なお資料の一部には置戸・白滝・十勝三股・赤井川産の各石材とは類似しない化学組成をもつ例があるという。

長沼孝氏は縄文後期後半～縄文北大式に至る期間の、北海道の石器組成の変遷と地域差についてまとめている（長沼 1997）。道東北部では、縄文後期後半～縄文前半期の間で顕著な変化は認められないとされている。

## 3) 骨角器

福井淳一氏が全道の縄文～オホーツク文化期の骨角牙製釣針について考察している（福井 2001、福井 2003）。福井氏は、恵山式の結合式釣針が発達して鈴谷式・オホーツク文化へつながるといふ系譜を推定しているが、これは前田潮氏が銚頭の分析で主張している系統観（前田 2002）と重なる部分が多く、興味深い。福井氏はオホーツク文化の釣針に関して再論を予定しているとのことなので、かつて氏自身が考察したアイヌ文化期における銚漁の変遷過程（福井 1998）とあ

わせ、釣針・銚頭等を総合した漁撈活動の復元・系譜に関する論考を期待したい。他に、乾哲也氏が全道の縄文～近世に至る時期のへら状骨角器について集成している（乾 2001）。

#### 4) 鉄器

本間元樹氏が縄文前期における道内の鉄器を集成している（本間 1995）。道内最古の鉄とされる釧路市貝塚町 1 丁目遺跡の小鉄片（河野 1973）、及びそれに続く羅臼町植別川遺跡の刀子（豊原・涌坂 1981）については、大陸からサハリンを通して北回りでもたらされた可能性がこれまで説かれてきた（本間前掲など）。これらの例は幣舞式（縄文晩期後葉）及び興津式（縄文初頭の直後）に伴うとされているので、弥生中期前半以前に位置づけられることとなる。ここで問題となってくるのが、最近、AMS 年代測定法に基づく弥生開始年代をめぐる繰り広げられている論争(注 3)との関連である。この論争では日本列島への鉄器普及時期が一つの大きな争点となっており、本州では論争を契機として弥生早期・前期の鉄器に対する再検討が始まっている。この流れと連動して先の道内の 2 例も再び注目を集めつつあるので、今後、年代と系譜の再検証が必至となるであろう。

#### 5) 琥珀玉等

青野友哉氏が碧玉製管玉と琥珀製玉類を集成し、縄文前半期の地域性とその形成過程について考察している（青野 1999）。青野氏は、a) 玉類にみる地域差は縄文晩期以来の伝統的な地域圏（東北地方・道南部／道央部・道東部）を踏襲したもので、縄文前半期においても双方の伝統は排他的に並立する、b) その一方で弥生（東北地方）／縄文（北海道）という生業・社会等の差に基づく地域区分も当然のごとく存在しているから、縄文晩期～縄文前半期の地域性は複数の地域区分からなる重層性をもつ、と結論づけている。地域圏の重層性という点に関して言えば、例えば土器型式と玉類との地域圏にもある程度の「ずれ」が認められるし(注 4)、それは先述のとおり石鏃等との間でも同様であろう。以上のように最近では、道西南部／道東北部という大枠での括りの中で、大きさの異なる幾種類もの地域区分が重なり合い、それら各々の区分が短い期間に伸縮を繰り返している様子が、細かく描写されてきている。そろそろ、各種遺物・遺構等の地域圏の背景や意味を個別に再吟味して比較検討し、「地域色豊かな前半期」の具体像に対してもう一步踏み込んだ解釈を行うべき時期に来ているのかもしれない。青野氏もそれを意識しているようで、玉類と祭祀・儀礼の関係についても具体的に考察しており注目される。

琥珀玉の原材となる琥珀の産地についていくつかの発言がなされている（杉浦 1994、乾 1998、青野前掲、佐々木 2001）。近年では道内やサハリンを産地とみる見解が大勢を占めているといえよう。その他の遺物に関しては、石川朗氏が道東部縄文文化に特徴的にみられる各種遺物の集

成を、広田良成氏が石製「環状装飾品」の集成を行っている（石川 1999、広田 2003）。

## 5. 遺跡立地・生業・居住形態等

### 1) 縄文前半期

道東北部縄文前半期の遺跡立地・生業を考える上でのポイントは、「海洋適応」をどう評価するかにある。

工藤研治氏は、遺跡立地を重視した藤本強氏による方法・視点（藤本 1988）を基本としつつ、動物遺存体の内容にも言及しながら縄文前半期における土地利用と生業を地域別に概観している（工藤 1998）。縄文晩期と比較した場合、釧路・根室地域では海岸台地への進出とともに、海獣狩猟や大型魚を対象とした漁撈など海への依存度を高めてゆく傾向が強まると氏は指摘する。一方、網走・北見地域についてもやはり立地が河口の砂丘上へとシフトする傾向にあるが、変化は釧路地域に比べると緩やかで、生業は河川や砂丘の周辺での漁撈・狩猟が主体となっていると分析している。しかし、例えば斜里町でもこの時期には知床半島海岸部で遺跡が増加する（松田 1999）などのデータもあり（注 5）、少なくとも立地の変化傾向については、道東部太平洋側とオホーツク海側との間にある差をそれほど強調する必要はないと思われる。よってこの時期の立地変化の様相は、「道東部では全般的に海岸部での遺跡確認例が増加する」という評価でよいと筆者は考えている。さらにこれはまだ想像にすぎないが、両地域とも河川の下流部や内陸部でも継続的に遺跡が形成されている（注 6）点からすると、この時期における遺跡立地の変化は人口増による居住域の拡大が原因の一つであると指摘できるかもしれない。いずれにせよ現状では「海洋適応」の傾向が強まるのを事実と認めた上で、内陸と海岸部の遺跡の関係などの基本的問題から改めて検討を進めなければならないであろう。

「海洋適応」の問題と関連して注目されるのは、縄文初頭ないしその直後から始まるサハリン・千島列島への分布拡大である。山田悟郎氏は中千島への分布拡大に関連して、中千島以北では環境的にみて海に依存した生活を余儀なくされることから、この地域に進出した文化の生業は必然的に海洋漁撈・海獣狩猟が中心となることを指摘している（山田 1996）。一方、筆者は「海洋適応」とは異なる側面にも注目し、サハリン・中千島地域への分布拡大の時期がほぼ同時であること、そしてそれらが道内でヒトの交流・移動が活発になる時期と重なっていることを指摘した（熊木 2003）。おそらくこの時期の遺跡立地や遺跡分布の変化に関しては、生業上の問題のみならず、人口変動や交流等の社会状況の変化をも考慮して、原因や背景の究明を行わねばならないと思われる。

なお道北端部でも新たに生業関係のデータが得られている。浜中 2 遺跡の成果については前述した。他に木山克彦氏が集石土坑の考察を行っている（木山 2003）。木山氏は集石土坑の利用形態について、日常的な通年利用と言うよりも春～夏季を中心とした季節的・周期的利用である可能性が高いと指摘しており注目される。氏は他にこれらの遺構の分布が道北端部～道東オホーツク海側に偏ること（熊木 2003）（注 7）、さらにサハリン南部にも存在すること（前田 1999）も指摘している。集石土坑の機能とこの地域の生態系の関わりや、オホーツク文化における同様遺構との関連・系統性の追求が今後の課題となろう。

## 2) 縄文後半期

この時期の要点は、「遺跡数の減少・規模縮小」と、「斉一化（地域差の縮小）」及び「遊動性の高まり」に対していかなる評価を下すかにあるといえよう。

石井淳氏はこの時期における東北～北海道の遺跡様相を詳細に検討した上で、この時期の生業や居住形態について、定住集落の解体や季節的な集合を伴う「遊動」への転向、広域にわたる交易の活発化というような一大転換が生じたと結論づけている（石井 1997b、同 1998）。筆者は石井氏の説に同意した上で、最近、常呂町常呂川河口遺跡で検出されている特徴的な住居址の存在（注 8）、土器に認められるわずかな系統差、細別時期毎に認められる地域間交渉の変化などを指摘し、この時期の交流・社会が完全には広域化・斉一化せず、多少の地域差を保ちつつ推移してゆくことを補足した（熊木 2001、同 2003）。なお、この時期における他の問題としては、かつて指摘された人口減少や（藤本 1988、熊木 2001）、特に釧路地域における海岸部の遺跡の断絶（注 9）（藤本前掲）に対し、どのような評価・説明を行うのかという課題が未解決のまま残っている。

高瀬克範氏は道央部・道東北部の生業を一括し、その性格を「海洋漁撈・狩猟が盛んだが陸棲哺乳類や堅果類・ミレットも積極的に利用しており、利用資源の多様性と安定性を特徴とする」とまとめている（高瀬 2002b、同 2003）。高瀬氏の真意はおそらく、道南部の生業（「道具と成果の『質』を問う」とされる）との対比を際立たせることにあるので、氏の指摘はその意味においてこの地域全体の生業の特徴・性格を適切にとらえていると思われる。ここでは少し詳細な観点から、道東北部における生業や遺跡立地の通時的変化をどう評価するかという問題や、島嶼部・海岸部・内陸部等の、環境の異なる遺跡間の共時的関係・構造をいかに捉えるかという問題について言及してきたが、高瀬氏のような大局的視点からの評価が、北日本における道東北部の生業の性格を際立たせる上で重要であることは論を待たないであろう。

## 6. 今後の課題

最近筆者は、道東北部縄文文化研究における今後の課題として、1) 生業や居住形態の実態、特に縄文晩期と縄文中期との差に関する検討、2) 縄文後半期の斉一化と地域差をめぐる評価、3) サハリン・千島列島方面への分布拡大の背景と意義の検討、の3点をあげた(熊木 2003)。ここでは3)に付随する問題等について言及し、道東北部研究の進む方向について展望してみたい。

すでに述べたように、近年、縄文中期のサハリン・千島列島と北海道との交流に関する研究が活発化している。無論従来の研究でも、縄文後半期の鈴谷式をめぐるサハリン・北海道の相互交流や、千島列島における縄文文化の痕跡は確認されていた。しかし近年では、サハリンとの相互交流が縄文前半期に遡る可能性や、カムチャツカからの影響や相互交流が存在する可能性が改めて指摘されるようになってきている。問題は、縄文前半期におけるこれらの「対外」交流の性格が、縄文文化の一方的な拡大に近いのか、サハリンや千島列島に在地の文化が存在するかたちでの相互交流に近いのか、という点にある。前者であれば、「道東北部」の地理的範囲が拡大するだけで、従来の研究の枠組みが変わることはない。問題は後者のような相互交流が存在した場合であり、その場合には縄文文化研究の枠組みは大きく変更されることになる。カムチャツカについては従来から在地文化の存在がいくつか確認されているが、サハリンについては全く不明であると筆者は認識している。これら「未詳の文化」の存否や実態をうやむやにしたまま、「北からの影響」を主張しても議論は生産的にならないであろう。ロシアとの研究交流をさらに推進するとともに、正しい現状認識に基づいた着実な研究を継続することが今後とも求められよう。

今一つ、道東北部縄文文化研究の置かれている現状について述べておきたい。近年の縄文文化研究において道東北部のデータが用いられる事例を見ると、道央部・道南部との比較対象として取り上げられる場合と、オホーツク文化とのつながりで言及される場合とが多い。改めて言うまでもなく、このような問題設定に基づく比較研究自体は道東北部研究にとっても有効かつ必要なものであり、今後とも推進されるべきである。しかし、特に土器に関する発言に散見されるのであるが、自説への援用を重視するあまりか、データを道東北部研究の成果から切り離して拾い上げるようなケースが未だに若干認められる。道東北部の資料を比較対象として採用する際には、それらが道東北部の文化や研究の文脈の中で占める位置について再確認して欲しいと望む次第である。もっとも道東北部のデータがそのような扱いを受ける背景には、当地の研究不在や成果のアピール不足があることは否めず、その意味では当地の研究を担っている筆者にも責任の一端がある。自戒を込めて記しておきたい。

注

- (1) 今回、発掘調査の動向や調査報告書、展示会図録、概説等については紙幅の都合もあり網羅していない。海外で出版された文献についても同様である。それらの執筆者・関係者にはお詫びを申し上げておきたい。
- (2) ここで言う「日本側の年代観」は、最近の弥生開始年代論争（本文で後述）を考慮に入れていない、従来通りのものである。
- (3) この論争の動向に関しては、高倉 2003、設楽・樋泉 2003 等を参考にした。
- (4) 例えば宇津内Ⅱa 式期でみると、玉類は道央部において西南／東北の系統が併存する一方、土器型式はより東側の道央部／道東部間で排他的な境界線が引かれる。玉類の地域圏は縄文晩期の地域区分を踏襲していると理解できるから、これは土器型式圏よりも儀礼に関する伝統の方が変化が遅い例として解釈できようか。
- (5) 同様の傾向は半島部の南岸、羅臼町でも認められるとしてよいであろう。
- (6) ただし、網走・釧路より西側に位置する上川や空知の内陸部では、縄文晩期末～縄文初頭期に形成されていた遺跡が、「元町 2 式」期前後から一斉に衰退する傾向が認められるようである。この傾向がこの時期の「海洋適応」と関連するのかは不明であるが、注意を払っておきたい。
- (7) 木山論文では触れられていないが、例えば旭川市永山 4 遺跡（友田・岩橋 1998）においても縄文晩期後葉に属するとみられる同様遺構の存在が確認されている。報告者の友田哲弘・岩橋由久の両氏は、これらの遺構が日常的にはなく、「特殊な状況下」で使用されていたとしている。使用頻度の低さという点で、木山氏の指摘との一致が見られる点には注目しておきたい。
- (8) 前稿（熊木 2003）では触れなかったが、かつて名取武光氏が択捉島留別 B 地点で発掘調査した「後北式土器 C」を伴う「竪穴 B」、及びその周辺の数十個の竪穴群（名取 1974）は、竪穴の形状等に疑問が残るものの、常呂川河口遺跡の竪穴の類例に位置づけられる可能性が高い。
- (9) ちなみに釧路地域とは異なり、知床半島の海岸部では後北 C<sub>2</sub>・D 式期になっても遺跡が存続している。

## 引用文献

## &lt;日本語・英語&gt;

- 青柳文吉編 1995 『湧別町川西遺跡』北海道立北方民族博物館
- 青野友哉 1999 「碧玉製管玉と琥珀製玉類からみた続縄文文化の特質」『北海道考古学』第35輯、pp.69-82
- 赤石慎三 2001 「縄文時代晩期後葉から続縄文時代初頭の突瘤文土器について」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』3、pp.19-30
- 秋山洋司編 1998 『H37 遺跡 栄町地点』札幌市教育委員会
- 網走市立郷土博物館編 1986 『網走市立郷土博物館収蔵考古資料目録第1集』網走市立郷土博物館
- 阿部義平 1999 『蝦夷と倭人』青木書店
- 天野哲也 1977 「極東民族史におけるオホーツク文化の位置（上）」『考古学研究』第23巻第4号、pp.110-121
- 天野哲也 1978a 「オホーツク文化の展開と地域差」『北方文化研究』第12号、pp.75-92
- 天野哲也 1978b 「極東民族史におけるオホーツク文化の位置（下）」『考古学研究』第25巻第1号、pp.81-106
- 天野哲也 1981 「第2章第3節 I. 土器・土製品について」『香深井遺跡 下』東京大学出版会、pp.308-328
- 天野哲也 1998 「オホーツク文化の形成と鈴谷式の関係 ―礼文島香深井遺跡群を中心に―」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集刊行会、pp.367-381
- 天野哲也 2003 『クマ祭りの起源』雄山閣
- 天野哲也・小野裕子 2002 「オホーツク文化の形成過程 ―「十和田式」をさかのぼる―」『サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅』北海道大学総合博物館、pp.115-118
- 天野哲也・A.ワシリエフスキー編 2002 『サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅』北海道大学総合博物館
- 荒生健志 1988 『美幌町文化財調査報告Ⅳ 元町3遺跡』美幌町教育委員会
- 荒生健志 1994 『美幌町文化財調査報告ⅩⅡ 元町3遺跡』美幌町教育委員会
- 荒生健志・小林 敬 1986 『美幌町文化財調査報告Ⅱ 元町2遺跡』美幌町教育委員会
- 荒生健志・小林 敬 1988 『美幌町文化財調査報告Ⅲ 元町3遺跡』美幌町教育委員会
- 荒川暢雄・種市幸生・内山真澄 1997 『香深井5遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会

- 五十嵐国宏 1989 「千島列島出土のオホーツク土器」『限室市博物館開設準備室紀要』第3号、pp.9-37
- 石井 淳 1994 「東北地方北部における続縄文土器の編年的考察」『筑波大学先史学・考古学研究』第5号、pp.33-55
- 石井 淳 1997a 「東北地方天王山式成立期における集団の様相（上） —土器属性の二者—」『古代文化』第49巻第7号、pp.20-33
- 石井 淳 1997b 「北日本における後北C<sub>2</sub>・D式期の集団様相」『物質文化』63、pp.23-35
- 石井 淳 1998 「後北式期における生業の転換」『考古学ジャーナル』439、pp.15-20
- 石川 朗 1999 「北海道東部続縄文前半の遺跡と遺物」『シンポジウム海峡と北の考古学 資料集Ⅱ』日本考古学協会 1999 年度釧路大会実行委員会、pp.171-182
- 石川 朗編 1994 『釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅱ』釧路市埋蔵文化財調査センター
- 石川 朗編 1996 『釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅲ』釧路市埋蔵文化財調査センター
- 石川 朗編 1999 『釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅳ』釧路市埋蔵文化財調査センター
- 石田 肇・西本豊弘・松田 功 1994 「ウトロ遺跡神社山地点第三次（1990 年度）発掘調査報告」『知床博物館研究報告』第15集、pp.1-12
- 石附喜三男 1969 「擦文式土器とオホーツク式土器の融合・接触関係」『北海道考古学』第5輯、pp.67-80
- 石附喜三男 1979 「考古学から見た“肅慎（みしはせ）”」大林太良編『日本古代文化の探求・蝦夷』社会思想社、pp.223-247
- 石橋次雄ほか 1975 『十勝太若月 —第三次発掘調査』浦幌町教育委員会
- 石本省三 1984 「北海道南部の続縄文文化」『北海道の研究第1巻 考古編Ⅰ』清文堂、pp.319-354
- 泉 靖一・曾野寿彦編 1967 『オンコロマナイ』東京大学出版会
- 井出靖夫・前川 要編 2004 『北東アジア国際シンポジウム サハリンから北東日本海域における古代・中世交流史の考古学的研究 予稿集』中央大学文学部史学科
- 伊東信雄 1937 「樺太出土の縄文土器」『文化』第4巻第3号、pp.99-108
- 伊東信雄 1942 「樺太先史時代土器編年試論」『喜田貞吉博士追悼記念国史論集』東京大東書館、pp.3-28
- 伊東信雄 1982 「樺太の土器文化」『続縄文土器大成 5—続縄文』講談社、pp.150-153
- 稲垣和幸編 1995 『町村農場1遺跡（5）・町村農場2遺跡（2）』江別市教育委員会
- 因幡勝雄 1977 「北海道紋別市オムサロ遺跡の住居址と遺物について」『古代文化』第29巻第1号、pp.42-48
- 乾 哲也 1997 「北海道奥尻町宮津チャシ表採のオホーツク式土器」『北海道考古学』第33輯、pp.69-75

- 乾 哲也 2000 「第 5 章第 1 節 土器」『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会、pp.109-194
- 乾 哲也 2001 「北海道のへら状骨角器」『考古学ジャーナル』469、pp.12-17
- 乾 芳宏 1988 「大狩部式土器の一考察」『北海道考古学』第 24 輯、pp.85-103
- 乾 芳宏 1989 「続縄文時代前半の年代推定について」『史峰』第 14 号、pp.27-31
- 乾 芳宏 1991a 「北海道北部の恵山式土器について」『史峰』第 16 号、pp.34-39
- 乾 芳宏 1991b 「えりも町東歌別遺跡出土の続縄文土器について」『十勝考古学とともに』十勝考古学研究所、pp.55-62
- 乾 芳宏 1992 「北海道北部の恵山式土器について」『史峰』第 17 号、pp.15-21
- 乾 芳宏 1998 「日高地方の琥珀玉について」『時の絆 道を辿る』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会、pp.159-166
- 乾 芳宏 2002 「天内山遺跡出土の続縄文土器について」『除市水産博物館研究報告』第 5 号、pp.15-22
- 乾 芳宏編 2000 『大川遺跡における考古学的調査Ⅱ』余市町教育委員会
- 今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究（下）」『考古学雑誌』第 63 巻第 1 号、pp.110-148
- 今村啓爾 1983 「文様の割り付けと文様帯」『縄文文化の研究 5 縄文土器Ⅲ』雄山閣、pp.124-150
- 今村啓爾 1997 「縄文時代の住居址数と人口の変動」『住の考古学』同成社、pp.45-60
- 上野秀一 1974 「第 6 章第 3 節 土器群について」『札幌市文化財調査報告書 V』札幌市教育委員会、pp.91-99
- 上野秀一 1992 「北海道における天王山式系土器について —札幌市 K135 遺跡 4 丁目地点出土資料を中心に」『東北文化論のための先史学歴史学論集』今野印刷、pp.763-808
- 上野秀一編 1998 『N30 遺跡』札幌市教育委員会
- 上野秀一・加藤邦雄編 1987 『K135 遺跡 4 丁目地点 5 丁目地点』札幌市教育委員会
- 氏江敏文 1995 「『南貝塚式土器』に関するメモ」『北海道考古学』第 31 輯、pp.229-240
- 右代啓視 1990 「北海道常呂町出土のオホーツク土器 —加藤正コレクション—」『北海道開拓記念館調査報告』第 29 号、pp.1-16
- 右代啓視 1991 「オホーツク文化の年代学的諸問題」『北海道開拓記念館研究年報』第 19 号、pp.23-49
- 右代啓視 1995 「オホーツク文化にかかわる編年的対比」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館、pp.45-64
- 右代啓視 1996 「千島列島採集の考古資料—長尾又六コレクション—」『根室市博物館開設準備室紀要』第 10 号、pp.71-90
- 右代啓視 1999 「擦文文化の拡散と地域戦略」『北海道開拓記念館研究紀要』第 27 号、pp.23-44

- 右代啓視 2003 「オホーツク文化の土器・石器・骨角器」『新北海道の古代 2 続縄文・オホーツク文化』北海道新聞社、pp.134-161
- 右代啓視・小林幸雄・山田悟郎ほか 1998 「枝幸町ウバトマナイチャシ第 1 次発掘調査概報」『「北海道の文化交流史研究事業」中間報告』、pp.69-88
- 臼杵 勲 1985 「ナイフェリド 9 号墓出土の轡の検討」『考古学ジャーナル』243、pp.23-26
- 臼杵 勲 1990 「アムール河下流テバフ遺跡出土土器について」『古代文化』第 42 巻第 10 号、pp.48-59
- 臼杵 勲 1994 「靺鞨文化の年代と地域性」『日本と世界の考古学』雄山閣、pp.342-351
- 臼杵 勲 1995 「オリガ文化の諸問題」『物質文化』第 58 号、pp.20-31
- 臼杵 勲 1999 「アムール河口部のテバフ文化土器 — デリュージン氏論文へのコメントとして —」『物質文化』第 66 号、pp.31-34
- 臼杵 勲 2000 「靺鞨—女真系帯金具について」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版、pp.1078-1095
- 臼杵 勲 2004 「北海道考古学の現状と課題 大陸と北海道」『北海道考古学』第 40 輯、pp.131-137
- 臼杵 勲・熊木俊朗・V. デリュージン・N. スピジェボイ 1999 「1998 年度アムール河口部（ニコラエフスク地区）一般調査報告」『北海道考古学』第 35 輯、pp.33-46
- 臼杵 勲・熊木俊朗 2003 「ニコラエフスク空港 1 遺跡の堅穴住居址と出土資料」『北海道大学総合博物館研究報告』第 1 号、pp.53-60
- 宇田川洋 1977 『北海道の考古学 2』北海道出版企画センター
- 宇田川洋 1980 「7 擦文文化」『北海道考古学講座』みやま書房、pp.151-182
- 宇田川洋 1982 「道東の続縄文土器」『縄文土器大成 5 続縄文』講談社、pp.124-126
- 宇田川洋 1985 「第四章 第四節 栄浦第一遺跡出土の宇津内式土器群に関する若干の考察」『栄浦第一遺跡』東京大学文学部、pp.306-310
- 宇田川洋 2001 「鳥居龍蔵・千島アイヌ・考古学」『近代日本の他者像と自画像』柏書房、pp.153-194
- 宇田川洋編 1975 『幾田』羅臼町教育委員会
- 宇田川洋編 1981 『河野広道ノート 考古篇 1』北海道出版企画センター
- 宇田川洋編 1984 『河野広道ノート 考古篇 5』北海道出版企画センター
- 宇田川洋・熊木俊朗編 2001 『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科
- 宇田川洋・熊木俊朗編 2002 『トコロチャシ跡遺跡群の調査』東京大学大学院人文社会系研究科・常呂町教育委員会
- 宇田川洋・熊木俊朗編 2003 『居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究』東京大学大学院人文社会系研究科
- 内山幸子 2003 「イヌ・イノシシ類利用からみる北海道とサハリンの文化的位罫」『古代文化』55-

- 10、pp.46-56
- 内山幸子・松村博文 1997 「イヌの頭蓋骨の多変量解析」『動物考古学』第8号、pp.1-20
- 内山真澄 1998 「続縄文期における石鏃の変化」『時の絆 道を辿る』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会、pp.167-179
- 内山真澄編 1995 『遺跡発掘調査報告書 利尻富士町役場』利尻富士町教育委員会
- 宇部則保 2002 「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古希記念献呈論文集、pp.247-265
- 扇谷昌康 1963 「幌泉町東歌別遺跡調査概報」『北海道の文化』特集号、pp.9-23
- 大井晴男 1970 「擦文文化とオホーツク文化の関係について」『北方文化研究』第4号、pp.21-70
- 大井晴男 1972a 「第七章第二節 北海道東部における古式の擦文式土器について ―擦文文化とオホーツク文化の関係について、補論1―」『常呂』東京大学文学部、pp.433-446
- 大井晴男 1972b 「礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について ―擦文文化とオホーツク文化の関係について、補論2―」『北方文化研究』第6号、pp.1-36
- 大井晴男 1973 「附 オホーツク式土器について」『円コロマナイ貝塚』東京大学出版会、pp.253-273
- 大井晴男 1978 「オホーツク文化の社会組織」『北方文化研究』第12号、pp.93-138
- 大井晴男 1981 「第2章第5節Ⅲ 香深井A遺跡の考古学的位置」『香深井A遺跡 下』東京大学出版会、pp.530-566
- 大井晴男 1982a 「土器群の型式論的変遷について（上）（下）―型式論再考―」『考古学雑誌』第67巻第3号・第4号、pp.22-46・pp.28-47
- 大井晴男 1982b 「遺跡・遺跡群の型式論的处理について ―オホーツク文化の場合―」『北海道考古学』第18輯、pp.55-81
- 大井晴男 1982c 「I オホーツク文化の諸問題 ―その研究史的回顧―」『シンポジウム オホーツク文化の諸問題』学生社、pp.10-40
- 大井晴男 1984a 「擦文文化といわゆる『アイヌ文化』との関係について」『北方文化研究』第15号、pp.1-201
- 大井晴男 1984b 「斜里町のオホーツク文化遺跡について」『知床博物館研究報告』第6集、pp.17-66
- 大井晴男 1988 「オホーツク文化の荷負者の生業と集団」『考古学叢考 中巻』吉川弘文館、pp.457-485
- 大川 清 1998 『北海二島 禮文・利尻島の考古資料』窯業史博物館
- 大島秀俊 1991 「第5章第3節 後北C<sub>2</sub>・D期における土器組成について」『蘭島餅屋沢遺跡』、pp.714-719
- 大島秀俊編 1991 『蘭島餅屋沢遺跡』小樽市教育委員会
- 大島秀俊編 1992 『チブタシナイ遺跡』小樽市教育委員会

- 大谷敏三・田村俊之編 1982 『末広遺跡における考古学的調査（下）』千歳市教育委員会
- 大塚和義 1968 「オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物 ―その信仰形態の再構成への試み―」『物質文化』第11号、pp.21-32
- 大塚和義・加藤晋平・桜井清彦ほか 1975 「パネル・ディスカッション 海獣狩猟民・オホーツク文化の源流」『どるめん』6、pp.47-90
- 大塚達朗 2000 『縄紋土器研究の新展開』同成社
- 大西秀之 1996 「トビニタイ土器分布圏の諸相」『北海道考古学』第32輯、pp.87-100
- 大貫静夫 1998 『東北アジアの考古学』同成社
- 大貫浩子 1995 「付編Ⅷ 縄文時代晩期末から続縄文時代初頭の土器について」『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会、pp.528-534
- 大沼忠春 1972 「第一部 2.遺跡・遺物から見た別海の歴史」『浜別海遺跡』北地文化研究会、pp.4-28
- 大沼忠春 1977 「北海道考古学講座 6 六、続縄文期」『北海道史研究』第12号、pp.68-80
- 大沼忠春 1982a 「続縄文土器型式の編年」『縄文土器大成 5 続縄文』講談社、p.117：図6
- 大沼忠春 1982b 「後北式土器」『縄文土器大成 5 続縄文』講談社、pp.127-129
- 大沼忠春 1982c 「道央地方の土器」『縄文文化の研究 6 続縄文・南島文化』雄山閣、pp.75-93
- 大沼忠春 1989 「続縄文式土器様式」『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』小学館、pp.357-360
- 大沼忠春 1996a 「北海道の古代社会と文化 ―七～九世紀―」『古代王権と交流 1 古代蝦夷の世界と交流』名著出版、pp.103-140
- 大沼忠春 1996b 「擦文・オホーツク文化と北方社会」『考古学ジャーナル』411、pp.16-19
- 大沼忠春・本田克代 1970 「羅臼町出土のオホーツク式土器について」『北海道考古学』第6輯、pp.27-38
- 大場利夫 1955 「モヨロ貝塚出土の骨角器」『北方文化研究報告』第10輯、pp.173-249
- 大場利夫 1956 「モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器」『北方文化研究報告』第11輯、pp.187-256
- 大場利夫 1957 「モヨロ貝塚出土の石器」『北方文化研究報告』第12輯、pp.167-221
- 大場利夫 1961 「モヨロ貝塚の土器二 ―所謂 前北式・後北式・擦文式土器」『北方文化研究報告』第16輯、pp.143-178
- 大場利夫 1962a 「モヨロ貝塚出土の金属器」『北方文化研究報告』第17輯、pp.165-196
- 大場利夫 1962b 『室蘭遺跡』室蘭市
- 大場利夫 1967 「北海道周辺にみられるオホーツク文化 ―I 樺太―」『北方文化研究』第2号、pp.1-26
- 大場利夫・奥田 寛 1960 『女満別遺跡』女満別町教育委員会
- 大場利夫・菅 正敏 1972 『稚内・宗谷の遺跡（続）』稚内市教育委員会

- 大場利夫・新岡武彦・大井晴男ほか 1972 『枝幸町川尻チャシ調査概報』枝幸町教育委員会
- 大場利夫・大井晴男編 1976 『香深井遺跡 上』東京大学出版会
- 大場利夫・大井晴男編 1981 『香深井遺跡 下』東京大学出版会
- 岡田淳子 1984 「特集によせて」『考古学ジャーナル』235、pp.2-4
- 岡田淳子・梶田光明・西谷栄治ほか 1978 『亦稚貝塚』利尻町教育委員会
- 岡田宏明 1967 「第7章 総括」『オンコロマナイ』東京大学出版会、pp.33-42
- 小野裕子 1996 「道北オホーツク海岸の『地域集団』をめぐる問題（上）（下）」『古代文化』第48巻第5号・第6号、pp.21-36・pp.14-24
- 小野裕子 1998a 「礼文島オホーツク文化「地域集団」の最終末期に関して－遺跡間の関係を中心に－」『時の絆 道を辿る』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会、pp.363-387
- 小野裕子 1998b 「礼文島オホーツク文化の「地域集団」における浜中2遺跡の位置（上）（下）」『古代学研究』第142号・第143号、pp.1-21・pp.20-29
- 小野裕子 1998c 「利尻島亦稚貝塚と礼文島香深井 A 遺跡の時間的關係について」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集刊行会、pp.349-365
- ONO, Hiroko (小野裕子) 2003 Relationship between the Susuya Culture and the Aniwa Culture. 『北海道大学総合博物館研究報告』第1号、pp.19-31
- 小野裕子・天野哲也 2002 「『鈴谷文化』の形成過程」『サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅』北海道大学総合博物館、pp.107-114
- 葛西智義 1994 『北広里3遺跡』深川市教育委員会
- 葛西智義 2002 『北広里3遺跡Ⅲ』深川市教育委員会
- カシツイン, P. V. (金賢善訳) 2003 「クズネツォーヴォ I 遺跡 (1979-2001 年の調査結果)」『北海道大学総合博物館研究報告』第1号、pp.41-44
- 加藤邦雄 1992 「北海道編4 伝統文化と新来の文物」『新版「古代の日本」9 東北・北海道』角川書店、pp.427-448
- 加藤邦雄ほか 1983 『瀬棚南川』瀬棚町教育委員会
- 加藤晋平・澤 四郎編 1982 『続縄文土器大成5-続縄文』講談社
- 金盛典夫 1973 「Ⅲ 宇津内 A 地点」『宇津内遺跡』斜里町教育委員会、pp.12-33
- 金盛典夫 1976 『ピラガ丘遺跡 - 第Ⅲ地点発掘調査報告 -』斜里町教育委員会
- 金盛典夫 1981 「第Ⅰ部第Ⅲ章 須藤遺跡出土の擦文土器とトビニタイ土器」『斜里町文化財調査報告Ⅰ 須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会、pp.123-127
- 金盛典夫 1982 「北見地方の土器」『縄文文化の研究6 続縄文・南島文化』雄山閣、pp.103-114
- 金盛典夫 1996 「宇津内式土器」『日本土器事典』雄山閣、p.583

- 金盛典夫・梶田光明 1984 「オホーツク文化の終末 擦文文化との関係」『考古学ジャーナル』235、pp.25-29
- 金盛典夫・松田 功 1988 『斜里町文化財調査報告Ⅲ 谷田遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会
- 金盛典夫ほか 1981 『斜里町立文化財調査報告Ⅰ 須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会
- 金盛典夫ほか 1983 『斜里町文化財調査報告Ⅱ 尾河台地遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会
- 川内谷 修 1998 「東歌別式土器について」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集刊行会、pp.313-320
- 川上 淳 1996 「先史時代～19 世紀の千島居住者と千島アイヌについて」『根室市博物館開設準備室紀要』第 10 号、pp.111-124
- 川上 淳 2001 「千島通史（1） 考古学から見た先史時代」『根室市博物館開設準備室紀要』第 15 号、pp.71-93
- 菊池徹夫 1972 「第七章第三節 トビニタイ土器群について」『常呂』東京大学文学部、pp.447-461
- 菊池徹夫 1978 「恵山式と江別式」『北奥古代文化』第 10 号、pp.61-70
- 菊池徹夫 1984 『北方考古学の研究』六興出版
- 菊池俊彦 1971 「樺太のオホーツク文化について」『北方文化研究』第 5 号、pp.31-53
- 菊池俊彦 1976 「オホーツク文化に見られる靺鞨・女真系遺物」『北方文化研究』第 10 号、pp.31-117
- 菊池俊彦 1981 「第 3 章 香深井 B 遺跡」『香深井遺跡 下』東京大学出版会、pp.569-652
- 菊池俊彦 1995 『北東アジア古代文化の研究』北海道大学出版会
- 菊池俊彦 1998 「サハリンの鈴谷式土器」『時の絆 道を辿る』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会、pp.283-291
- 北構保男 1992 「標津町三本木オホーツク遺跡試掘調査概報」『しべつの自然 歴史 文化』第 1 号、pp.13-20
- 北構保男編 1986 『根室市別当賀沢一番沢川遺跡発掘調査報告書』根室市教育委員会
- 北構保男・須見 洋 1953 「北海道根室半島トーサムボロ・オホーツク式遺跡調査報告」『上代文化』24 輯、pp.31-48
- 北構保男・前田 潮・山浦 清ほか 1984 「北海道根室市トーサムボロ遺跡オホーツク文化住居址」『日本考古学年報』34、227-229
- 木村 高 1999 「東北地方北部における弥生系土器と古式土師器の並行関係 ―続縄文土器との共伴事例から」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第 4 号、pp.47-62
- 木村英明 1975 『続縄文時代の墓墳群の研究』紅葉山 33 号遺跡調査団・石狩町教育委員会

- 木村英明 1982 「『後北式』土器の成立について」『考古学研究』第28巻第4号、pp.12-25
- 木村英明 1986 「Ⅱ地域別文献解題 1 北海道 5 続縄文時代」『岩波講座日本考古学別巻 1 日本考古学研究の現状』岩波書店、pp.128-131
- 木山克彦 2003 「北海道北部における続縄文前半期の集石土坑について」『海と考古学』第6号、pp.1-21
- 木山克彦・I. YA. シェフコムード・F. S. コシーツィナ 2003 「バリシャヤ・ブフタ 1 遺跡出土の土器が提起するもの」『古代文化』第55巻第11号、pp.20-32
- 清野謙次 1969 『日本貝塚の研究』岩波書店
- 工藤研治 1992 「三本木遺跡の範囲確認調査（試掘）について」『しべつの自然 歴史 文化』第1号、pp.21-30
- 工藤研治 1994 「続縄文時代」『北海道考古学』第30輯、pp.29-36
- 工藤研治 1998 「続縄文前半期の生業にみる地域的在り方」『考古学ジャーナル』439、pp.10-14
- 工藤研治 1999 「北海道的地域文化の形成」『日本考古学協会 1999 年度大会研究発表要旨』日本考古学協会、pp.24-25
- 工藤研治・村田 大 1999 「北海道的地域文化の形成」『シンポジウム海峡と北の考古学 資料集Ⅱ』日本考古学協会 1999 年度釧路大会実行委員会、pp.77-108
- 工藤 肇・赤石慎三・鈴木耕榮 1992 『静川 37 遺跡』苫小牧市教育委員会
- 工藤 肇・兵藤千秋 2002 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅸ』苫小牧市教育委員会
- 工藤義衛 1986 「第Ⅳ章第1節 土器群をめぐる諸問題」『三の山 2 遺跡』富良野市教育委員会、pp.29-37
- 久保勝範 1978 『北見市中ノ島遺跡発掘調査報告書』北見市教育委員会
- 熊木俊朗 1995 「第5章第1節 土器」『遺跡発掘調査報告書 利尻富士町役場』利尻富士町教育委員会、pp.17-56
- 熊木俊朗 1996 「北海道北部の『鈴谷式土器』について」『古代文化』第48巻第5号、pp.12-20
- 熊木俊朗 1997 「宇津内式土器の編年」『東京大学考古学研究室研究紀要』第15号、pp.1-38
- 熊木俊朗 2000a 「近年のオホーツク文化研究展望－北海道北部・サハリン・アムール河口部の土器研究を中心に－」『情報祭祀考古』第16・17号合併号、pp.37-42
- 熊木俊朗 2000b 「第7章第1節 香深井 5 遺跡の変遷と居住パターンに関する問題」『香深井 5 遺跡発掘調査報告書 (2)』礼文町教育委員会、pp.151-158
- 熊木俊朗 2000c 「第7章第2節 香深井 5 遺跡出土『元地式』土器について」『香深井 5 遺跡発掘調査報告書 (2)』礼文町教育委員会、pp.159-167
- 熊木俊朗 2000d 「下田ノ沢式土器の再検討」『物質文化』69、pp.40-58

- 熊木俊朗 2000e 「青森県八戸市出土「北大式」注口土器の再紹介」『北方探求』第2号、pp.6-11
- 熊木俊朗 2001 「後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の展開と地域差」『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科、pp.176-217
- 熊木俊朗 2002 「オホーツク人と死」『北の異界 古代オホーツクと氷民文化』東京大学総合研究博物館、pp.121-129
- 熊木俊朗 2003 「道東北部の縄文文化」『新北海道の古代 2 縄文・オホーツク文化』北海道新聞社、pp.50-69
- 熊木俊朗 2004 「鈴谷式土器編年再論」『アイヌ文化の成立』宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会、pp.167-189
- 熊木俊朗・ワレリー・デリュエギン・佐藤宏之ほか 2002 「ロシア・アムール河口部のオホーツク文化 ―ニコラエフスク空港1遺跡の発掘調査成果―」『日本考古学協会第68回（2002年度）総会研究発表要旨』日本考古学協会、pp.163-166
- 甲野勇ほか編 1964 『日本原始美術 2 土偶・装身具』講談社
- 河野広道 1933a 「樺太の旅（I）（II）」『人類学雑誌』第48巻第3号・第5号、pp.156-163・pp.296-303
- 河野広道 1933b 「北海道式薄手縄紋土器群」『北海道原始文化聚英』民族工芸研究会、pp.16-18
- 河野広道 1955 「第一編 先史時代史」『斜里町史』斜里町役場、pp.1-75
- 河野広道 1958 「先史時代篇」『網走市史 上巻』網走市役所、pp.3-267
- 河野広道 1959 「北海道の土器」『郷土の科学』23別冊、pp.1-42
- 河野本道 1973 「縄文晩期頃の鉄片の発見」『考古学ジャーナル』77、pp.20-21
- 越田賢一郎 2003 「北方社会の物質文化 鉄から見た北海道島の歴史」『日本の時代史 19 蝦夷島と北方世界』吉川弘文館、pp.90-125
- 越田賢一郎編 2003 『奥尻町青苗砂丘遺跡2』北海道立埋蔵文化財センター
- 小杉 康 2001 「縄文時代の集団と社会組織」『現代の考古学 6 村落と社会の考古学』朝倉書店、pp.115-134
- 児玉作左衛門 1948 『モヨロ貝塚』北海道原始文化研究会
- 後藤寿一 1933 「北見國枝幸郡枝幸村の遺跡について」『蝦夷往来』第10号、pp.150-163
- 小林達雄編 1989 『縄文土器大観 4 後期 晩期 縄文』小学館
- 小林正史 1989 「先史時代土器の器種分類について」『北越考古学』第2号、pp.1-24
- 駒井和愛編 1964 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻』東京大学文学部
- 佐川俊一編 1993 『滝里遺跡群Ⅲ』（財）北海道埋蔵文化財センター
- 佐々木和久 2001 「こはくの話」『北海道立埋蔵文化財センター年報』2、pp.26-33
- 佐藤一夫・宮夫靖夫編 1984 『タプコプ』苫小牧市教育委員会

- 佐藤和利 1976 「北海道オホーツク海沿岸のオホーツク文化期の遺物（資料紹介）」『もうぺっと』7、pp.49-54
- 佐藤孝雄 1996 「続縄文文化期以降の狩猟・漁撈活動」『博物館フォーラム アイヌ文化の成立を考える』北海道立北方民族博物館、pp.101-109
- 佐藤隆広編 1985 『ホロベツ砂丘遺跡』枝幸町教育委員会
- 佐藤隆広編 1994 『目梨泊遺跡』枝幸町教育委員会
- 佐藤達夫 1964 「附・モヨロ貝塚の縄文、続縄文及び擦文土器について」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻』東京大学文学部、pp.89-96
- 佐藤達夫 1972a 「第五章第十節 13 号竪穴及び付近の遺構 遺物」『常呂』東京大学文学部、pp.375-391
- 佐藤達夫 1972b 「第七章第四節 擦紋土器の変遷について」『常呂』東京大学文学部、pp.462-488
- 佐藤達夫 1974 「縄紋式土器 二 土器型式の実態－五領ヶ台式と勝坂式の間－」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館、pp.81-102
- 佐藤 剛 2000 「北海道における弥生時代後期～古墳時代中期併行の土器編年」『第 9 回東日本埋蔵文化財研究会 東日本弥生時代後期の土器編年 第 2 分冊』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会、pp.1054-1065
- 佐藤信行 1984 「宮城県内の北海道系遺物」『宮城の研究 1 考古学篇』清文堂、pp.426-478
- 佐藤宏之・ヤロスラフ V. クズミン・ミッチェル D. グラスコック 2002 「サハリン島出土の先史時代黒曜石製石器の原産地分析と黒曜石の流通」『北海道考古学』第 38 輯、pp.1-13
- 佐原 真 1999 「北海道と沖縄」『古代史の論点 6 日本人の起源と地域性』小学館、pp.125-161
- サハリン考古学研究会編 1994 『樺太西海岸の考古資料』サハリン考古学研究会
- 澤 四郎 1963 「第 2 篇 V 考察」『北海道阿寒町の文化財 先史文化篇第一輯』阿寒町教育委員会、pp.64-70
- 澤 四郎 1969 「Ⅲ 釧路川流域の先史時代 先土器～縄文」『釧路川』釧路市、pp.216-271
- 澤 四郎 1972 「V 総括」『北海道厚岸町下田ノ沢遺跡』厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会、pp.42-45
- 澤 四郎 1982 「釧路地方の土器」『縄文文化の研究 6 続縄文・南島文化』雄山閣、pp.94-102
- 澤 四郎ほか 1971 『羅臼』羅臼町教育委員会
- 澤 四郎編 1972 『北海道厚岸町下田ノ沢遺跡』厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会
- 澤 四郎編 1978a 『釧路市興津遺跡発掘報告Ⅱ』釧路市郷土博物館・釧路市埋蔵文化財調査センター
- 澤 四郎編 1978b 『弟子屈町矢沢遺跡調査報告 ー第 2 次調査ー』弟子屈町教育委員会
- 澤 四郎編 1979 『釧路市興津遺跡発掘報告Ⅲ』釧路市郷土博物館・釧路市埋蔵文化財調査センター

- 澤 四郎・西 幸隆編 1975 『釧路市桂恋フシココタンチャシ調査報告』釧路市立郷土博物館
- 澤 四郎・西 幸隆編 1976 『釧路市三津浦遺跡発掘報告』釧路市立郷土博物館
- 澤 四郎・西 幸隆編 1977 『釧路市興津遺跡発掘報告』釧路市立郷土博物館
- 澤 四郎・松田 猛編 1977 『弟子屈町矢沢遺跡調査報告 ー第1次調査ー』弟子屈町教育委員会
- 設楽博己・樋泉岳二 2003 「考古学研究会第4回東京例会の報告『AMS年代法と弥生時代年代論』」  
『考古学研究』第50巻第3号、pp.5-10
- 設楽博己編 2001 『国立歴史民俗博物館資料図録 1 落合計策縄文時代遺物コレクション』国立歴史民俗博物館
- 市立函館博物館編 1983 『児玉コレクション目録 I 先史・考古資料編』市立函館博物館
- 市立函館博物館編 1987 『児玉コレクション目録 II アイヌ民族資料編』市立函館博物館
- 市立函館博物館編 1994 『市立函館博物館蔵品目録7 考古資料編4』市立函館博物館
- 杉浦重信 1994 「平成5年度無頭川遺跡発掘調査の概要」『富良野市郷土館研究報告』第2号、pp.45-53
- 杉浦重信 1998 「考古学より見た北海道・千島・カムチャツカ」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集刊行会、pp.511-540
- 杉浦重信 1999 「千島・カムチャツカの様相」『シンポジウム海峡と北の考古学 資料集Ⅱ』日本考古学協会 1999年度釧路大会実行委員会、pp.183-208
- 杉浦重信編 1986 『三の山2遺跡』富良野市教育委員会
- 梶田光明 1992 「オホーツクの狩猟民」『新版古代の日本9 東北・北海道』角川書店、pp.475-492
- 梶田光明 1993 「択捉島留別付近採集の遺物」『標津の自然 歴史 文化』第2号、pp.33-59
- 梶田光明・梶田美枝子 1979 『標津の竪穴Ⅱ』標津町教育委員会
- 梶田光明・梶田美枝子編 1992 『伊茶仁チシネ第1竪穴群遺跡』標津町教育委員会
- 杉山壽榮男 1979 『日本原始繊維工芸史 原始編』北海道出版企画センター
- 鈴木一巳・佐々木利和・豊原熙司・辻 清明 2003 「座談会 伊勢神宮に眠る千島列島の縄文土器と中瀬庄吉氏」『目の眼』321、pp.34-39
- 鈴木公雄 1968 「安行式土器における文様単位と割り付け」『日本考古学協会昭和43年度大会研究発表要旨』日本考古学協会、pp.5-6
- SUZUKI, Kimio 1970 “Design System in Later Jomon Pottery” Journal of the Anthropological Society of Nippon (人類学雑誌) Vol.78 No.1、pp.38-49
- 鈴木 信 1998 「X-3 I 黒層の土器について」三浦正人・鈴木信編『千歳市ユカンボシ C15 遺跡(1)』北海道埋蔵文化財センター、pp.329-286
- 鈴木 信 1999 「北大式以降の墓制について」『シンポジウム海峡と北の考古学 資料集Ⅱ』日本

- 考古学協会 1999 年度釧路大会実行委員会、pp.255-208
- 鈴木 信 2003 「Ⅶ-3 道央部における続縄文土器の編年」『千歳市ユカンボシ C15 遺跡 (6)』北海道埋蔵文化財センター、pp.410-452
- 鈴木靖民編 1996 『古代蝦夷の世界と交流』名著出版
- 瀬川拓郎 1999 「東西蝦夷地の原型」北海道考古学第 35 輯、pp.83-88
- 瀬川拓郎ほか 1989 『萩ヶ丘遺跡』旭川市教育委員会
- 高倉洋彰 2003 「弥生文化開始期の新たな年代観をめぐって」『考古学ジャーナル』510、pp.4-7
- 高瀬克範 1998 「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』第 34 輯、pp.21-41
- 高瀬克範 2002a 「2001 年の考古学会の動向 北海道 続縄文・擦文・オホーツク文化以降」『考古学ジャーナル』488、pp.154-156
- 高瀬克範 2002b 「東北日本の弥生・続縄文の生業」『東アジアの生業形態Ⅱ 資料集』東京大学大学院人文社会系研究科、pp.27-40
- 高瀬克範 2003 「日本列島東北部における弥生・続縄文期の食料資源利用」『縄文と弥生 予稿集』大学合同考古学シンポジウム実行委員会、pp.51-56
- 高瀬克範・福田正宏 2001 「入舟遺跡出土の土器について―道央の終末期縄紋土器と初期続縄文土器の編年―」『余市水産博物館研究報告』第 4 号、pp.59-68
- 鷹野光行 1981 「北海道東部の土器」『縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ』雄山閣、pp.207-215
- 鷹野光行 1983 「舟形土器について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第 36 巻、pp.47-69
- 高橋 理 1993 「ウトロ遺跡神社山地点発掘報告」『知床博物館研究報告』第 14 集、pp.63-72
- 高橋 健ほか 2003 「北海道日本海沿岸地域における考古学的調査 (2001 年度)」『利尻研究』第 22 号、pp.79-96
- 高橋信雄 1993 「東北北部の古墳文化と続縄文文化」『二十一世紀への考古学』雄山閣、pp.259-268
- 高橋正勝 1984 「北海道中央部の続縄文時代 ―江別の恵山式土器群と江別太式・坊主山式土器群―」『北海道の研究第 1 巻 考古編Ⅰ』清文堂、pp.354-384
- 高橋正勝編 1975 『後北式土器実測図集』北海道先史学協会
- 高橋正勝編 1979 『江別太遺跡』江別市教育委員会
- 高橋正勝編 1982 『萩ヶ丘遺跡』江別市教育委員会
- 高橋正勝編 1985 『江別市文化財調査報告書ⅩⅨ 旧豊平河畔』江別市教育委員会
- 高橋正勝・梶田光明・宮塚義人 1980 『アヨロ』白老町教育委員会
- 高島孝宗 2003 「オホーツク文化の信仰と儀礼」『新北海道の古代 2 続縄文・オホーツク文化』北海道新聞社、pp.162-181
- 竹石健二・澤田大多郎 2002 「本学所蔵の樺太の土器」『史叢』第 66 号、pp.1-26

引用文献

- 武田 修 1993 『史跡 常呂遺跡』常呂町教育委員会
- 武田 修 1995 『TK73 遺跡 常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査概報 (7)』常呂町教育委員会
- 武田 修編 1986 『トコロチャシ南尾根遺跡 -1985 年度-』常呂町教育委員会
- 武田 修編 1988 『TK67 遺跡』常呂町教育委員会
- 武田 修編 1995 『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会
- 武田 修編 1996 『常呂川河口遺跡 (1)』常呂町教育委員会
- 武田 修編 2000 『常呂川河口遺跡 (2)』常呂町教育委員会
- 武田 修編 2002 『常呂川河口遺跡 (3)』常呂町教育委員会
- 田才雅彦 1983 「北大式土器」『北奥古代文化』第 14 号、pp.20-29
- 田沢 巖ほか 1959 『知床半島チブスケ遺跡』斜里町教育委員会
- 田中良之・松永幸男 1984 「広域土器分布圏の諸相」『古文化談叢』第 14 集、pp.81-117
- 谷井 彪 1979 「縄文土器の単位とその意味 (上) (下)」『古代文化』第 31 巻第 2 号・3 号、pp.39-51・pp.30-49
- 種市幸生 1980 「8 オホーツク文化」『北海道考古学講座』みやま書房、pp.183-209
- 種市幸生 1997 「第 5 章 まとめ」『香深井 5 遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会、pp.91-95
- 種屯内遺跡調査団 2002 「利尻町種屯内遺跡発掘調査報告 総括編 1 事実関係」『利尻研究』第 21 号、pp.131-150
- 田部 淳・田村リラコほか 1985 『南川 2 遺跡』瀬棚町教育委員会
- 千歳市教育委員会編 1978 『祝梅三角山 D 遺跡における考古学的調査』千歳市教育委員会
- 千代 肇 1965 「北海道の続縄文文化と編年について」北海道考古学第 1 輯、pp.19-38
- 千代 肇 1984 『続縄文時代の生活様式』ニュー・サイエンス社
- 塚本浩司 2002 「擦文土器の編年と地域差について」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 17 号、pp.145-184
- 塚本浩司 2003 「擦文時代の遺跡分布の変遷について」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 18 号、pp.1-34
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 手塚 薫 2001 「千島列島北部オンネコタン島ネモ湾に所在する周堤をもつ特殊な遺構について」『北海道開拓記念館研究紀要』第 29 号、pp.81-92
- デリュージン, V. 1999 「アムール河口部におけるオホーツク文化併行土器の分類・編年」『物質文化』66、pp.20-30
- デリュージン, V. 2003 「テバフ式土器の発展の問題について」『北海道大学総合博物館研究

- 報告』第1号、pp.61-67
- デリュージン, V.・デネコ, A. 2003 「環オホーツク海文化圏の『種族』についての諸問題」  
『海と考古学』第5号、pp.1-18
- 東北大学文学部考古学研究室編 1982 『考古学資料図録 vol. 2』東北大学文学部
- 土肥研晶・種市幸生 1993 『声聞川大曲遺跡』稚内市教育委員会
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター編 1987 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』苫小牧市教育委員会
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター編 1995 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』苫小牧市教育委員会
- 友田哲弘・岩橋由久 1998 「第7章 1 焼礫を伴うピットについて」『永山4遺跡Ⅲ』旭川市教育委員会、pp.149-152
- 豊原熙司 2003 「北海道の先史時代概要」『目の眼』321、pp.40-45
- 豊原熙司・涌坂周一 1981 『植別川遺跡』羅臼町教育委員会
- 直井孝一編 1976 『WakkaoiⅡ ー石狩、ワッカオイ地点Dにおける続縄文末期の発掘調査』石狩町教育委員会
- 直井孝一編 1977 『WakkaoiⅢ ー石狩、ワッカオイ地点Dにおける続縄文末期の発掘調査』石狩町教育委員会
- 仲田茂司 1997 「東北・北海道における古墳時代中・後期土器様式の編年」『日本考古学』第4号、pp.109-121
- 長沼 孝 1997 「北海道の石器」『農耕開始期の石器組成3』国立歴史民俗博物館、pp.27-64
- 中村五郎 1973 「北海道南部の続縄紋土器編年」『北海道考古学』第9輯、pp.81-99
- 中村五郎 1992 「古式土師器・続縄文土器編年をめぐって」『北海道考古学』第28輯、pp.73-85
- 名取武光 1948 『モヨロ遺跡と考古学』札幌講談社
- 名取武光 1974 「南千島の発掘旅行記」『アイヌと考古学(二)』北海道出版企画センター、pp.4-49
- 新岡武彦 1940 「邦領樺太西海岸北部の遺跡調査概報」『人類学雑誌』第55巻第8号、pp.18-37
- 新岡武彦 1970 「旧邦領樺太先史土器論考」『北海道考古学』第6輯、pp.1-14
- 新岡武彦・宇田川洋編 1992 『サハリン南部の考古資料』北海道出版企画センター
- 西田 茂編 1988 『深川市内園2遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター
- 西本豊弘編 2000 『国立歴史民俗博物館研究報告第85集 浜中2遺跡発掘調査報告』国立歴史民俗博物館
- 西本豊弘編 2003 『国立歴史民俗博物館研究報告第107集 アイヌ文化の成立過程についてⅡ』国立歴史民俗博物館
- 西谷栄治 1996 「道北地域における続縄文時代の展開について」『博物館フォーラム アイヌ文化の成立を考える』北海道立北方民族博物館、pp.111-114

- 西脇対名夫 2001 「魚形石器ノート」『渡島半島の考古学』南北海道考古学情報交換会、pp.116-125
- 野村 崇 1991 「サハリン西海岸クズネツォーヴォ I 遺跡出土の遺物」『北海道開拓記念館調査報告』第 30 号、pp.39-47
- 野村 崇・大島秀俊 1992 「北海道余市町フゴッペ洞窟出土の土器 (1)」『北海道開拓記念館調査報告』第 31 号、pp.49-65
- 野村 崇・杉浦重信 1995 「北限の縄文文化」『季刊考古学』第 50 号、pp.62-69
- 野村 崇・平川善祥・山田悟郎ほか 1982 『ニツ岩』北海道開拓記念館
- 羽賀憲二 1980 「札幌市西区琴似二十四軒出土の土器」『北海道考古学会だより』第 8 号、表紙裏
- 羽賀憲二編 1987 『N295 遺跡』札幌市教育委員会
- 羽賀憲二編 1994 『N316 遺跡』札幌市教育委員会
- 羽賀憲二編 1999 『N156 遺跡』札幌市教育委員会
- 畑 宏明ほか 1986 『美沢側流域の遺跡群 IX』北海道埋蔵文化財センター
- 馬場 脩 1940 「樺太の考古学的概観」『人類学・先史学講座 第 17 巻』雄山閣、pp.1-119
- 馬場 脩ほか 1936 「座談会 北海道・千島・樺太の古代文化を検討する (二)」『ミネルヴァ』第 1 巻第 7 号、pp.31-36
- 林 謙作 1981 「晩期の土器 北海道」『縄文土器大成 4 晩期』講談社、pp.137-139
- 林 謙作 1988 「II-3-3-(2)-1 土器」『北大構内の遺跡 6』北海道大学、pp.26-35
- 林 謙作 1990a 「縄紋時代史 6.縄文土器の型式 (1)」『季刊考古学』第 32 号、pp.85-92
- 林 謙作 1990b 「素山上層式の再検討 -M・Y・I の主題による変奏曲-」『伊東信雄先生追悼 考古学古代史論攷』pp.105-162
- 林 謙作 1991 「縄紋時代史 8.縄文土器の型式 (3)」『季刊考古学』第 34 号、pp.91-99
- 平川善祥 1995 「サハリン・オホーツク文化末期の様相」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館、pp.135-156
- 平川善祥編 1995 『雄武堅穴群遺跡』北海道開拓記念館
- 広田良成 2003 「続縄文時代の環状装飾品について」『北方島文化研究』第 1 号、pp.51-57
- 福井淳一 1998 「アイヌ文化における銛漁の諸段階」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集刊行会、pp.435-463
- 福井淳一 2001 「北海道の骨角牙製釣針」『考古学ジャーナル』469、pp.6-11
- 福井淳一 2003 「続縄文時代の釣針」『北方島文化研究』第 1 号、pp.15-30
- 福田正宏 1999 「種屯内貝塚の晩期縄紋土器と続縄文土器について」『海と考古学』第 1 号、pp.9-20
- 福田正宏 2000 「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」『古代』第 108 号、pp.129-158
- 福田正宏 2003 「北海道における亀ヶ岡式土器と在地系土器の系統」『海と考古学』第 5 号、pp.19-

- 福田正宏・前田 潮 1998 「縄文時代後・晩期における礼文島」『筑波大学先史学・考古学研究』第9号、pp.35-56
- 福田正宏ほか 2002 「北海道日本海沿岸地域における考古学的調査（1999・2000 年度）」『利尻研究』第21号、pp.93-130
- 藤沢隆史編 2001 『オションナイ2遺跡』礼文町教育委員会
- 藤本 強 1966 「オホーツク土器について」『考古学雑誌』第51巻第4号、pp.28-44
- 藤本 強 1977 「第三章第一節 本遺跡発見の住居址に関する若干の考察」『岐阜第三遺跡』東京大学文学部、pp.127-133
- 藤本 強 1979 『北辺の遺跡』教育社
- 藤本 強 1982a 「第四節 東斜面のピット群」『岐阜第二遺跡 -1981年度-』常呂町、pp.14-22
- 藤本 強 1982b 「続縄文文化概論」加藤晋平ほか編『縄文文化の研究 6 続縄文・南島文化』雄山閣、pp.10-20
- 藤本 強 1988 『もう二つの日本文化』東京大学出版会
- 藤本 強編 1972 『常呂』東京大学文学部
- 藤本 強編 1976 『トコロチャシ南尾根遺跡』常呂町
- 藤本 強編 1977 『岐阜第三遺跡』東京大学文学部
- 藤本 強編 1985 『栄浦第一遺跡』東京大学文学部
- 藤本 強・宇田川洋編 1977 『岐阜第二遺跡』常呂町
- 藤本 強・宇田川洋編 1982 『岐阜第二遺跡 -1981年度-』常呂町
- 藤本英夫 1961 「北海道日高国新冠村大狩部の墳墓遺跡 -第一次調査-」『古代学』第9巻第3号、pp.159-168
- 富良野工業高校郷土史研究会編 1968 『中富良野町本幸遺跡発掘報告 辻地点』中富良野町教育委員会
- 本田克代・豊原照司・涌坂周一 1980 『船見町高台遺跡』羅臼町教育委員会
- 本間元樹 1995 「続縄文文化の鉄器」『北海道考古学』第31輯、pp.187-204
- 前田 潮 1976 「オホーツク文化の確立過程について」『史学研究』第106号（前田1987再録：33-64）
- 前田 潮 1987 『北方狩猟民の考古学』同成社
- 前田 潮 1999 「オホーツク文化黎明期の宗谷海峡」『海と考古学』第1号、pp.1-8
- 前田 潮 2002 『オホーツクの考古学』同成社
- 前田 潮・藤沢隆史編 2001 『香深井6遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 前田 潮・山浦清編 1992 『浜中2遺跡の発掘調査』礼文町教育委員会

- 増田精一・岩崎卓也・北構保男ほか 1974 『オンネモト遺跡』東京教育大学文学部
- 松尾 隆 1990 「雄武町におけるオホーツク文化期遺跡の分布と土器」『北海道考古学』第 26 輯、pp.73-90
- 松下 亘 1965 「北海道の土器にみられる突瘤文について」『物質文化』第 5 号、pp.14-28
- 松下 亘ほか 1964 『知床岬 ―知床半島の古代文化を探る―』市立網走郷土博物館
- 松田 功 1993 『斜里町文化財調査報告VI オンネベツ川西側台地遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会
- 松田 功 1999 「知床半島の遺跡」『「しやり歴史再考」報告集』斜里町立知床博物館、pp.8-10・45-60
- 松田 功編 1995 『オシヤマツ川遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会
- 松村博文 2003 「渡来系弥生人の拡散と続縄文時代人」『国立歴史民俗博物館研究報告第 107 集 ア イヌ文化の成立過程についてⅡ』国立歴史民俗博物館、pp.199-215
- 松谷純一編 1995 『ユカンボシ E7 遺跡』恵庭市教育委員会
- 三浦圭介 1994 「古代東北地方北部の生業にみる地域差」『北日本の考古学』吉川弘文館、pp.149-174
- 三浦正人・鎌田 望・鈴木 信編 1995 『オサツ 2 遺跡 (1)・オサツ 14 遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 三浦正人・鈴木 信編 1998 『ユカンボシ C15 遺跡 (1)』北海道埋蔵文化財センター
- 皆川洋一編 2002 『奥尻町青苗砂丘遺跡』北海道立埋蔵文化財センター
- 簗島栄紀 2001 『古代国家と北方社会』吉川弘文館
- 簗島栄紀 2002 「文献史からみた青苗砂丘遺跡の提起するもの」『第 3 回北アジア調査研究報告会』北アジア調査研究報告会実行委員会、pp.44-46
- 宮 宏明編 1983 『開成 4 遺跡』北見市教育委員会
- 宮 宏明編 2000 『大川遺跡における考古学的調査Ⅰ』余市町教育委員会
- 森 秀之 1997 「擦文・オホーツク文化期の出土刀剣に関する覚書 (2)」『紋別市立郷土博物館報告』第 10 号、pp.33-44
- 森田知忠 1967 「北海道の続縄文文化」『古代文化』第 19 巻第 2 号、pp.39-50
- 森田知忠 1996 「続縄文土器」『日本土器事典』雄山閣、pp.576-577
- 八木光則 1996 「蕨手刀の変遷と性格」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会、pp.375-396
- 八木光則 1998 「東北北部の終末期古墳」『北海道考古学会 1998 年度研究大会要旨集 北海道式古墳の系譜』北海道考古学会、pp.3-12
- 柳澤清一 1999 「北方編年研究ノート ―道東「オホーツク式」の編年とその周辺―」『先史考古学研究』第 7 号、pp.51-99
- 柳澤清一 2000 「南千島から利尻町へ ―道東編年と道北編年の対比―」『東邦考古』24、pp.12-37

- 柳澤清一 2001 「礼文・利尻島から知床・根室半島へ ー道北・道東「オホーツク式」・トビニタイ・擦紋土器編年の対比」『先史考古学研究』第8号、pp.65-105
- 柳澤清一 2003 「北方編年再考 その(1) ー川西遺跡編年と「オホーツク式土器」伴出事例の謎ー」『千葉大学 人文研究』第2号、pp.103-171
- 八幡一郎・増田精一・岩崎卓也編 1966 『北海道根室の先史遺跡』根室市教育委員会
- 山浦 清 1985 「樺太先史土器管見(Ⅰ)」『考古学雑誌』第71巻第1号、pp.44-68
- 山浦 清 2002a 「1993年におけるサハリン・ウスチアインスコエ遺跡の調査」『サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅』北海道大学総合博物館、pp.30-43
- 山浦 清 2002b 「北海道日本海側のオホーツク文化遺跡について」『第3回北アジア調査研究報告会』北アジア調査研究報告会実行委員会、pp.47-49
- 山田悟郎 1996 「千島列島の遺跡分布と海洋適応について」『北方の島嶼における人と文化』北海道立北方民族博物館、pp.1-18(英文)
- 山田悟郎・平川善祥・小林幸雄ほか 1995 「オホーツク文化の遺跡から出土した大陸系遺物」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館、pp.65-80
- 山内清男 1932 「日本遠古之文化 Ⅰ 縄紋土器文化の真相」『ドルメン』第1巻第4号(1967新刷：pp.1-4)
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号(1967新刷：pp.45-48)
- 山内清男 1939 「日本遠古之文化 補注付 新版」『山内清男先史考古学論文集』第1冊 先史考古学会、pp.1-44(1967新刷)
- 山内清男 1964 「縄紋式土器・総論」『日本原始美術Ⅰ』講談社、pp.148-158
- 横山英介編 1993 『池田3遺跡』池田町教育委員会
- 吉崎昌一・岡田淳子編 1988 『北大構内の遺跡6』北海道大学
- 吉崎昌一ほか編 1979 『聖山』七飯町教育委員会
- 米村喜男衛 1935 「北海道網走町モヨロ貝塚中の人骨埋葬に就いて」『人類学雑誌』第52巻第2号、pp.47-56
- 米村喜男衛 1950 『モヨロ貝塚資料集』網走郷土博物館・野村書店
- 米村喜男衛 1969 『モヨロ貝塚』講談社
- 米村哲英・金盛典夫 1973 『宇津内遺跡』斜里町教育委員会
- 米村哲英ほか 1972 『ピラガ丘遺跡 ー第Ⅱ地点発掘調査概報ー』斜里町教育委員会
- 立正大学文学部考古学研究室 2002 「久保常晴先生収集樺太考古資料」『考古学論究』第8号、pp.12-47
- 涌坂周一編 1984 『松法川北岸遺跡』羅臼町教育委員会

引用文献

- 涌坂周一編 1985 『チトライ川北岸遺跡』羅臼町教育委員会
- 涌坂周一編 1988 『ポン春刈古丹川北岸遺跡』羅臼町教育委員会
- 涌坂周一編 1989 『幾田遺跡(2)』羅臼町教育委員会
- 涌坂周一編 1996 『相泊遺跡(2)』羅臼町教育委員会
- ワシリエフスキー, A.A. 1992 「サハリン島の新石器文化(概説)」『北海道考古学』第28輯、pp.115-136  
(木村英明訳)
- ワシリエフスキー, A.A. 2003 「サハリンにおける前オホーツク文化の諸問題」『北海道大学総合博物館研究報告』第1号、pp.1-18 (井上紘一・福田知子訳)
- 和田英昭・宇田川洋・熊木俊朗ほか 2001 『モヨロ貝塚試掘調査概報 ー平成13年度ー』網走市教育委員会
- 和田英昭・宇田川洋・熊木俊朗ほか 2003 『モヨロ貝塚試掘調査概報 ー平成14年度ー』網走市教育委員会

<中国語>

- 喬 梁 1994 「靺鞨陶器分期初探」『北方文物』1994年第二期、pp.30-41
- 譚英傑・趙虹光 1993 「黒龍江中游鉄器時代文化分期浅論」『考古与文物』1993年第4期、pp.80-93

<ロシア語>

- Василевский, А. А. 2002a Памятники Эпи Дземона на Сахалине. 『サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅』北海道大学総合博物館、pp.1-23
- Василевский, А. А. 2002b Сусуя и Эпи-Дземон. 『サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅』北海道大学総合博物館、pp.85-100
- Васильевский, Р. С. и В. А. Голубев 1976 Древние поселения на Сахалине (Сусуйская стоянка). Новосибирск.
- Герус, Т. А. 1977 Исследования древних культур нижнего Амура. Исследования по археологии Сахалинской области. Владивосток. pp.38-53
- Герус, Т. А. 1979 Археологические памятники залива Терпения.

- Археология Амуро—Сахалинского региона. Владивосток, pp.30-36
- Горбунов, С. В. и М. М. Прокофьев 1994 Археологические памятники острова Монерон. Южно—Сахалинск.
- Дьякова, О. В. 1984 Ранне—средневековая керамика Дальнего Востока СССР. Москва.
- Козырева, Р. В. 1967 Древний Сахалин. Ленинград
- Копытько, В. Н. 1989 Тебаховская культура (некоторые результаты исследований). Проблемы изучения памятников каменного века и палеометалла Дальнего Востока и Сибири. Владивосток. pp.24-28
- Лосан, Е. М. 1996 К Вопросу о периодизации Тебаховской культуры. Археология Северной пасифики. Владивосток. pp.372-378
- Стешенко, Т. В. 1979 Раскопки на поселении Найбучи I. Археология Амуро—Сахалинского региона. Владивосток. pp.37-47
- Федорчук, В. Д. 1998 Керамика поселений с раковинными кучами северного побережья залива Терпения. Вестник Сахалинского музея V. Южно—Сахалинск. pp.143-162
- Шубин, В. О. 1979 Раскопки многослойного поселения Озерск I. Археология Амуро—Сахалинского региона. Владивосток. pp.5-29

## 図版出典

第1図 上：栄浦第二遺跡13号竪穴木号床面出土土器群（抜粋）

1～9：藤本編 1972

第2図 栄浦第二・第一遺跡の土器群

1～9：武田編 1995

第3図 元町2・3遺跡の土器群（「元町2式」土器）

1・5・6・10：荒生・小林 1986 2：荒生・小林 1988 3・4・7・8：荒生 1988 9：荒生 1994

第4図 「元町2式」土器

1・2・3：金盛ほか 1983 4・5：藤本編 1972

第7図 宇津内Ⅱa式土器の貼付文の展開図

1・2：金盛ほか 1983

第9図 宇津内Ⅱa式土器編年図

1・2：金盛ほか 1983 3～7：藤本編 1985 8～10：藤本編 1972 11～14：米村・金盛 1973

第10図 上：尾河台地遺跡27号竪穴床面出土土器群（宇津内ⅡbⅠ式）

1～7：金盛ほか 1983

第11図 岐阜第二遺跡Pit28出土土器群

1・2：藤本・宇田川編 1982

第13図 興津式土器（上段）と網走地域の関連資料（下段）

1～3・5～9：石川編 1994 4：梶田 1993 10：澤編 1979 11・12：武田編 1996 13：久保 1978

第14図 下田ノ沢Ⅰ式土器

1・3・4：澤編 1972 2・5・6：澤編 1979

第15図 下田ノ沢ⅡⅠ式土器（上段）・後北式B式と下田ノ沢ⅡⅠ式の「折衷」土器（下段左）・下田ノ沢式の伝統を残す後北C<sub>2</sub>・D式土器（下段右）

1：澤編 1972 2：宇田川編 1975 3：涌坂編 1996 4：澤ほか 1971

第18図 「下田ノ沢系宇津内ⅡbⅠ式」土器（上段）と「宇津内系下田ノ沢ⅡⅠ式」土器（下段）

1・6：涌坂編 1989 2・3：宇田川編 1975 4・5：涌坂編 1988

第 19 図 1～11：「砂沢式～二枚橋式併行期」の土器群（5 は二枚橋式）

12～17：「恵山式アヨロ 1 式併行期」の土器群（12 は恵山式アヨロ 1 式）

1・2：羽賀 1980 3：宮編 2000 4：松谷編 1995 5～7：秋山編 1998 8～11：上野編 1998 12・13：高橋ほか 1980 14～17：高橋編 1979

第 20 図 上段：「江別太Ⅲ6 層段階」の土器群（1・2・7 は恵山式アヨロ 2a 式、3～6・8 は在地系）

下段：「恵山式アヨロ 2b 式相当段階」の土器群

1～6・9～12：高橋編 1979 7・8：高橋ほか 1980 13～16：木村 1975 17～25：羽賀編 1987

第 21 図 後北 A 式土器（24 は併行する恵山式アヨロ 3a 式）

1・2・5・14～19・20～26：高橋編 1979 6：羽賀編 1999 3・4・7：葛西 2002 8・12・13：葛西 1994 9・10・11：高橋編 1985 27：稲垣編 1995

第 22 図 後北 B 式土器（27 は併行する恵山式アヨロ 3b 式）

1：高橋編 1979 2・3・23・25：三浦・鈴木編 1998 4・26：三浦・鎌田・鈴木編 1995 5・7～9・17～19・22：高橋編 1975 6・12・13・15・29：高橋編 1982 10・11・16・20：佐藤・宮夫編 1984 14・27：高橋ほか 1980 21：工藤・兵藤 2002 24：乾編 2000 28：乾 2002

第 23 図 後北 C<sub>1</sub> 式土器

1・4・5～7・11・16～18：高橋編 1975) 2・8：苫小牧市埋蔵文化財調査センター編 1987 3・13・14・19～23：乾 2002 9：畑ほか 1986 10：佐藤・宮夫編 1984 12：上野・加藤編 1987 15：工藤ほか 1992

第 24 図 1～6：北広里 3 遺跡住居 1 出土土器群（1～3：道央部系統・4～6：道東北部系統）

7・8：栄浦第二遺跡 11 号竪穴床面下ピット 3 出土土器群

1～6：葛西 1994 7・8：藤本編 1972

第 26 図 続縄文前半期土器群の型式変遷過程

1・6：秋山編 1998 2・4・8・11・12：高橋編 1979 3・5：高橋ほか 1980 7：松谷編 1995 9・10：木村 1975 13：葛西 1994 14：葛西 2002 15・16：佐藤・宮夫編 1984 17・19・21：金盛ほか 1983 18・20：藤本編 1985

第 27 図 後北式土器の文様要素

上：宇田川・熊木編 2001 下：武田編 2000

第 32 図 北海道東部の後北式土器編年 1

1・2・7・11：武田編 1995 3・5・6：藤本編 1972 4・8：武田編 1996 9：北構編 1986 10：澤ほか 1971 12：藤本編 1976 13：金盛ほか 1981

第 33 図 北海道東部の後北式土器編年 2

1・3：武田編 2000 2：梶田・梶田 1979 4～7・12～14：宇田川・熊木編 2001 8：武田編 1996 9～11：松田編 1995

**第 34 図 北海道東部の後北式土器編年 3**

1・11～14：宇田川・熊木編 2001 2：宮編 1983 3：松田編 1995 4・6・7：藤本編 1985 5：武田 1993 8・9：大場 1961 10：武田編 2000

**第 37 図 後北 C2・D 式 I 期の土器（上：道央部・道南部 下：南千島択捉島）**

1：田部・田村ほか 1985 2：加藤ほか 1983 3・4：吉崎ほか編 1979 5：苫小牧埋蔵文化財センター編 1995 6：野村・大島 1992 7・8：大島編 1991 9：杉山 1979

**第 38 図～第 39 図 鈴木信氏による道央部の編年**

鈴木 1998

**第 40 図 鈴谷式土器タイプ A1**

1：伊東 1942 2・3・7・8：内山編 1995 4～6：大場・大井編 1981

**第 41 図 鈴谷式土器タイプ A2**

1・4・5：В а с и л е в с к и й ・ Г о л у б е в 1976 2・3：Г е р у с 1979 6～8：泉・曾野編 1967

**第 42 図 鈴谷式土器タイプ A**

1～9：山浦 2002a

**第 43 図 鈴谷式土器タイプ B**

1～5：山浦 2002a 6～11：新岡 1940

なお、第 4 図 1～9、第 5 図 1～5 については、報文の執筆者である山浦清氏の許可を得て、筆者が実測した土器断面図を原図に付加した。さらに第 42 図 8、第 43 図 1・2・5 については拓本も筆者の作成である。原図の変更を快諾された山浦氏にお礼を申し上げる。

**第 44 図 鈴谷式土器タイプ C1（1～11）・タイプ C2（12・13）**

1：前田 2002 2～6：Ш у б и н 1979 7：伊東 1942 9・12・13：大場 1967 10：筆者作成 11：武田編 2002

**第 45 図 声問川大曲遺跡Ⅲ群 B 類土器**

1～4：土肥・種市 1993

**第 47 図 サハリン北部ハンツーザ・アムール河口部ウゴールナヤ出土土器**

1～15：山浦 1985 16・17：臼杵ほか 1999

第50図 口縁部文様要素の分類 (1)

1～3 : 大場・大井編 1981 4 : 大場・大井編 1976

第51図 口縁部文様要素の分類 (2)

5・6 : 大場・大井編 1981 7～14 : 大場・大井編 1976

第55図 器形(土器上半部プロポーション)の分類

上 : 大場・大井編 1976

第63図 刺突文群土器 (1 : 前半段階・2～4 : 後半段階)

1 : 荒川ほか 1997 2～4 : 大場・大井編 1981

第64図 刻文Ⅰ群土器

5～7 : 大場・大井編 1981

第65図 刻文Ⅱ群土器

8～10 : 大場・大井編 1976

第66図 沈線文群土器前半段階

11～13 : 大場・大井編 1976

第67図 沈線文群土器後半段階 (14～16)・道東部貼付文系土器と併行する土器群 (17・18)

14 : 大場・大井編 1976 15・16 : 佐藤編 1994 17 : 大井 1972b 18 : 岡田ほか 1978

第69図 口縁部文様要素の分類

8 : 大場 1956

第71図 胴部文様要素の分類

6 : 駒井編 1964

第76図 モヨロⅠ群 1a 類土器 (1)

5 : 和田ほか 2003

第78図 モヨロⅠ群 1b 類土器

9・12 : 大場 1956

第80図 モヨロⅠ群 2a 類土器 (2)

18 : 和田ほか 2003

第81図 モヨロⅠ群 2b 類土器 (1)

19：和田ほか 2003 22：大場 1956

第 83 図 モヨロⅡ群土器

28・30：大場 1956

第 84 図 モヨロⅢ群土器

36・38・39・42・43：大場 1956

第 85 図 モヨロⅣ群土器（1）

44：和田ほか 2001

第 87 図 モヨロⅤ群 1 類（49～51・53・54）・Ⅴ群 2 類土器（52）

49：駒井編 1964 50・51・54：大場 1956

モヨロ貝塚資料の閲覧・実測に際しては、市立函館博物館の長谷部一弘氏、函館市北方民族資料館の佐々木愛氏、北海道立北方民族博物館の角達之助氏に一方ならぬご助力をいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

第 89 図 相泊遺跡出土土器群（1）

1・2・3・5：澤ほか 1971 4：涌坂編 1996

第 90 図 相泊遺跡出土土器群（2）

7・8・11・12：澤ほか 1971 6・9・10：涌坂編 1996

第 91 図 相泊遺跡出土土器群（3）

13・14：涌坂編 1996

第 92 図 相泊遺跡出土土器群（4）

15・16・18：澤ほか 1971 17：涌坂編 1996

第 94 図 栄浦第二遺跡 9 号竪穴オホーツク下層遺構出土土器群

1～4：藤本編 1972

第 95 図・第 96 図 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点 7 号外側竪穴骨塚出土土器群

1～4：宇田川・熊木編 2003

第 98 図 北海道のオホーツク土器の型式変遷過程

1：澤ほか 1971 7・8：宇田川・熊木編 2003 9：大場・大井編 1981 10：大場・大井編 1976 11：前田・藤沢編 2001 12：佐藤編 1994 13：大井 1972b

第 100 図～第 104 図 ニコラエフスク空港 1 遺跡出土土器群

筆者および福田正宏氏が中心となって作成した。実測・拓本・トレースに際しては高橋健・塚本浩司・山根美紀の各氏の助力を得た。

**第 107 図 上段：江の浦 B 式の標式資料（伊東 1982）**

下段左：東北大学所蔵の江の浦 B 式（東北大学文学部考古学研究室編 1982）

下段右 1～3：臼杵氏分類による江の浦 B 式と類似土器（臼杵 1990）

**第 108 図 上段：伊東氏自身が示した江の浦 A 式（伊東 1982）**

下段 1～6：臼杵氏分類による江の浦 A 式（臼杵 1990）

**第 109 図 江の浦式サハリン 1 類土器**

1・2：Федрчук 1998 3・5：立正大学文学部考古学研究室 2002 4：竹石・澤田 2002 6：サハリン考古学研究会編 1994 7：Стешенко 1979 8：Горбунов 1994

**第 110 図 江の浦式サハリン 2 類土器**

9・17：Стешенко 1979 10：竹石・澤田 2002 11・15：新岡・宇田川 1992 12：Васильевский и Голубев 1976 13・14：サハリン考古学研究会編 1994 15：新岡・宇田川 1992 16：設楽編 2001 18・19：Федрчук 1998

**第 111 図 江の浦式サハリン 3 類土器**

20・21・22：右代 2003 23：Стешенко 1979 24：Шубин 1979 25・29・34：設楽編 2001 26・28・31：Васильевский и Голубев 1976 27・30・33：野村 1991 32・38：立正大考古学研究室 2002 35・36・37・39：新岡・宇田川 1992

**第 113 図 擦文土器の器形を模したオホーツク土器（1～11）**

擦文土器（12）

1・11：大場・大井編 1981 2～6・9・10：大場・大井編 1976 7・8：佐藤編 1994 12：千歳市教育委員会編 1978

**第 114 図 オホーツク土器（1～4）と擦文土器（5～9）の文様構成**

1～3・9：大場・大井編 1976 4：前田・藤沢編 2001 5～8：大谷・田村編 1982

**第 115 図 道北部刻文Ⅱ群土器から沈線文群土器への変遷過程**

1～14：大場・大井編 1976

※以上に記載がなく、本文中にも引用の明記がない図版は全て筆者が作成した。なおそれら図版のトレースに際しては山根美紀氏の助力を得た。

なお、ここに記した資料の閲覧に際しては、多数の関係者のご協力をいただいている。ここや本文中に記した方々のほかには逐一御名前を明記しないが、ここに感謝の意を申し上げます。

## あとがき

本論脱稿後、本論の内容と関連する論文等がいくつか発表されている。主なものをあげておく（発行順）。

臼杵 勲 『鉄器時代の東北アジア』同成社、2004 年。

大井晴男 『アイヌ前史の研究』吉川弘文館、2004 年。

菊池俊彦 『環オホーツク海古代文化の研究』北海道大学図書刊行会、2004 年。

柳澤清一 「北方編年再考 その（2）」『千葉大学 人文研究』第 33 号、pp.149-218、2004 年。

大井晴男 「‘貼付文系オホーツク式土器群’の‘型式論’的変遷を考える」『北海道考古学』第 40 輯、pp.167-184、2004 年。

臼杵氏の著書では、オホーツク文化の成立過程について広域的な視点から問題提起がなされており、注目される。

菊池氏の著書は既発表論文の集成であるので、関連箇所は本論内でコメントしてある。

柳澤氏論文については内容や方法に目新しい点はなく、氏の既発表論文に対する批判をそのまま適用できるであろう。本論第 10 章注 6 を参照されたい。

大井氏の著書・論文では、これまで氏が主張してきた「型式論」に則って筆者論文に対する批判がなされている。大井氏の「型式論」に対する筆者の考えは本論第 7 章に記したとおりであり、改めて反論を加える必要はないであろう。もっともオホーツク貼付文系土器群については筆者自身の編年案を提示できていないので、近い将来に大井氏の説に対する対案は示さねばなるまい。

このように筆者にとって早急の課題となるのは、現在、常呂町トコロチャシ跡遺跡や網走市モヨロ貝塚で調査が進行中の、オホーツク文化貼付文期に係る研究であろう。さしあたっては、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点やモヨロ貝塚の正式な発掘調査報告書の作成、各地に眠るモヨロ貝塚の未報告資料の集成・紹介などに向けて努力しつつ、当座の課題を完成させていきたいと考えている。

# 続縄文土器編年表

時期区分※1		道南部	道央部	道東部網走	道東部釧路	道北端部
前半	早期	(尾白内Ⅱ群)	砂沢式～二枚橋式併行期 (琴似式・N30等)	(柴浦第二・第一)	(フシコタン下層)	(メクマ)
		二枚橋式新段階		元町2式	興津式	(種屯内Ⅰc・Ⅰd)
	前期	アヨロ1式	アヨロ1式併行期※2	宇津内ⅡaⅠ式 宇津内ⅡaⅡ式	下田ノ沢Ⅰ式	(声間川大曲ⅢB)
		アヨロ2a式	江別太Ⅲ6層段階			※3
		アヨロ2b式	アヨロ2b式相当 (N295等)			
	中期	アヨロ3a式	後北A式	宇津内ⅡbⅠ式	下田ノ沢Ⅱ1式	※3
		アヨロ3b式	後北B式			
後半	後期	(聖山KⅡ群)	後北C1式	宇津内ⅡbⅡ式	後北C1式※4	鈴谷式
		後北C2・D式【Ⅰ期】 後北C2・D式【Ⅱ期】 後北C2・D式【Ⅲ期】				
		北大Ⅰ				
	晩期	北大Ⅱ※5				十和田式 (オホーツク土器)

- ※1 時期区分は、宇田川洋氏の5期区分(宇田川1982)をもとに、早期を一部改変して設定した。
- ※2 早期の土器群から波状沈線文・波状縄線文が消滅した段階。その他の型式学的特徴は早期とほぼ同じ。  
江別太遺跡Ⅴ～Ⅶ層の一部等が相当すると思われるが詳細不明。
- ※3 宇津内Ⅱb式や後北A式等が断片的に確認されている。
- ※4 南千島では下田ノ沢Ⅱ2式が確認されている。
- ※5 道東部網走地域ではほとんど出土しない。また道央部と道東部釧路地域の間では地域差が著しい。

# 続縄文・擦文・オホーツク土器編年表

暦年代	続縄文・擦文	オホーツク							
		時期区分	アムール河口	サハリン北部	サハリン南部	北海道北部	北海道東部		
5世紀	北大Ⅰ式	Ⅰ	十和田式期前半	(未詳)		十和田式前半	北大Ⅰ式		
6世紀	北大Ⅱ式		十和田式期後半			十和田式後半	(十和田式後半)		
7世紀前葉 ～中葉	塚本編年1期	Ⅱ	刻文期前半	江の浦式Ⅰ類と刻文Ⅰ群とモヨロⅠ群1a類					
			刻文期後半	テバフ式 c類	江の浦式2類		刻文Ⅱ群	モヨロⅠ群1b類・2類 モヨロⅡ群	
7世紀後葉 ～8世紀前葉	塚本編年2期	Ⅲ	沈線文期前半	テバフ式 b類	江の浦式 河口部3類	沈線文群前半	モヨロⅢ群・Ⅴ群1類		
			沈線文期後半			沈線文群後半	モヨロⅣ群・Ⅴ群2類		
8世紀中葉 ～後葉	塚本編年3期	Ⅳ	貼付文期前半			江の浦式サハリン3類	藤本d群併行	藤本d群	
			貼付文期後半				(藤本e群)	藤本e群	
9世紀前葉 ～10世紀前葉	宇田川編年前期	トビニタイ期前半	テバフ式 a類	(南貝塚式?)	南貝塚式 (・東多来加式?)		元地式	擦文	トビニタイⅡ
10世紀中葉 ～11世紀前半	宇田川編年中期								トビニタイⅢ・Ⅰ
11世紀後半 ～12世紀前半	宇田川編年後期								
12世紀後半 ～13世紀代	宇田川編年晩期								

## 環オホーツク海沿岸地域古代土器の研究

2004年5月30日 発行

著者・発行者 くまき としあき  
熊木 俊朗

〒093-0207

北海道常呂郡常呂町字常呂 549-6

0152-54-1281

kumaki@ohotoku26.or.jp

製本 株式会社 小林印刷